
蒼い空、白い天使

ゴウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い空、白い天使

【Nコード】

N7222J

【作者名】

ゴウ

【あらすじ】

2036年。

科学が少し進歩し、人とポケモンが会話することが出来るようになった頃。そんな世界で繰り広げられた、ある少年とポケモンの旅を描いた物語である。《現在、第五章進行中》

第一話『とある星での物語』（前書き）

連載小説4つという未知なる世界への挑戦です。

でも、がんばって執筆していきますので、応援よろしくお願いします。

では、早速ご覧ください。

第一話、とある星での物語、

2036年。

少しばかり技術が進み、人とポケモンとの生活が営まれているとある星。

そこには70億人という多くの人間と、それよりもかなり多い数のポケモンが住んでいた。

そして、これは、とある少年と、とあるポケモンのお話……。

アスナタウン、という町で、1人の少年が家で寝ていた。

現在、午前8時。

そこに、1匹のポケモン、体毛が白色のイーブイがてくてくやってきて、その少年の身体の上に乗った。

因みにその少年の容姿は、青色の髪を持ち、一応かっこいい。ただ、今は少し髪がぼさぼさである。

そして、

『おーきーろー！朝だよー！あさあさあさー！』

大きな声を出し、ポケモンの言葉でこう喋っている。

当然、人間にポケモンの言葉など理解できるはずが無いのだが、この世界は違う。

「……ふわあ〜……。」

『おー、やっと起きた。早くしないとボクが飢え死にしちゃうよ？』

「……大丈夫だ。1回食事を摂らない程度で飢えて死ぬことは無い。」

「

この世界では、研究者側は発表していないのだが、人とポケモンが話せる技術なるものがあるらしく、こうして会話ができるのだ。

『ねえねえ、早く早くー！』

「……分かったから、少し落ち着け、エンジェル。」

『了解です、ソウ軍曹。』

「……誰が軍曹だ？」

少年、灰原蒼（はこばら しょう）と、イーブイ、エンジェルはこうして一日の始まりを迎えた。

『うーん、やっぱりおいしいね、ソウのご飯』

それはどうも、と返す蒼は、手でぼさぼさの髪を整えた。

その後、自分のご飯を食べようとしたのだが、

「……エンジェル。」

『なあに？』

「……俺の飯を食ったろ？」

『またまたあー。ボクがそんなことするわけ無いでしょ〜？』

ふむ、と素直に頷く蒼。
そして、

「……………で、おいしかったか？今日の朝食。」

『さっき言ったじゃん、おいしかったって。』

「……………俺の飯もか？」

『うん！……………あ。』

そうかそうかと言ったきり、そっぽを向いてしまった蒼。

『待つて待つて、本当にごめんなさい！』

「……………その台詞は聞き飽きた。」

『……………』

「……………で、どうするの？俺の飯。」

『……………うう。』

エンジェルは下を向いてしまった。
しかし、

「……………ま、いいや。昼ごはん抜きにするなら許してやるよ。」

『無理！それは絶対に無理！』

どうやら、エンジェルにとって、食事を摂れるかどうかは死活問題らしい。

「……………その前に、お前はその食欲を何とかできないのか？」

『いいじゃん、たくさん食べると大きくなるって聞いた事あるし！』

「……………それとこれとは別問題。それ以前にお前メスだろ？そんな食べたら第一太るぞ？」

『毎日かなり動いてるから問題なし！ていうか、それは男女差別なんだよ！?』

はいはい、と蒼はいまにも飛び掛ってきそうなエンジェルをなだめてやる。

今更ながら、エンジェルは名前からも察せるとおり、メスである。いわゆる、ボクっ娘だ。

「……………で、どうするの、俺の飯？腹減ったんだけど。」

『……………』

「……………どうするの?」

『……………ごめんなさい……………』

エンジェルは涙目になって、下を向きながら謝った。

「……………ま、いいや。サンドウィッチあるし。」

『ええ!?!?』

「……………こんな簡単にお前を騙せると思わなかったよ。」

『い、いじわる……………!!』

……………という訳で、朝食をようやく食べ始めた蒼だった。

それから三十分後。

「……………そんじゃ、学校に行きますかね。」

『行……………』

性格が真逆な1人と1匹は、身支度を揃え（エンジェルには身支度も何もないが）、学校へと歩いて行った。蒼は、まだ十五歳。中学三年生なのだ。しかし、もうあと1日で卒業である。

そして、蒼とエンジェルは学校の前に着いた。朝の会まで、まだ十分もある。

「……少し早かったか？」
「いいじゃん。早く来た方が。」

と、話しながら自分たちの教室のドアを開けた。

人とポケモンの1人と1匹のペアが三十組いるので、合計60はいる。

そのため、教室は少し広めである。

「うーっす、蒼。」
「……ああ。てか、相変わらずその口調なのか。いい加減直せよ。」
「癖になつてて直らねーよん。」

こんな口調で話すのが、クラスメイトの中川なかがわ時雨しぐれである。パートナ
ーは……。

『おはよー！アロマ』
『お、おはよう、ごぞいます……。』

いかにも自信がないと言わんばかりのポケモンは、チコリータだった。名はアロマというらしい。

『元気ないねー？どしたの？』

『え、大丈夫、ですよ……。』

『大丈夫そうに見えないから聞いているのにー。』

「……エンジェルにしては珍しく正論だな。」

『うるさいー！ーっ！』

むきーっ、とエンジェルは蒼に牙を向ける。

「そんで、どうしちゃうのさ？」

「……旅に出るか、高校生に大人しくなるか、か？」

「そういうことや。」

「……エセ関西弁を使うな。」

そう、中学を卒業した後、三つの選択肢がある。

1つ目は、高校に行く。

2つ目は、高校に行かず、それぞれしたい仕事をする。

ここまででは普通だが、この世界は3つ目の選択肢がある。

それが、『旅に出る』というものである。

この世界では、旅に出てよい年齢がある。それが、中学校を卒業した15歳以上の人の対象となる。無論、危険はいつぱいだが、それなりに物資は揃えてくれる（地図とか）。

「……俺は旅に出てみたい。そして、いろんなものを見てみたい。」

『ボクも旅に出た〜い!』

蒼とエンジェルはこんな感じなのだが、

「俺達は出て行けないからなー。つまんねーのー。」

『……私も、旅に出てみたいです。』

この会話から分かるとおり、旅に出たい人は大勢いるのだ。

しかし、そんなことを続けてはいつの間にか町は衰退してしまう。

そこで考案されたのが、年に3回行う、『旅人試験』と呼ばれるものである。

レベル30以上のポケモンで試験官と一対一のバトルをし、勝てば旅に出られるのだ。

当然、この勝負に勝って旅人になった人は少ない。試験官のポケモンが強いからだ。レベルは合わせるのでそういう問題ではなく、技術面で圧倒的に試験官が優位なだけである。

「でも、厳しいやろ?その試験。」

「……でも、こいつならやってくれるさ。な?」

『まっかせなさい』

と、エンジェルは言った。

因みに、エンジェルのレベルは35である。

旅人試験まで、あと、およそ一日。

第一話 『とある星での物語』 (後書き)

蒼「……しかし、俺達に白羽の矢が立ったわけだ。」

エンジェル『でも、これはこれでいいかも』

……こんな対称的な1人と1匹のペアですが、どうか見守ってあげてください。

第二話、特訓＋バトル（前書き）

バトルといっても、結構短めですね。

蒼「……そうか。」

でも、次回は試験だし、否応なく長くするからね？

蒼「……ああ、分かった。」

第二話、特訓＋バトル

とりあえず、学校から帰ってきた蒼とエンジェルは、明日の試験に備えて特訓を始めることにした。

『で、何するの?』

そうだな、と蒼は黙り込む。

レベル35……。その時点でイーブイが最低限使える技は、尻尾を振る、体当たり、手助け、砂かけ、鳴き声、電光石火、噛み付くである。

しかし、これだけではどうも勝ち目がないと前から練習をしたおかげで、さらに影分身、穴を掘るを覚えた。

そして、2ヶ月前から練習している技がある。

「……やっぱり、アイアンテールのマスターからだろ。」

『じゃ、やっぱりあの岩を砕けっこと?』

エンジェルが前足で指したのは、イーブイの大きさの二倍はあろうという岩だった。

「……ああ。明日が試験だからな。少しでも完成度を高めないと。」

『そうだね』

エンジェルがその岩に近づくと、目の前で立ち止まった。

そして、尻尾を立てて精神を集中し始めた。尻尾がだんだん銀色に輝き……。

『いっくよー!アイアンテール!』

勢いよく、エンジェルは銀色に光る尻尾を岩にぶつけて砕こうとした。

……が、岩にぶつける瞬間に光が消えてしまい、結果、尻尾を思い切り岩に叩きつけることとなった。

『……でも、痛くないから大丈夫!』

「……尻尾がふさふさで良かったな。」

尻尾の周りの体毛がクッションとなり、尻尾自体にダメージは無い。

『よし!もう一回!』

それから二、三時間練習したが、その日、アイアンテールが完成することはなかった。

その日の夕方。

アイアンテールが未完成に終わってしまったことを不満に思っているのか、むすーっとした顔で床で丸まっているエンジェルと、食事の仕度をしている蒼が台所にいた。

あるうことか、床にアイアンテールを打ち込もうとするが、床に当たる前に光が消えてしまう。

『……うっ……。』

「……あゝ、あんまり落ち込むな。その覚えてる技で勝てばいいん

だから。」

『それもそうだけどさ……。』

と、エンジェルは自分の白い体毛を前足で梳かす仕草をしている。

「……あんまり落ち込むと、明日の試験に影響するし。ほら、食って忘れる。」

『うん、そうする。』

と、その時。

『郵便でーす!』

はいはい、と蒼が食事作りを中断して、玄関へと行く。

そして、覗き穴から誰が来たのかを見た。

それは、クリーム色の身体に、頭に1本の小さな角、2本の触覚じみたものをつけ、小さな翼を背中につけたドラゴンのようなポケモンだった。ただ違うのは、郵便物を入れたかばんを背負っているところだけだった。

「……ああ、いつもお疲れさん。」

『いや、こんなのは朝飯前です。』

「……もう夕方だけだな。」

あはは、と笑いながら、そのポケモン、カイリユーは1つの封筒を渡した。

ポケモンでの配達。ポケモンと人間の会話が成り立つからこそ出来ることもある。

『それでは、まだ配達がありますので。』

「……ああ、ありがとな。」

蒼がそう言った瞬間、カイリユーは空へとあっという間に飛んでいってしまった。

リビングに戻り、椅子に座ってからもらった封筒をしてみる。

そこには、『灰原 蒼様 ポケモン第一中学校』と、自分の家とその中学の住所だけ書いてあった。

因みに、ポケモン第一中学校とは、当然ながら蒼の通っている学校名である。

『ねえ、何それ？』

「……さあな。多分、明日の試験についてじゃねえか？」

と言ってみる。

果たして、手紙の内容はまさしくそれだった。

手紙には、

『灰原 蒼 出席番号 22 クラス 3 - 2

旅人試験を受ける資格をあなたに授けます。

日時と場所はこの手紙の届いた翌日、つまり3月12日午前9時半より執り行いますので、午前9時には本校校庭に集合してください。この手紙と一緒に、ルール説明書と受験票を同封します。特に、受験票は必ず持ってきてください。それでは、健闘を祈ります。

『ポケモン第一中学校』

そう書いてあり、封筒の中を見ると、薄めのルール説明書と、一枚

の受験票が確かに入っていた。

『おお、凄いね』

「……試験まで、後ちよいだな。」

とここまで言つて、何かが焼け焦げた臭いがしていることに気づく蒼とエンジェル。

「……あ。忘れてた。」

『げほっ！何か臭いよ？』

と、蒼が慌てて台所に行くも、時既に遅し。

今日は魚を焼いていたのだが、見事に片面だけよく焼けすぎていた。

「……仕方ない、これでいいや。」

『ええー！？』

「……じゃ、作り直すか？もう碌ろくな材料ないから、そこら辺の雑草でも炒めてやるけど。」

『……うう、分かったよお……。』

と、渋々エンジェルは了承し、片面だけ黒焦げになった魚とご飯、野菜が添えられた。これが今日の夕食。

「……いただきます。」

『いただきます。』

と、声をそろえて言い、食べ始めた。

『そういえばさ、対戦相手って誰だろっかね？』

エンジェルが黒焦げの部分を上手く避けながら魚を食べながら言った。

「……ああ、確かに。相手が格闘タイプでないことを祈ろう。」
「……だったら、ボク、一発でやられちゃうかも……。」

その時はその時だ、と蒼が何とも適当な台詞を言った。

『そんなんでいいの?』

「……いいじゃねえか。でも、出来るなら明日の試験は受かりたいよな。」

『そうだね。ボクも早く旅に出たいし!』

と、誤って黒焦げの部分を食べってしまったのか、言った後に苦い顔をするエンジェル。

「……因みに、その焦げ。発癌性あるからな。」

『げほっ!?!?こ、怖い事言わないでよう!』

涙目になりながらぺっぺっと焦げを吐き出すエンジェル。

「……ま、いいや。」

『何がまあいいやなのさ!?!?』

「……ん、せつかくこの話題を打ち切ろうと思ったのに。これ以上追求するなら、もっと恐ろしい事言ってやるっか?」

『う、うわああああん!?!』

悪い悪い、ともう既に泣いてしまったエンジェルをなだめる蒼。

『そもそもっ！魚を焦げさせたのが悪いんだよ！？』
「……知らない知らない。それに、焦げは避けて食べばいいだろ？」
『……』

と、返す言葉が最早無くなってしまったエンジェルは、黙り込んでしまった。

「……ほら、早く食っちまえて。明日は少し早く起きるからな。」
『……？いつもよりも集合時間が遅いの？』
「……早くに目覚めて、少し特訓して慣らすからだ。じゃないと、起きてからすぐにバトル、ってなったら身体がついていけないだろ？」
『確かに、それはそうかも。』

そして、夕食を食べ終え、その後風呂に入って寝た。

翌日。

『……ねえ。』
「……何だよ？」
『早すぎない？起きるの……、ふわあ……』

現在時刻は、朝六時。

『まだ三時間もあるんだよ？』
「……まあ、そりゃそうだけど。八時間以上も寝られれば上等だろ？」

まあね、とエンジェルが言い返す。

『で、何をするの？』

「……やっぱり、アイアンテールの練習だろ。」

『よしー！』

という訳で、やる気十分なので岩砕きに挑戦。

『行くよー！』

と、尻尾を昨日同様に立てて、精神集中のおかげで銀色に光る。そして、

『せいやあー！』

と、尻尾をそのまま回す。

しかし、またしても光は消え、尻尾をそのまま岩にぶつける羽目に。

『うーん、何で上手くいかないんだろ？』

エンジェルが首を傾げるところに、蒼が言った。

「……あのさ、気の緩みがあるんじゃないか？」

『気の……緩み？』

「……そう、だって、アイアンテールを当てる寸前じゃねえか、いつも失敗するの。」

『うん。』

エンジェルは蒼の言うことに頷く。

「……だったら、もう確実に当たる、って言う気の緩みが原因じゃねえのか、って。」
『…………』

確かに、とエンジェルは心の中で呟く。

「……だから、当たるまで気を緩めずにやってみるよ。」
『うん!』

と、さつきと同じ行動をとり、アイアンテールの準備をする。
そして、

『アイアンテール!』

と、岩にぶつけた。

ガツ!と鈍い音がした。

岩を見てみると、何かで抉れた痕があった。

『え…………?』

「…………成功、だな。」

『やったあ!』

エンジェルは喜んだ。

アイアンテールがついに完成したのだ。

「…………あとは、それを実践でつかえるかどうかだな。」

と、そこに。

『おい、嬢ちゃん。』

『誰か』が来た。

それは、岩に腕が二本だけ生えたようなポケモンだった。どうやら、野生のようらしいが。

「……………イシツブテ、か。」

『ああ、そうだよ。とりあえず……………、死んでおきな!』

と、何故だかいきなり襲い掛かってきたイシツブテ。体当たりで当たろうとするが、

「……………穴を掘る。」

『はいはい〜。』

と、エンジェルは地中へと逃げた。

『くそっ! 一体どこに……………。』

『こっちこっち〜!』

と、下から攻撃してきた!

『グアッ!』

「……………さて、どうする? 試してみるか?」

『もっちろん!』

エンジェルは、尻尾を立てて、エネルギーを集中させた。そして、

『アイアンテール!』

瞬間、イシツブテは後方へと飛ばされた。
後方に家はないので、問題ないだろう。

「…………勝負、あつたな。」

イシツブテが目を回しているところを見ると、どうやら勝ったようだ。

しかし、

『何の目的で襲ったんだろうね?』

「…………さあな。でも、幸先いいじゃねえか。」

『そうだね。』

そして、そんなこんなでもう七時近くなった。

「…………やべ。朝ご飯。」

『あれ?まだ食べてなかったっけ?』

「…………よし、お前は朝ご飯いららないのな。分かった。」

『何で!?忘れちゃったから聞いたのに!』

「…………冗談だよ。」

ひどい——!と、朝から大声を出しながらエンジェルは、蒼と共に家に帰った。

第二話　特訓＋バトル（後書き）

因みに、あのイシツブテ、レベルは12と低い方です。

エンジェル『そんな低かったの？』

うん。きみならすぐに倒せるほどのレベルだったでしょ？

エンジェル『でも、つまんない〜。』

まあ、次回思いっきり暴れればいいじゃん。

エンジェル『暴れる、は言い過ぎかも（汗）』

では、次回もお楽しみに！

第三話、試験開始！（前書き）

という訳で、なんだかんだでもう第三話です。
……しかしですね。

蒼「……？どうした？」

いや、なかなか熱が引かなくてさ。

蒼「……寝ろ。」

寝ようが何しようが4日も治らないんじゃ仕方ないでしょ（汗）
拳句にはレントゲンまで撮らされる始末（汗）異常はなかったけど。

蒼「……だから、寝ておけ。」

蒼、さっきからそれしか言っていないよ？
では、本編どうぞ！

第三話 試験開始！

試験当日の午前9時20分。

朝食を終え、蒼とエンジエルは学校の校庭に手紙に書かれていた通りに来たのだが……。

「……人が多いな……。」
『そうだね』

そう、とにかく多い。3年生の全生徒数500人前後の半分は校庭に集合している。ポケモンもいるからなお多い。

「……しっかし、こんなに多くてどうやって試験するつもりだ？これだと夕方になっても終わんないかもな。」

『でも、先生も何人かいるんでしょ？』

「……けど、こんなに多くのポケモンを持っているとも思えない。なにしろ全員と戦うんだからな。」

『む……。それもそうか。』

と、そこに声をかけてきたのがいた。

「んや〜、それだったら問題ナツシング。」

こんな口調を使うのは、全校生徒の中でも1人しかいない。

「……時雨、お前いい加減その口調直せ。」

「いいやん。それに、お前の疑問をさっくり解消する答えはあるぜよっ。」

もういろんな地方の話し方が混ざってるが、答えを聞くのが第一だった。

「……で、何なんだ、その答えってのは。」

「それはなく、皆様様でコロシウム大会。これを開催するわけやん。」

「……そのいい加減な名前は何だ？」

「知らん。それでも、これは事実やぞ？皆でコロシウムをするんや。それで勝ち残った数十名が試験官様とバトル、っちゅうわけよ。」

ということらしい。

そこで、ふと思い出したように時雨に聞く。

「……お前、試験を受けないんじゃないやなかったのか？」

「んにゃ、それは俺の父さんがこの学校の先生様やから、手伝いにきただけや。こんな感じでルールの知らん人に教えてるのであります軍曹殿。」

「……誰が軍曹だ。」

『ほら、やっぱり軍曹じゃん』

「……うるせえ。」

そして、午前9時30分を時計が指したその時。

《これより、旅人試験のテストを始めます。思っ存分暴れて下さい。》

この放送もいかなものかと思うが、とりあえず試験なのでやるしかない。

「……じゃ、行くかエンジェル。」

『うん』

そして、そんな会話のすぐ後。

「エナジーボール！」

『ほいやつと。』

と、知らない少年からまさかの奇襲。しかも、ドダイトスのエナジーボール。

「……………アイアンテール。」

『はい』

と、尻尾を光らせ、それでエナジーボールを打ち返す。そして、エナジーボールはそのままドダイトスに直撃。

『ぐっ……………。ウッドハン……………。』

『遅いよ？』

と、電光石火からの体当たり。

相手のレベルがまだ低かったのも助かって、少しはダメージを食らってくれたようだ。

「あきらめるな、ドダイトス！葉っぱカッター！」

『おっ！』

と言った瞬間、

「油断は禁物。グレン。火炎放射。」

『合点承知の助！』

火炎放射が葉っぱカッターもろともドダイトスを焼き、ドダイトス、戦闘不能。

「蒼。周りを見て攻撃するのが一番。」

この人、いや少女は蒼も知っている。

かげのはるか影野春香。長い黒い髪を持つ、可愛い顔立ちをした少女だ。炎タイプのポケモン、バクフーンのグレンをパートナーとする。なぜかよく蒼に話しかけてくる。席が近かった関係もあるが。

「……ああ。分かってる。エンジェル、あのトゲピーに電光石火。」
「ええ、あんな可愛いのに……。」

と、渋々エンジェルは近くで指を振る発動寸前だったトゲピーに電光石火で攻撃。トゲピーは戦闘不能となった。

「私達も負けられない。グレン。あの集団にオーバーヒート。」
「了解！」

と、春香もグレンにオーバーヒートを出させ、20体近くの集団を一斉に焼き払った。そして、全員が一気に戦闘不能に。

そんなこんなで30分。

戦闘終了の合図が鳴り、残ったのは春香は実力的にもちろんのこと、蒼も含めてあとは15、6組程度しか残っていなかった。

「え、ではこれより、本番の試験を始めたいと思います。残った受験者は試験官の前にひとりずつ順に来てください。」

放送で言われた通りにする生き残り組達。

そして、蒼とあたったのは……。

「お、蒼君。君とバトルか。」

「……おいおい、嘘だろ？」

『担任の先生じゃん……。』

そう、蒼の担任の先生、武藤 健吾だった。

外見は、白髪交じりの黒の短髪に、白衣を着て、赤い帽子を頭に被って、長い髭を生やした年老いた先生だ。

「君の実力、早速見せてもらおうよ？」

と、武藤はボールを白衣のポケットから出す。

「出て来い、マグネット。」

ボールを上空に投げ、ボールは空中でパカッと開き、そこから一筋の光が出てきた。

そして、出てきたポケモンは、電球見たいな蒼い身体に大きな鼻、その下に生えている髭、頭には赤い帽子のようなもの、そして体の周りに何かが3つほどついている。

「……ダイノーズ……。」

『うわゝ、めちゃくちゃ不利じゃん……。格闘タイプじゃなくて良かったけど。』

そう、そのポケモンはマグネットと呼ばれるダイノーズだった。因みに、身体についている3つのものはチビノーズと言うらしく、ダイノーズが磁力で操るらしい。

しかし、それ以前にダイノーズという種族のポケモンは防御力が強いので、そこが問題なのだ。

「さて、そのイーブイでこの鉄壁の防御力を持つマグネットにどう立ち向かう？君のバトルセンスを見せてもらおうよ？」

『見せてもらおうぞ。』

「……望むところです。」

『やられる覚悟は出来てるよね？』

双方とも、意気込みは十分。

《それでは、戦闘開始。》

その放送が鳴った途端、

「マグネット、チビノーズをイーブイに向かって発射！」

『了解だぞ。』

と、身体についていたチビノーズ3体が、一斉に襲い掛かってきた。

「……エンジェル、電光石火で避ける。」

『オーケー！』

エンジェルはその襲撃を難なく避けていく。そして、そのままマグ

ネットへの攻撃へと移ろうとした。
しかし、

「マグネット、チビノーズを地面に叩きつける！」
『分かったぞ〜。』

と、言われたとおりマグネットがチビノーズを地面に叩きつける。
すると、叩きつけられて出てきた石や土の塊が空中に舞う。

「マグネット、チビノーズでその土や石をイーブイに打て！」
『了解だぞ〜。』

と、チビノーズを器用に使い、次々と土やら石やらをエンジェルに
飛ばしていく。

「……ちっ、エンジェル、アイアンテールで打ち返せ。」
『分かった！』

と、飛んでくる石や土の方に振り返って尻尾を光らせたが、

「マグネット、マグネットボムをイーブイに！」
『オーケーだぞ〜。』

マグネットが鉄の塊を撃ち、挟み撃ちにされた。
が、

「……エンジェル、アイアンテールでマグネットボムを石とか土に
向かって当てていけ。」

『お〜、面白そ〜』

と、迫り来るマグネットボムを器用に尻尾で扱い、石や土に上手に当てていく。当たった瞬間、爆発を起こし、次々に打ち落としていく。

『はい、終了〜！』

「……エンジェル、ダイノーズに電光石火。」

『うん〜！』

エンジェルとマグネットの距離が縮まっていく。

「マグネット、電磁浮遊で空中へ！」

『了解だぞ〜。』

マグネットは、空に向かって上昇し始めた。
が、

「……よし、エンジェル、そこで尻尾をダイノーズの方へ翳せ。」
かき

『分かった！』

と、尻尾を光らせる。

すると、不思議なことにその尻尾にマグネットが引き寄せられていく。

「なっ〜！」

「……そのままダイノーズにアイアンテール。」

『よし〜！』

と、物凄い勢いで近づいていくマグネットに、エンジェルがアイアンテールを打ち込む。相当な威力があったのか、マグネットは後方に30メートルほど飛んでいった。

「……ダイノーズの使った技に影響された磁力を持つてすれば、そこから出て来ている磁場によって磁石同然の砂とかを尻尾に纏わりつかせればに引き寄せられますよね？さらにその電磁浮遊、それは電気力で磁場を生み出して浮く技みたいなモンです……。当然のことながら、鉄の尻尾同然のエンジェルに引き寄せられたって訳ですよ。」

無茶苦茶な方法だが、そんなところらしい。

アイアンテールは、無論、鉄になるわけではない。しかし、エンジェルはマグネットの形成する磁場で影響を受けている砂を尻尾に纏わせ、引き寄せたというのだ。

「確かに、このマグネットの勝手に作ってしまう磁場は強いから、そこから辺の砂でも纏わせれば引き寄せられるかもしれないね。とても面白いよ……。でも、まだまだだよ、蒼君。」

武藤がそう言った瞬間、エンジェルに何かが襲った。エンジェルはそのまま飛ばされ、地面に叩きつけられる。

『ガッ……。』

と、苦しそうに声をあげるエンジェル。

「……チビノーズ……。」

「そう、まだまだ詰めが甘かったね。」

武藤がそう言った瞬間、

「……忘れてた、って言うと思いました？エンジェル、チビノーズ

にアイアンテール。」
『了解!』

なんと、エンジェルが地中から出てきた。そして、そのままマグネットの操るチビノーズに向かってアイアンテールで攻撃した。いや、攻撃ではない。磁力で操っているチビノーズを磁力のある砂付きの尻尾にぺたっとくっつける。

「……いくら鉄壁でも、同じ鉄壁の身体で出来ている奴を身体に喰らうたら……、想像はつきますよね、先生。」

「な……!マグネット、チビノーズを……!」

『遅いよ!アイアンテール!!』

チビノーズをつけたまま、マグネットに攻撃。当然、同じ硬さ同士の物を思い切りぶつけるので、威力は計り知れない。マグネットはそのまま後方へとさらに飛んでいき、地面に叩きつけられた。

そして、マグネットは完全に目を回して気絶していた。

「な、何……?どういう、ことだ?」

「……簡単ですよ。先生、後ろでやられて地に伏しているエンジェルを見てください。」

言われるがままに武藤が振り返る。

そこには、光の粒子となって消えかけている『影分身で作った偽者のエンジェル』がいた。

「……完敗だよ。本当に君は強い……。」

「……ありがとうございます。」

『楽しかった』

そして、蒼達は見事試験に受かったのだ。

そして、とある場所では、ある少女と、その相手らしき人物がバトルをしていた。どちらも歳は17、8くらいであろう。

少女はピカチュウを、対する相手はイワークで対戦していた。とてもピカチュウに勝ち目のなさそうなバトル、なのだが。

「ボルト、あれやっちゃっていいぞ！」

『オーケー！』

ボルトとある少女に呼ばれたピカチュウが、なんとイワークには全く無意味な『電撃』の塊を自分の目の前に作り始めた。そして、

『倒れちまえ！ハイボルト・ショット！』

瞬間、ボルトの目の前で溜まっていたエネルギーを、どう操ったのかは分からないが、言うなればまさにオレンジ色のレーザー光線のように電撃が相手に飛んでいった。

さらに、電撃で作ったはずなのに、イワークにダメージが伝わり悲鳴を上げながら倒れてしまった。

「ああっ、イワーク！」

と、対戦相手の少年がイワークに近寄るも、イワークは既に目を回して気絶していた。

「……僕の、負けです……。」

「よっしゃ、勝ったー！」

『やったぜ！』

その少女とボルトは喜んでいた。

「いいバトルだったよ！ありがとうございます」

「あ、いえ……。」

少女と少年は握手をした。

そして、

「あの、負けたのでお金を……。」

そう、バトルに負けると、金を支払わなければならない。

因みに、この世界では負けたら自分の所有している有り金の5%を支払わなければならないといったルールがある。

しかし、

「あん？いらナイよ！」

「へ？」

「私は楽しいバトルさえ出来ればいいんだから。君のイワーク、中々しぶとかったし、良かったよ！」

「え〜と……。」

「そんじゃ、またいつか！」

と、困惑する少年を差し置いて、ボルトを引き連れてちっちとその
場を立ち去ってしまう少女だった。

第三話、試験開始！（後書き）

最後に出てきた少女、近いうちにまた出るの。

エンジェル『最後のあの技、何？』

うん、知ってる人は超磁砲を思い浮かべると分かるかも。

エンジェル『それって、パクリ？』

うん、でも、あの技意外にもバリエーションあるから大丈夫。

エンジェル『何がどう大丈夫！？』

ではでは、次回はよいよ旅のスタート……？

エンジェル『何で疑問系？』

第四話、SSS（説明、下準備、出発）、（前書き）

前回の予告とは違いますが、この話が無いと恐らくこの世界には着いていけないかと（汗）

ポルト『あ？どういことだ？』

いや、つまり、旅の持ち物とか、そんな感じですよ。

ポルト『ふ〜ん。』

では、どうぞ！

第四話、SSS（説明、下準備、出発）、

試験終了後、合格者達はある教室に呼ばれた。そこで、色々な物の入った布袋を渡された。

「え〜、ではその渡した物品の説明をする。」

と話すのはあの武藤先生。

「まず、そのオレンジ色のカードだが……。」

蒼は布袋の中から言われた物を出して見た。

「それは『パス』と言って、国の出入に必要な物だ。絶対になくさないように。また、身分証明書でもあるのでそれも頭に入れておくように。」

いわば、パスポートのような物である。

『へ〜、すごいね〜』

「……ああ。これで出入国が出来るのか。」

エンジェルと話した後、視線を戻した。

「次に、この青い機械を出してみてください。」

武藤が手に持っているのは、薄く四角形の形をしている青い機械だった。その他に、中央あたりに赤いスイッチがついているだけだ。

「それは地図だ。試しに中央にある赤いボタンを押してみてください。」

蒼は言われた通りのことをしてみた。

すると、その機械から突然映像が映し出された。どういう原理か全く分からないが、とにかく地図であることには変わらない。

『これなら移動も楽だね。』

「……そうだな。行きたいところの検索も出来るらしい。」

蒼が、地図の映像の左端にある『検索』というボタンを押してみた。すると、入力画面が出てきた。上の辺りに横に細長い枠があり、下には何十個か文字が書いてあり、押すと細長い枠に文字が打てるらしい。

試しにこの町の名前を打つてみると、再び地図画面が現れ、その場所に赤い丸のマークがついた。

『うお、これはこれで感激かも！』

「……旅が少しは楽になるな。」

武藤の話は続く。

「次に、この赤いゲーム機みたいなものを取り出してください。」

と、武藤が手に持っているのは、言うなればかの有名な二画面のゲーム機みたいなものだった。その色は赤い。

試しに開けてみるといろんな形のボタンがついていて、それで操作するらしい。

「それはポケモン図鑑だ。ほとんどのポケモンはデータに入っているから見てくれ。」

『ほとんど』というのは恐らく伝説のポケモンを除いているからである。

「その操作法は後で説明書を見て理解してくれ。」

蒼はさらに袋を探ると、確かに説明書があった。結構分厚い。

『うわ、難しそう……。』

「……でも、覚えるしかねえだろ。」

その分厚さに圧倒された時、

「では、支給品は以上だ。後は、この国から旅立つ際に銃器、または剣を渡すからな。では、解散。」

そんなこんなで五分程度で終わった支給品説明だった。

『……銃とか剣は今渡さないんだね。』

「……当たり前だ。殺人事件とかおきたら洒落にならねえだろ？」
『そっかー。』

……説明しておくが、この世界には旅人が武器を所持（ただし、銃か剣のみ）してよいという法律がある。
ポケモンがいるのに何故武器が必要か、ということだが、理由は二つある。

一つは、自分の身を守るためである。

自分の手持ちポケモンが仮に全員やられたとしよう。そんな時に誰かに襲われたら、自分の身を守る手段は無くなってしまう。そこで、

身を守るべく武器の使用が可能になるのだ。尤も、武器の使用は『自分の身が本当に危険な時』だけであり、それ以外に使うと、銃や剣についている『生体感知器』が反応し、即座に指名手配される仕組みになっている。科学の進歩が成し遂げた業なのだ。

そしてもう一つは、『単攻民族』のグループが出てきたためだ。

『単攻民族』とは、ポケモンを持たず、相手の持ち物を武力で奪う、いわば『山賊』のような人のことである。この世界では、一般に『ポケモンを持たない者へのポケモンの使用による攻撃は禁ずる。ただし、状態異常にさせる技は、毒になるもの以外は使用可とする』といった法律がある。理由は簡単、ポケモンの攻撃で『単攻民族』が死んでしまつては元も子もないからだ。だから、自分の身を守るために武器を使用するのである。

……こんな具合に、この世界は結構複雑なのだ。

そして、蒼の家。既に正午になっていた。

『お、お腹空いた……。』

家に帰ってくるなり早速倒れこむエンジェル。

「……………今日は何食つ？」

『へっ？』

いきなり蒼に聞かれ、聞き返すエンジェル。

「……いや、今日は試験も受かったし、何か食いたいものあるかって。」

『……じゃ、ボクの好きなカレー!』

「……分かった。思いつきり辛くしてやるからな。」

『えー!それは絶対駄目!』

「……覚悟はしておけよ。」

『駄目駄目駄目、絶対駄目!辛いもの嫌いなのにー!』

そんなこんなで自分の家で過ごす時間も過ぎていく。

それから2時間後。

旅に必要な着替え用の服、学校で支給されたいくつかの物、食料、お金などを青いリュックサックに入れて、旅の準備は整った。

「……じゃ、行くか。」

『そうだね』

1人と1匹は自分の家を後にし、国から出るための門へと歩いていく。

「はい、では気をつけてね。」

パスを門番に見せて、門が開かれる。

その向こうは、静かな草原の真ん中に一本だけ道があるという簡単な風景だった。が、これが旅の始まりを告げる風景なのだ。

「……行くか。」

『うん』

こうして、新たな旅人がまた祖国を離れ、旅立った。

その時、ボルトという名のピカチュウを連れた少女は、蒼の住んでいる『国』の近くで『単攻民族』に囲まれていた。

「……いいから、さっさと荷物を置いて立ち去れ。」

リーダーらしき人物が少女に脅迫する。

が、少女は何も言わず首を横に振る。その顔に今、表情は無い。

「ならば、仕方が無いな……。お前ら、やっちなえ！」

と、金属バットや剣や鎌を持った数十人の下っ端たちが少女に襲い掛かる。

「死ねーーーーー!!」

1人が剣で少女に斬りかかった。

が、一瞬で右腰にあった短い刀を鞘から抜き、斬撃をはじき返す。今まで無表情だったその顔は……、笑いに満ちていた。さらに、左腰にあった長い刀で一瞬にして相手を切り倒す。

「て、てめえ……。」

誰かが言ったが、

「ボルト、電磁波。」

『オーケー!』

ボルトが周りの単攻民族に微弱な電気を与え、身体を痺れさせる。因みに、法律範囲内なので問題は無い。

「さて、」

少女は、リーダーらしき男の額に、いつ取り出したのか、黒い拳銃を当てていた。

「殺されるか、降参するか、どっちか選んでもらおうか?」

これを聞いた男はさすがに、

「まま、待つてくれ!悪気は無かったんだ!」

恐怖に歪んだ顔で言い訳を言う男。往生際が悪すぎる。

が、少女は何故か拳銃をホルスターにしまっ少女。
それを見てほっとした男が、顔を上げた時に目の前に見たものは、

電撃で作られた竜だった。

「なっ！お前、それは……！」

「ボルト、やっちゃって。」

『いよっしゃー！ハイボルト・サラマンダー！』

もはや法律無視のこの攻撃を避けようとするも、男は体が痺れて動けない。

そして、その電撃は、

当たらなかった。ボルトが当てる寸前に竜の電撃を分散させて消したのだ。

代わりに、男は気絶していて、他は体が痺れていて、もはや少女に楯突くことの出来る者はいなかった。

「まったく、法律までは破らないのに。さて、降参する？それとも、殺されたい？」

この言葉に、一同揃って『降参した』。

事を終えた少女とボルトは、蒼の『国』の方向へと歩いていく。

第四話、SSS（説明、下準備、出発）、（後書き）

少女「いや、武器って助かるわね」

ポケモンの世界に武器があるのが凄いことだと……。

少女「だって、ポケモンがいなかったら、丸腰同然じゃん。」

確かに、本編でも言ったしね。

少女「いや、でもあいつらを倒すの楽しかったな」

……。

で、ではまた次回。

第五話、進化(?)とバトル、(前書き)

旅での初めてのバトルです。

蒼「……………誰と戦うんだ？」

それはお楽しみ。

第五話 進化(?)とバトル

早速旅を始めた1人と1匹だが……。

『つ、疲れた……。』

「……早すぎるだろ、疲れるのが。」

『だ、だって……。もう5キロは延々と歩いているんだよ？ボクにとっては結構大変なんだよ？』

「……知ったことか。大体、運動を常にしていないからこういふことになるんだよ。」

『ソウが運動しているところ、見たこと無いけど？』

「……体育の授業のとき、教室で寝ているからだろ。」

『ぎくっ！』

「……そんなに分かりやすい反応をしてくれると思わなかったよ。」

そんなこんなでもう延々5キロは歩いている。因みに、『国』と『国』の間では、交通機関はない。行きたければ徒歩か、国にある空港で飛行機に乗るか、ポケモンで行くかというものしかない。歩き疲れたエンジェルが、こんなことを言い出した。

『ね、ねえ。ボールに入れてよ……。』

「……お断り。」

蒼は、きっぱりと言いつつ放った。

『何で何でどうしてどうしてボールに入れてくれないの!?!?』

「……そんなに刑務所に行きたいなら入れてやる。」
「……じゃ、やめとく。てか、そんな法律あったね、確か。」

エンジエルの言う『法律』とは、

『常に1匹はポケモンをボールから出しておくこと。』というものだ。

理由は、主の身を常に守れるように、いわばボディガードの役割を果たすためだ。

『……でも、もう休憩しない?』

「……分かった。そんなに言うなら休憩しよう。」

いよっしゃー、と叫ぶエンジエル。

というわけで、近くに川の流れているところで休憩することにした。

『ん〜、気持ちいい〜』

「……。」

そして、今、エンジエルは川で水浴びを、蒼は、狭い草原の上で寝転がっていた。

『……ソウ。どうしたの?』

「……んあ、眠いだけだ。」

瞬間、蒼の顔に大量の川の水がかかった。

「おわっ！……何するんだ、お前！」

「え、だって暇なんだもん。」

「……そうか、それなら……、ほらっ！」

「うわっ！ちよっと！」

蒼もお返しとばかりに、数回にわたって大量の水をエンジェルにかけてやった。

結果、全身びしょ濡れに。

『……うう……。』

「……自業自得だ。」

と、手ひどい仕返しをされたエンジェルがさらにお返しをしようと川の底に目をやったとき。

『……ん？』

「……どうした？」

『いや、これ何の石かな、って。』

エンジェルが手に取ったのは、なにやら虹色に光る丸い石だ。

その丸さは、人工的に作られた感がある。虹色も、自然によって生み出された色でもなさそうだ。

見るからに怪しい石を蒼が手に取るうとした瞬間。

エンジェルの体が白く光り始めた。

『ひゃっ！ソウ、これって！！』
「……進化の、光？」

進化の光、それはポケモンが進化するときに発する白く、眩しい光であるとされている。

が、正体不明の、ましてや人工的に作られたと見るほうが自然な石に触っただけで、進化するのはまず有り得ない。特定の石に触れ、それによって進化を遂げる、というのはいつになっても変わらない定義だからだ。

それはさておき、エンジェルは光に包まれた。

が。

『……あ、あれ？』

「……進化、していない？」

そう、全く進化していないのだ。つまり、白い体毛を持つイーブイの姿のまま。

「……おい、あの石見せてみる。」

『あ、うん。これ……。』

手渡されたのは、相変わらず虹色に輝く丸い石であった。

進化の石というのは、使うとどんなものでも真っ黒に変色してしまう。

最近の研究では、石の色は特定のエネルギーの種類を指し示し、エ

ネルギーを使うことによつて色を失うとされている。つまり、元は全て同じ『ただの石』なのだ。
が、この石は進化をさせないどころか、変色すらしない。

「……………で、異常はないか？」

『な、ないよ？』

「……………じゃ、良いんじゃないかねえか？」

しかし、この不思議な石に少しばかり興味を持った蒼は、それを捨てずにリュックの小さなポケットの中に入れた。

「……………さて、そろそろ旅を……………」

と、その時。

『お、ポケモンいるじゃん！俺と勝負しやがれ！』

早速声をかけられた。

蒼とエンジェルが声のするほうに振り向くと、黄色い小さい身体に、ギザギザの尻尾、頭にある2本の細長い耳、両ほっぺにある赤い丸。そして、獯猛そうな目で蒼達を見るそのポケモンは……………。

『び、ピカチュウ……………。』

『まったく、俺にはボルトって名前があんだよ！覚えとけ！』

『なっ……………！知りもしないのにそんな風に責められても困る……………！』

『うるせえ……………！』

と、そのボルトと言う名のピカチュウの背後から、1人の少女がやってきた。

「その辺にしときなつて。お前は手当たり次第にバトルするのはやめなさい。」

『……ああ、分かったよ。』

と、少女の声に渋々引き下がったボルト。

「あゝ、なんかすみませんね。このボルトが迷惑かけて……。」

そういう少女は、黒い髪をポニーテールにしていて、スタイルのいい体をしている、とても元気の良い少女だ。歳は、16、7くらいだろうか。

「……あゝ、いや。大丈夫だろ。俺らは関係ないんだし。」

そこに、エンジェルが。

『……ソウ。』

「……何だ？」

『勝負、させて。このピカチュウと。』

『だから、ボルトだって言ってるんだろ!!』

『うるさいーっ!!』

「……そんなにやりたいなら、やってもいいが。」

「じゃ、いいわ。手加減はしないからね。」

「……その方がいいだろ。」

そんなわけで、エンジェル対ボルトの対戦がスタート。

「……いつでもいいぜ。」
「ずいぶん、余裕じゃない？」
「……いや、むしろこっちが負ける可能性が9割なんだがな。ボルト、お前はかなり強そうだしな。」
「もちろん、その通りだ！」
「むぎー！むかつく！」
「……エンジェル、少し落ち着け。」

その時。

「じゃ、いくわよ！ボルト、体当たり！」
「オツケー！」
「……エンジェル、電光石火。」
「分かった！」

迫り来るボルトに対して、エンジェルは素早く横に動いて攻撃を受け流す。
つもりだったが、

「ボルト、去り際にアイアンテール！」
「オラッ！」

体当たりで通り過ぎる瞬間、横にいたエンジェルを走りながら尻尾で攻撃した。

その攻撃を受けたエンジェルは、見事に吹っ飛ばされてしまった。

「ぐっ……！？」
「そのまま電光石火で追い討ちよ！」

ボルトは一瞬で方向転換をし、体勢を整え直し、電光石火を繰り出した。

その間、僅か一秒足らず。

「……エンジェル、影分身！」

『分かった！』

と、分裂しようとした瞬間、

ゴッ、とボルトに吹き飛ばされた。とてつもない速さだ。走って出せるスピードじゃない。

『ウッ！』

エンジェルはそのまま後方へと飛ばされてしまった。

「……エンジェル！」

『だ、大丈夫……。それより、早く指示を出して！』

「……ああ。エンジェル、穴を掘る！」

そして、エンジェルは地中に潜ってしまった。

当たれば効果は抜群なのだが、

「ボルト、あれやつちゃっていいよ。」

『オツケー！』

と、ボルトの体から高電圧、高電流の電気が発せられた。

それを足裏に集中させ、ロケットのように一気に地上12メートルの地点まで飛んだ。さっき電光石火のスピードが速かったのはこれを使ったからだろう。

エンジェルが地中から出てくるが、当然ボルトはいない。

「いけ！ボルト！」
『よっしゃー！』

と、片手に電気で生成された高エネルギーを一瞬で溜め、それを、

『ハイボルト・ショット！』

レーザーのようにエンジェルの真横に飛ばした。

ビシュツ！と壮絶な音を立てて、レーザーは地上に直撃した。

レーザーの威力を物語るかの如く、土はマグマのようにどろどろに溶けていた。

『…………あ、ああ…………。』

エンジェルは少し放心状態になってしまった。

無理も無い。土が溶けるような高温のレーザーを浴びたら、体がどろろになるくらいは容易に想像がつくだろうから。

『ほんじゃ、次行くぜ。』

と、またも電撃のエネルギーを溜め始めた。

『う、うっ…………。』

エンジェルはもはや動くことすら出来ない。蒼の声にも全く反応しない。

そして、『ハイボルト・ショット』は放たれた。

あまりの衝撃に砂煙が立ちこめ、周りが一切見えなくなっていた。

『ふう、やりすぎた、かな？』

と平然な声で言った。しかし、今はかなり手加減したつもりだ。相手のレベルが低いことは見破っていたし、それなりの攻撃にしないと本当に死んでしまう。

「ちよっ、ボルト！やりすぎでしょうが！」

『でも、弱く撃ったつもりだぜ？』

その会話が途切れた後、急に横風が拭き、砂煙は払われた。そして、

目の前に全身黄色で尖っている部分が多く、首元は白い、しかしイブイの面影は少し残したポケモン。

つまり、サンダースが立っていた。

「……え、あれ？ボク、死んでないの？」

「なっ！お前、一体どうやって……！」

「……エンジェル、一体どうして……？」

「ええっ！？」

本人も含め、全員驚き。

因みに、サンダーズの特徴は『蓄電』。電撃を受けると体力が回復するのだ。

つまり、さっきのボルトの『ハイボルト・ショット』は全て吸収され、エンジェルの回復のための糧となってしまったのだ。

しかし、それ以前に。

「お前、雷の石でも触ったのか？」

ボルトが聞くが、エンジェルは『そんなものはないし、使っても無い』と自分の周りを見渡してから言った。

本来、イーブイからサンダーズに進化する時は、雷の石と呼ばれるものが要だ。それを使わなければならない条件が揃わなければずっとイーブイのままだ。

しかし、エンジェルは『雷の石を使うことなく』サンダーズに進化したのだ。

「……くそ！」

ボルトがアイアンテールを繰り出す。が、素早さの早いサンダーズはその攻撃を難なく避ける。

そして、

「っ、使えるかどうかは分からない、けどーソウ！」

「……ああ、エンジェル、電気ショック。」

すると、エンジェルは電撃をボルトに向かって放出した。

『そんなモン効くか！リサ！』

「分かってる！ボルト、避けて！」

ボルトは、少女、理沙の指示に従って電撃を足の裏に集中させ、口ケットみたいに一気に放出し、弾丸と同じくらいのスピードで避ける。

5メートルほど横に進んで着地。そのまま次の攻撃に移ろうとしたが、エンジェルが電気ショックを放った。

『んだよ、やるならこのくらいにしろっての！』

と、雷を自分の周りに纏わせ、その雷のバリアで電気ショックをも防いでしまう。

そして、そのバリアを槍状に変形させ、エンジェルに放った。

が、エンジェルは今はサンダースの姿。蓄電によって電撃は吸収されてしまった。

『くそっ！』

と、電光石火で一気に距離を詰めつつ攻めようと考えたが、ボルトの身体はその時、グラツと傾いた。

『ぐっつ！……ハア、ハア……』

どうやら、あのオリジナル技は体力を異常に消耗するらしい。そのため、ただでさえ体力の無いピカチュウよりも、ボルトは早く消耗してしまうのだ。

どうやら、そろそろ決着がつくみたいだ。

「……エンジェル、電光石火！」

「ボルト、あなたも電光石火よ！」

そして、両者は激突した。

結果、エンジェルはボルトの電光石火の威力に負けて倒れ、ボルトの方は元々体力が限界に近かったため、倒れてしまった。つまり、引き分けである。

そして、エンジェルはいつの間にかもとのイーブイの姿に戻っていた。

「……引き分け、か。」

「っ、強いわね、あんたのイーブイ。」

「……あ？まだレベル35だが？」

「へ？35？」

理沙はその数字に驚いた様子。

訳を聞くと、ボルトのレベルは69だかららしい。それには蒼も驚いた。

「……まあ、とりあえず休ませてやらねえとな。」

「そうね。」

蒼はエンジェルを、理沙はボルトをボールに戻した。

因みに、ボールにはちょっとした回復機能がついていて、ポケモンセンターがなくとも数日間ボールの中にいれば完全回復するように

出来ている。

「あなたは他のポケモンは？」

「……まだいない。」

「そ。早くたくさんポケモンを捕まえて、仲間を増やさないよ？」

と、理沙は別のボールを取り出し、

「出てきて、ヘリウム！」

ボールから出てきたのは、全体的には気球のような体をし、下辺りからプロペラのように四本足みたいなものがついていて、目は小さく、口はバツテンのマークになっている。頭には雲みたいなものもある。

そう、フワライドだった。

「それじゃ、私は旅を続けるから」

と、それだけを言い残すと理沙はさっさと旅に戻ってしまった。
蒼もまた、同じく。

第五話 『進化(?)とバトル』 (後書き)

エンジエル『ねえ、あの石って何なの?』

ボルト『石?何のことだ?』

エンジエル『あなたには教えたくないかも。』

ボルト『んだと!』

はいはい、落ち着きなさい。

エンジエル・ボルト『これが落ち着けていえる状況!?』

………落ち着きそうも無いのでこの辺で失礼します(汗)

第六話 『蒼の実力』 (前書き)

今回は短い上に少しグダグダです(汗)
時間があればいつかこの話は直したいと思います……。

第六話　蒼の実力

今、蒼とエンジェルはどこに行こうかということでも地図を見ながら話し合っている。

因みに、エンジェルは、ボールの中より外の方が居心地がよいと言って、少し回復してから勝手に出てきてしまった。そのため、まだふらふらしているが。

「…………どこにする？」

『ここから一番近いのは？』

「…………ここから一番近いのは、『サイバーシティ』だな。」

サイバーシティ。

周りの『国』より、科学技術は100年先に行く、超近未来都市のことだ。面積的には……この地域全体をエリア5というのだが……その中で2番目に大きい。

しかし、いくら近いといってもここから歩くと、1日以上はかかってしまう。

それを聞くと、エンジェルはやはりたいそう嫌な顔をして、

『…………近道は？』

「…………無い。地図を見るからに、結構歩くことになるが。」

『え…………。』

今は昼。歩こうと思えば大丈夫な時間帯だが、エンジェルはぐでっつとしている。

先ほどの理沙とのバトルも影響しているのか、かなり疲れている様子だった。

「……仕方が無い……。」

と言って、エンジェルをリュックから顔を出す形でリュックに入れ、蒼は歩き始めた。

さすがにエンジェルは、

『……！そ、蒼が迷惑かもしれないからボクの足で歩くよ！』

「……いや、入ってる。それに、俺の性格くらいお前は分かってんだろ？」

蒼は、『困っている人は見捨てない』性格だから、疲れているエンジェルを歩かせようとしないのだ。

『うん。それなら、お言葉に甘えて』

エンジェルはコロリと考え方を変え、そのままリュックの中で眠ってしまった。

「……。」

話す相手のいなくなった蒼は、ひたすら歩き続ける。

2時間後、休憩をとることにした。

エンジェルが入っているので、リュックは慎重に下ろし、短い丈の草の上に座った。

「……そういや、昼食を食ってねえな。」

と、リュックの小ポケットから、携帯食料を取り出す。色は黄色で、細長い四角柱の形をしている。

因みにこの携帯食料、安くて少しは味が良いので旅人に人気のものである。

『……ご飯!?!』

「……目覚めやがった。つつか、お前は食べ物の匂いで目が覚めるのか?」

若干呆れながら、小ポケットから携帯用のポケモンフーズの袋を開ける。

そこには、ピンク色の丸い塊が数十個入っていた。どうやらこれがポケモンの携帯食料らしい。

因みに、味は甘い。イーブイの性格にあった味のものなのである。

『ん〜 おいしい〜』

それをとてもおいしそうに食べている。

好物だから当たり前だろう。
数分後。

『……ふ〜、ご馳走様』

「……じゃ、行くか。」

と、腰を上げようとしたとき。

「おい。」

その目の前には、数人の男達が立っていた。
おそろく。

「……単攻民族……。」

「そういうことだ。とっとと荷物を置いて……。」

「……そいつは出来ねえな。」

と、リュックを持って一步下がる。エンジェルは男達に見つかる前に岩の陰に隠れていた。

「ほう、あの女よりは弱そうだしな。とりあえず、死んでおけ！」

と、リーダーの隣にいた鉄パイプを持つ男が蒼に襲い掛かる。
普通なら、頭を打たれて終わりだが、

ガァン、と何かの音が響いた。

「……け、拳銃ッ……。」

そして、間髪いれずに一発、男の腹に撃った。

もちろん、弾はゴム弾だが、大の男をも昏倒させる威力を持つものだ。

「ぐげっ……。」

「き、貴様！」

と、大きな剣を持った男も怒りに任せて襲い掛かる。

しかし、蒼は男の手を撃って剣を落とし、その後眉間に一発撃ち、男は倒れた。

「……おいおい、ちょっと当たりすぎてねえか？」

そう、腹ならまだしも、剣を持つ手、さらには眉間など、普通に撃つたらなかなか当たらない箇所なのだ。

「ふん、まぐれだ。」

リーダーは拳銃を取り出し、蒼に狙いを定めた。

「死ねエエエエ!!!!!!」

と、リーダーは一発撃った。ゴム弾ではなく、本物の鉛弾だ。

しかし、蒼には傷一つつかない。

あまりの現実を前にリーダーの思考が真っ白になった瞬間、そのまま撃たれて意識が飛んだ。

「な、何をした……。」

「……何って、そいつが撃ってきた銃弾を弾いただけだ。」

面倒臭そうに言った後、

「……まだ、やるか？」

「ひっ、滅相もございません!!」

と、残った男達は倒れた男達を抱えて逃げた。
しかし、

「……………」

もう一つ、少し長めの銃を取り出すと、男達に狙いを定め、撃った。何かの怒りを吐き出すかのように。

ダダダダダダダッ！

「ぐああああああっ！」

逃げようとした男達は見事に足を撃たれ、歩けなくなった。使った銃は、マシンガン。しかも、小型のものだった。

「……………ま、少しそこで反省するんだな。」

行くぞ、とエンジェルに言って、蒼は旅に戻った。

「……………」

「……………？どうしたエンジェル？」

「いや、蒼は強いな〜って。」

「……………ポケモンの方がよっぽど強いと思うがな。」

「それ、10段取ってる人の台詞じゃない。」

「……………俺はそんなの気にしてないけどな、級とか段とか。」

そう、この世界には、拳銃、刀での戦闘能力を10級〜10段に分けている。10段を所有している人は、この世界では数人しか存在

しない。その1人が、この蒼なのである。

『でも、強ければ自分も他人も守れるよ?』

「……ああ、そうだな。」

『それにさ、蒼はもつと自分の強さを誇るべきだよ。世界に数人しかいないんだし。』

「……ああ。」

『……ソウ?』

「……ああ。」

『ちよつと!ソウつてば!』

「……ん、ああ、悪い悪い。考え事をしてたんだ。」

生返事ばかりだった蒼を大声で呼ぶと、ようやく振り向いたようだ。

『どしたの?何かあったの?』

「……いや、何でもない。」

とりあえず、サイバーシティへ向かう蒼とエンジェルだった。

第六話、蒼の実力、（後書き）

ポケモンの小説なのに、人間同士が戦闘をするってどうなんだろう、と今更ながらに思う僕（汗）

蒼「……そういう世界なんだから仕方ないだろ？」

……それはそうだけど。

では、また次回。

第七話　サイバーシティ

単攻民族を退けてから4時間後。

とうとう蒼とエンジェルは、サイバーシティに着いた。

「……やっとか。」

『着いたー！！』

しかし、その国はまだ中がどのようになっているのかは見えなかった。

理由は簡単、高い城壁のようなもので囲まれているからだ。

そこにいくつか扉があるのだが、その前には出入国審査官がいる。

蒼はまずその人に話しかけた。因みにに出入国審査官は、その名の通り出入国の管理をする人のことである。

「……すみません、入国したいのですが。」

「ああ、入国ね。じゃ、パスを渡して。」

何とも軽々しい口調で話している審査官に、蒼は自分の身分証明書となるパスを渡した。

審査官はそのパスを用いて情報を読み取り、何秒かその情報を見た後、パスを返した。さらに、滞在期間を聞かれ、一応一週間にしておいた。

そして、審査官は笑顔でこう言った。

「それでは、ようこそ。科学技術の頂点の『国』へ！」

審査官はそう言い、扉をボタンを押して開いた。

『国』の中は、やはり『科学技術の頂点の『国』』だけあった。車は空を飛び、人の形をした警備ロボが走り、見たことも聞いたことも無いような機械が揃い……。とにかく、見るもの全てが初めての物ばかりだった。そして、これだけ機械があるのに、排気ガスには考慮してあるのか、全く空気は汚染されていなかった。

「……凄いな。」

『ほえ……、これが『科学技術の頂点』か……。』

とりあえず、蒼達はこの町を見て回る前に、宿泊施設を探した。今は夕方。しかももう疲れているので、休まなければ意味が無い。という訳で、まずは安めの宿泊施設を知っていきそうな人を探したが、正直誰でもいいのでということで、通りかかった作業服を着た外国人男性に尋ねてみた。

「……あの、すみません。」

「ん？ああ、俺様に何か御用でも御ありですか？」

何か変な口調だが、外国人だから仕方が無いと納得し、とりあえず宿泊施設の事を聞いた。すると、

「ん？この宿泊施設は、相当設備の整っているもの以外だったら全て無料ですよ？」

……。
さすがにその言葉に凍りつく蒼とエンジェル。

「……………本当ですか？」

「ああ、ここは科学技術が発展しすぎて、発明品を売っていたりするから逆に何億何兆と金が余ってるんですよ。だから、宿泊代なんてとても凄いとこほ以外は全てタダ。レストランとかはさすがに金は取るらしいですがね。」

ありがとうございます、と蒼が言つとその男は帰ってしまった。

あの男の話によって、中々いい宿泊施設があつたため、そこで泊まる事にした。

その部屋は、ベッド2台、椅子2脚、テーブル1台、テレビ1台にその他諸々と言つたいわゆる普通の部屋だが、かなり綺麗だ。

『ねえ、ソウ！このベッド気持ち良いよ〜』

エンジェルはベッドの上でポンポン跳ねている。

「……………注意しないと怪我するぞ？」

『う……………。それは気をつけるよ……………。』

しかし、蒼の忠告を無視するが如くまたベッドの上で跳ね始めた。蒼は腰につけたホルスターを外し、リュックを下ろし、

「……で、夕食は外で食べるからな。その前にとりあえずシャワーを付けといてやるから身体は洗っとけ。」
『はい。』

エンジエルはそう言うと、浴室へと行った。

その後、エンジエルも蒼も一通り身体の汚れを洗い流し、蒼は服を着替え、リュックを持ち、ホルスターを腰につけ直し、部屋の鍵を閉めてから外出した。

蒼とエンジエルは、ホテルから少し出た所にあるセンターストリートは、文字通りこのサイバーシティの中心にある通りである。ここにはレストラン、ショッピングモール、コンビニといった施設や、電車、飛行タクシー、完全無人バス等の交通機関も最も栄えている所だ。勿論、人も多い。

『ねえ、お腹空いたー。』

「……分かったから、ちょっと待ってる……。」

と、蒼は少し厚めのパンフレットを見ながら、どこが良いか定めているところだ。

見て悩んで数分後。

「……お、ここなんか良いんじゃないか？」

『えっ？どいどいつ？』

蒼が指差したのは、洋食全般が扱われているレストランだった。エンジェルは目を輝かせ、

『行くっ！そこにする！』

「……………分かった、分かったからドスドスと人に突進して訴えるな。」

と、1人と1匹はそのレストランへと進んでいく。

そのレストランで、蒼はカレーライスを、エンジェルは何かを焼いたものをおいしそうに食べていた。因みに、その焼かれていたものはご想像にお任せします。

『ふゝ、食べた食べた』

「……………本当によく食べるよな……………。毎回思っけど、それでよく太んないよな。気をつけるよ。」

『気をつけてるよ！！』

「……………はいはい、分かったから大声出すな。」

さて、と言って蒼とエンジェルは店を出ようとしたが、

その次の瞬間、自分たちの泊まっていたホテルから轟音が聞こえた。

「……………は？」

『え、何！？爆発！？』

何が起きてるか全く分からない蒼と、何故だかはしゃいでいるエン

ジェルは忘れそうになった支払いを済ませ、店を出て、ホテルを見た。

「……おいおい、勘弁してくれよ。泊まるところなくなるぞ？」

『え！それは困るよ！』

という訳で、危険を承知で戻ることにした。

ホテル前には警察と消防隊があり、ホテルを封鎖していた。

ホテルの爆発は蒼達の泊まった部屋よりは遙かに下の階だが、そうやってホテルを崩すつもりなのだろう。

しかし、時差式で付けられているようで、まだ一つしか爆発していない様子。

「……どうすんだ？」

『どうしようね、って言ったってどうせ何も出来ないよ。』

と、その時、

「あれ？もしかしてあの時の旅人でございますでしょうか？」

妙に丁寧な口調の男の声が聞こえてきた。

蒼がその声のする方に振り向くと、

「……道を教えてくれた親切な……。」

「おー、やっぱりそうでしたか！」

『あれ？でも何でこんな所に？』

エンジェルが聞く。
最もだ。今はどう見ても大工の着るような作業服を着ているし、その格好で封鎖されたホテルの近くにいる。
ということとは、

「……………警察？」

「よく分かりましたね！そうなのです、俺様は爆発物処理班の一員なのです！作業服を着ているのはこれが正装だからです。」

あっさりと言つてのけたが、かなり危険な部類に入っている。
爆発物処理班など、1つの『国』に10人いるかいないかと言われるほど、人気が無く危険な仕事であるのだ。

「という訳で、危険なので近寄らないで」

と言つたところで、爆発が起き、飛んできた瓦礫に顔をぶつけ、バタツと倒れた。

「……………おい！」

「へへ、後は任せましたぜベイベ！」

「……………笑顔で言うな！そもそも平気なら平気で爆発止めて来い！」

「ん〜、仕方ないですね。」

『つてか、あなたの仕事じゃん、それ。』

エンジェルのツッコミの後、その外国人爆発物処理班はホテルの中へと行った。

そして、ボールを取り出し、

「おいでなさい、フシギダネ！」

「……おいコラ待ちやがれ。誰が爆発物のある中で草タイプのポケモンを出す?」

「……あー、名前間違えました。出でよ、コイキング!」

「それも駄目でしょ! って、こんなことしてたらホテルが崩れる!」

「分かりました。出でよ、ギャラドス!」

と、ボールから出てきたのは、エメラルドの色をしたギャラドスだった。

『うわゝ、綺麗な緑色……。』

『ん、ああ、ありがとな。っと、こんなことをしてられない。』

と、ギャラドスは思い切り息を吸い、

『はっ!』

と、細いハイドロポンプをひび割れた窓に向かって放射した。

そして、その勢いで中であつた爆弾を外に追いやり、空中へと放つた。

次の瞬間、轟音と火炎と共にその爆弾は碎け散った。

『でもさ、爆発物の処理って大変じゃない?』

爆発物処理班はあくまでも爆発物を処理するのが目的。それが終わると、その後はほとんど暇なのだ。まあ、雑用係という名目もある

が、今はそういうのも片付けておいたらしく手持ち無沙汰らしい。という訳で、蒼達はその現場近くで話していた。

「まあ、大変ですけどね。これが仕事だからやってんですよ。」
「……どうしてこの職に？危険だといって有名じゃないですか。」

蒼は尤もな質問をした。

前述にもある通り、爆発物処理は非常に危険な仕事なため、募集者が少なく、さらには高度な技術と爆発の仕組みに関する諸々の事を詳しく知らねばならないのだ。

つまり、かなりハイレベルな職なのである。
が、この男性は答える。

「まあ、昔から機械をいじってましたしね、そういう解体とかなら強いんですよ。」

『だから、あとは仕掛けを学ぶだけで十分だったんだと。』

『そっか、それでこの仕事に入ったんだ。』

「そういうことですがね。」

と、ここまで話して、蒼はふと気づいた。

「……そっぴや、泊まるところが無いな。」

『え？じゃあ、どうするの？』

「……お前が別に良いなら、ここで寝ても良いんだが？」

『やだ！それは死んでもいや！ちゃんとしたところで寝るの！』

そつなのだ、ホテルが徹底的に破壊されてしまったため（一応原形は留めているが）、もう泊まるに泊まれないのだ。

頭を悩ます蒼とエンジェルに、外国人男性は言った。

「だったら、俺様の友達がホテルを経営してるから、そいつに空いてたら入れさせてもらおう。」

「……あ、ありがとうございます。」

『うわ〜、助かった〜!』

と、双方とも安堵の色を隠せない。

そして、男が電話に出ると、

「もしもしでございます。……ああ、そうそう、少年とイーブイなんですけど……。お、空いてる? ……分かった、伝えておくでございます。」

と、電話を切ると、

「空いているそうだし、いまから案内しますね。」

『やったー! ソウ、早く行こう!』

「……ん、ああ。」

その男性に連れてかれ、ホテルに到着。

そのホテルは、蒼達が泊まるうとしていたホテルとほとんど変わらない。

「それじゃ、話は通してあるから、泊まっていってくださいます。」

「……ありがとうございます。」

『じゃね〜』

……そんな感じで1日目は終わっていく。

第八話 ‘ ちよつとお騒がせな二日目午前 ’ (前書き)

……体調不良を起こしてから早4日。

エンジェル『だ、大丈夫？』

一応。今はほとんど良くなったけど、前みたいになくさん食べられなくなつたし、少し痩せちゃつたよ……。

エンジェル『ゴウ君から聞いたけど、朝昼とゼリーだけしか食べてないって日もあつたとか？』

……なんで知つてるの？

エンジェル『え？えくと、ゴウ君が何か、いんふお、っていう奴に聞いたとか……。』

インフォ……。あいつか(汗)

まあ、それより本編をどうぞお楽しみください。

因みに、ギャグ要素が強いです。

第八話、ちよつとお騒がせな二日目午前、

2日目の朝。

夜が明けてからまだ2時間も経っていないという早い時間に、蒼は起きた。

もちろん、エンジェルは『……ん、いただきま〜す……。』と何かの夢を見ているらしい。もちろん、夢の内容は寢言ではつきりと分かってしまうが。

とりあえず、くしゃくしゃになった髪を整えるか、と洗面所に行つた際、『何か』が置いてあつた。

その『何か』の正体は、洗面台の横に置いてある、何かが入つてゐるであろう箱。しかも、真っ黒に染められている。

そこから何やら時計が針を進める音が。

ついでに言つたら、箱から少し火薬臭が。

ここから導き出せる結論は唯一つ。

「……爆弾!？」

まさか、と思つて箱を開けると、さも当然のようにダイナマイトと呼ばれる爆弾の類がたくさん詰め込まれていた。

とりあえずその蓋を閉め、少々ボケーとした頭で状況を整理しながら、とりあえず警察に通報した。

それから1分後。

「いや、またあなたですか。いい加減にしてほしいものでござい
ますよ。」

またあの外国人バク処理だ。

「……いい加減も何も、俺とは関係ありませんよ。それより、さも
当然のように爆弾が置いてあるなんてどんな『国』なんですかここ
?」

「平和な国です!！」

「……そんな自信満々に言わないでください、これを目の前にして
笑顔でそんな台詞が言えるほうも怖いですよ?」

しかし、ここでこんな話をしていると、箱の中の爆弾は絶対に爆発する。

という訳で、蒼は部屋を出ようとしたが、

「待ってください！1人にしないで下さい！1人で死ぬのは嫌です！」

「……！おい、仮にもバク処理ですよ？そんなことでよく入れましたな。しかも、昨日は大丈夫だったんじゃ……。」「

「あれは遠距離からの解体だから大丈夫だったんですけど！本当に1人にしないで下さいお願いいたしますでござりますよ！」

「……もう敬語として狂ってるぞ？」

とりあえず、振り切って出ようとしたが、

エンジェルがまだ部屋で寝ていたことを忘れていた。

まさか、置いていくわけにも行かないと思い、抱えていこうとしたら、

「……あ。」

それに気づいたバク処理外国人がエンジェルを抱きかかえると、

「ハハハ！こいつを返して欲しくばここに残るが良いのです！」

「……あんた本当に警察か？」

そんな言葉が思わず口から出てしまつ。

しかし、

『んむ〜……。ポフィン〜……』

この状況を唯一理解していない平和なポケモンが、バク処理外国人の腕に噛み付く。容赦もあるはずが無く思い切り。

「……痛い〜〜〜〜！！！！??」

さすがに敬語で話す余裕も無く、男性は叫びながら抱きかかえていた力を無くし、その男性の腕から落ちたエンジェルはそのまま重力に招待され固い床へ激突。しかも顔面から。

この後、第二の悲鳴が起こったことは言うまでも無い。

とりあえず、仕方が無いので蒼は部屋に残り、爆弾処理の様子を涙目になっているエンジェルを抱えながら見ていた。

さすがは爆弾処理班、手際よく作業をし、2、30秒でそのまま爆発を止めてしまった。

『す〜い……。』

もはや神業とも呼べる領域の処理を目の当たりにしたエンジェルは、痛みを忘れて見入っていた。

「よし、とりあえずオーケーでしょう。」

その後、爆弾を箱ごと抱えて「またあったら連絡お願いします」と言いながら、出て行ってしまった。

「……確かに技量はあるが、あの性格はどうにかして欲しいものだな。」

『同感かも。……つて、』

そして、エンジェルは処理の様子に見入っていたために忘れた痛みがぶり返し、ベッドの上でのた打ち回っていた。隣の部屋どころかこのホテル中に迷惑をかけそうな程の大音量。

しかし、壁には防音対策をしているらしく、全く声が響かなかったのが幸いだ。

「……つたく、このくらい大丈夫だろ。顔面ダイレクトで床に直撃してっけど、……奇跡的に骨は折れてないし、単なる打撲だ。」

と、学校で習ったことを駆使して、軽く診察したが、

『……うつ、痛いよお……。』

さすがに、痛みにこらえながらも涙を流す姿を見て可哀想だと思い、病院へと連れて行くことにした。

「……良かったな、大した異常は無くて。」

『うん、大分痛みも引いてきたし。』

少し赤くなっている鼻を前足で押さえているエンジェルを、蒼は抱えて歩いていた。

「……………にしても、診察代も普通の病院の50分の1くらいだったしな。驚きだ。」

どうやら、この『国』は宿泊代ばかりでなく、診察代、レストランでの料金、ついでに言うならタクシーやバスの料金もほとんど無料に近い金額だった。

一体どうやってこれだけ安くするだけの金が余っているんだろうと考えると、少しぞつとする。

『ね、ね、早くホテルに戻って朝ご飯食べよ』
「……………だな。大分遅くなったけどな。」

現在午前9時。起きてから1時間半過ぎているため、さすがに腹が減っているらしい。

という訳でホテルに戻って朝食を取った。

部屋に戻って、一通りの準備を終えた後、外に出た蒼とエンジェルはこの『国』の散策をすることにした。

道路には、地面に接して走る車は1台も無く、つまり浮いている車しかないというのが入国時にも感じたことだが、電化製品を売って

いる店を見ると、テレビは何故こんなに薄くするのか分からないほど薄く、声で文字が打てるパソコンもあり、非常にコンパクトになった縦5センチ、横2センチの、もはやどう文字を打つのか分からない携帯電話等が売られていた。

『ほえ、すごいね……。』

「だろ？こんなのはこの『国』じゃ当たり前じゃけん。」

「……そうなのか。」

と、ここで蒼とエンジェルは首を捻る。

今、確実に誰かが会話の途中に水を差したが、どうも聞き覚えのある口調に声だった。

ふと、蒼は後ろを振り返ると、

「ハア、イ、元気にしてた？」

「……なつ、時雨！？」

そう、茶髪に縁の赤い眼鏡をかけているその男は、蒼の友人である中川時雨なのだ。

「……お前、試験は受けてないんじゃ……？？」

「んん？その点は問題ナッシング！」

そう言っただけで見たのは、まさに自分の、つまり時雨の名前が書いてあるパスだ。

「ええ！？一体どうやって!?!」

「ナイスリアクション、サンクス ま、ここではあまり言えない話なのよな。とりあえず、俺の泊まってるホテルの部屋について来いやー！っ！！」

「……何でそんなハイテンションなんだ？」

という訳で散策時間5分という非常に短い時間を終え、また屋内へと戻ってしまうのだった。

時雨の話をもとめるとこういうことになる。

パスは偽造のものであり、自作であること。家族に内緒でこっそりと抜けてきたこと。

武器は、道端に倒れていた単攻民族から奪取したこと（因みに、銃器2段を所有しているため、実弾入りの銃器を盗んだ）。

「……お前、ばれたら確実に指名手配確定だぞ？」

「大丈夫やて。うちの父親もこんな感じじゃぜよ？」

「それって、スパイって職業でしたよね？」

「ま、そうやな。」

……………父親がスパイ？

時雨のパートナー、アロマの言葉に目が点になった。

『え、え？ちょっと待って！シグレのお父さんって、スパイなの！？』

「え？せやけど、何？」

「……それ、軽々しく言うことじゃないぞ？」

「大丈夫大丈夫！多分！」

『いや、それじゃ絶対駄目でしょ！』

という訳で、この時点で1人、スパイの子供と1匹の不正入国発覚。パスを精巧に作る技術があるのもその為だろう。

「……というより、実弾入りの銃を持つてるとか言わなかったか？」

「言ったが、どうかしたん？」

「……お前、しっかり銃器についての説明を読んだのか？実弾は禁止だぞ？限界は麻酔弾までだ。」

「おりよ？そうだったか、あっはははー。」

『うわー、分かりやすいほど凄い棒読み！てか、絶対知ってたでしょー！』

『そうだったんですか、シグレさん？私には大丈夫とか言ってませんでした？』

「……。」

凄まじい汗を流している時雨。

嘘をついているのは明白だった。

「……はいはい、わかりましたYO。ゴム弾買ってくるからちょっと待ってるんだZE！」

「……反省しているように見えないが。」

「目の錯覚なのさ！さー、買いに行こーっ！！」

と、アロマを連れてゴム弾を買いに行った時雨だった。

「……やばいな。」

『うん、ボクとソウ、犯罪者のお友達？』

「……でも、そう言うのは止めよう。」

『そうだね』

この後、時雨が帰ってきたのは20分後で、2人と2匹で散策を始めるのだった。

第八話　「ちょっとお騒がせな二日目午前」（後書き）

久々に長い前書きを書いたな……。……。

時雨「それはそれでええんちゃう？」

しかし、君もよくやるよ。パスなんてどのくらい精巧に作ったの？

時雨「ほれ、このコピーを使って模様を写し取って、ICチップに情報を入れたり等等など。大変じゃったぞ。」

……最早犯罪じゃ……。……（汗）

時雨「ばれなきゃ平気だぜ！」

その精神が駄目なんだってば！

時雨「それでは、次回もお楽しみに！」

無理に終わらした！

第九話　何かもついつちやいぢや？（前書き）

タイトル通りです（汗）少しごちやごちやしているかも？

エンジェル『それ駄目じゃん（汗）』

それではどうぞ！

エンジェル『あーっ！無視されたー！ーッ！ー！』

第九話　何かもうごつちやごつちや？

現在、蒼とエンジエルは、人には言えない手段でサイバーシティに
来た時雨と共に行動していた。

因みに、現在は『国』の言わば中央部より少し東寄りの『右方エリ
ア』、そこには様々な商品が売られている言わば商店街のようなど
ころだった。

ここで、サイバーシティの内部を説明させてもらおうと、

北寄りにある、研究施設が集中して建てられている『前方エリア』、

蒼達が今いる東寄りの巨大な商店街が複数個ある『右方エリア』、

『国』内で過密が起きている西側の『左方エリア』、

南西にある会社のビルなどが建ち並ぶ『後方エリア』、

南東にある荒地同然の『無開発エリア』、

そして、『無開発エリア』を除く全エリアの統制を行う『中央部』。
ここに『国』のトップが住んでいることが多い、まさにサイバーシ
ティの『心臓』だ。入るにも出るにも、誰であろうと厳重な検査が
必要で、そして他のエリアからは見えないようにそのエリアのみ全
て特殊な壁で覆われている。つまり、内部が全く見えない。

そして、『中央部』や『無開発エリア』を除く全エリアを結ぶのは、
この『国』で発明された『HS-1919』、新幹線の倍の速さで
走る電車だ。これに乗っても人間に害が無いのは、もはや技術の域

を少し超えている気がする。

これが、現在世界で最も技術力が上を行っている『国』の全貌だ。

さて、話を戻して、蒼達はその商店街を歩いていった。

「……商店街、か。そうやって表現できるのか、これ？」

『うん、だって店の一つ一つが大きいし、普通にあるような商店街とぜんぜんイメージが違うよ!?!?』

2人はそんな言葉を口に出した。

確かに、一つ一つの店が大きく、その品揃えもかなり良好である。客も多い。商店街と少しだけイメージが違う気がする。

「ま、それがこの『国』の常識だべさ。」

「……どこの方言だ。」

『ええと、確か……。』

『いや、アロマちゃん、そこまで真剣に答えなくて良いから……。』

こんな感じの会話を繰り返すこと数分。

2人と2匹はある店へと辿り着いた。

「この『国』がどれだけ発展してるかを見るならここやぞ。」

時雨が言う。

そこは、時雨と会う前に見たような、見たことの無い電化製品諸々が立ち並ぶ店だった。

「……確かに、そうかもしれないな。」

『ねえ、早く行こうよ!?!?』

『ちよつ、ちよつとエンジェルさん!!』

せかすエンジェルを追いかけるアロマ。
それに着いて行った蒼と時雨だった。

確かに、ここならばこの『国』の技術力が一目で分かるかもしれない。

音楽プレイヤーは、何の変哲もなさそうな物だが、

「これは、こうできるんだぜよ!」

と、少々興奮気味に言いながらその音楽プレイヤーを手に取り操作を始める。

まず、機能としては、『音楽を聞く』は勿論、『テレビを見る』、『ラジオを聞く』、『インターネットで調べて、その曲をその場でダウンロードする』等等、様々なものがあつた。

しかし、ここで疑問が。

「……おい、時雨。」

「何だぜよ、大佐?」

「……誰が大佐だ。……それより、何でそんなにこれの操作方法が分かるんだ?」

「あ?そりゃお前、勘だ」

「……すまないが、もう一度言ってくれるか？」

「だから、今までののは全部勘で操作してたんだよん。」

最早、呆れてしまった。

大体、勘で全て操作できるほうがおかしい。それほど複雑なものになっているのだ。因みにそれがこの商品の欠点だが、性能が良いのでそこそこ売れているらしい。

そして、エンジェルとアロマはというと……。

『ほえ~~~~、気持ち良い~~~~』

省エネルギーで風力がそれなりのものになる扇風機を前にして涼んでいた。

『あの、エンジェルさん？体調崩しますよ？』

『平気平気~~~~』

『扇風機でエンジョイしないで、早く離れないと本当に風邪引きますよ？旅に戻れないし観光も出来ませんよ？』

『えっ！？それはヤダッ！』

と、すぐさま扇風機から身を引くエンジェル。
すると、

『……確かに、気持ち良いですね……。』

『あーっ！っ！ボクを騙したなーっ！』

見事扇風機を占領することに成功したアロマに、エンジェルはぎゃーぎゃー騒いでいた。

……その隣にある扇風機を使えば平穩に済むのだが、それに気付くのは10分後の話。

未知の電子機器を粗方あらかた見終わった蒼と時雨は、そろそろ別の所に行くかと思い、エンジェルとアロマを探していた。

「……ったく、どこにいるんだか……。」

悪態をつくのも無理はない。この店、なんと10階建てで、加えてフロア1つ1つがとにかく広い。そんなに商品があるものなのか、と少し疑問に思うが、ここは科学の最先端に行く『国』。そうであってもおかしくはないだろう。何せ、『この世界の電子機器は大体ここで作られている』と言われていた程だ。

兎にも角にも、なかなか見つからないだろう、そう思っていると。

『あーっ！取られたーっ！！』

『うるっせえ！お前ずつと当たってたんだから次は俺だ！！』

『ちよ、ちよつと……？』

……一発でエンジェルとアロマの居場所が分かったが、もう一匹は誰の声だろうか？

とりあえず、声のする方へ近づくと、

『だから、ずっと当たってないって！！まだ一分くらい！！』

『一分も当たってれば十分じゃねえか！白イーブイ！』

『なっ……、ボクにはエンジェルって名前があるの！！』

『お前、ポケモンのこと言えねえじゃねえか！俺の名前がボルトなのに一切覚えねえし！！学習能力ゼロか！？』

『そんな言い方無いでしょ！！』

なんと、口論していた相手は前に対戦した少女、理沙の手持ちポケモンのエース、ピカチュウのボルトだった。

その時、

「あ、あの、お客様……？」

店員が止めようと近づくと、

『『ちよつと黙っててください！！！！』』

という息ピッタリの怒声に（ついでにボルトは放電寸前）、店員もタジタジ。

しかし、いきなり背後から日本刀が2本現れ、口論している2人の首根っこを捕らえた。

そして、ボルトのトレーナー、理沙は静かにこう言った。

「……2人とも、喧嘩はやめてよね。」

にっこり笑顔だが、目は笑っていない。

これには2匹もコクコクと首肯せざるを得なかった。

という訳で、口論終結。暴力的解決だけど気にしたら負けです。

「まったく、何かあったらすぐ喧嘩するんだから……。」
「けっ、むかつく奴にはそれなりの言葉くらい必要だろ？」
「アンタだってむかつく野郎じゃないの!？」
「んだと?何ならここでめえを消し炭にしても良いんだぜ？」
「やれるもんならね。」
「ッ!上等だコラ!」

と、なんやかんやでボルトが電撃を駆使してロケット並みの速さを生み出す。

エンジェルはこれを何とか避けるが、

その後ろにいたアロマにぶつかりそうになる。

『…………え?』

当然、アロマはその時にはじめて気付いたため、避ける暇がない。

『い、イヤッ…………!』

これから来る痛みの恐怖に目をきゅっと瞑るアロマ。
しかし、

「アロマ！今助けろき！」

時雨が間一髪でアロマの身体を自身の身体へと引き、ボルトの弾丸アタックから逃れられた。

アロマは当然、もう少しで死ぬんじゃないかという恐怖に襲われた為、泣き出してしまった。

それを無視して、ボルトはエンジェルに言う。

『チツ、避けんなよ！』

『避けなかったら怪我するでしょ！？』

『いいだろ怪我したって！！』

『絶対に良くない！！』

こんな感じでまた喧嘩が始まっていくのであったが、またも理沙、ついでにアロマを泣かせた為に『実弾入りの銃』を持ち、怒り心頭の時雨が脅迫で止めたのは別の話。

そんなこんななことがあり、ボルトをモンスターボールに戻す理沙。

「まったく、少し黙っててよね……。」

そして、法律に則って代わりに出したポケモンは、

「よし、出て来い、サマー……！」

ポンという音と光と共に出現したポケモンは、

『……うゅ〜、チリーンのサマーだにゃ〜。』

時雨にも似た独特の口調で話すそのポケモンは、まさに風鈴の形そのもののポケモン、チリーンだった。名はサマーというらしい。声は高く、どこか可愛げなものがある。

「……まだ時期的に夏じゃないがな。」

『うるさいにゃ〜！こっちはまだ4月でも、現実世界では6月なんだから気にしないにゃ〜！』

可愛らしい声で反論するサマー。

しかし、そこでエンジェルが言う。

『しっかし、凄い喋り方するよね〜。』

『……そうですね……。』

「俺の口調みたいだZ.E。」

『うわ〜、同じような凄い口調の人がいるにゃ〜』

同じように独特の口調を持つ人物を発見し、何故か大喜びのサマー。

「あん？俺のことがア？」

『うん、でもでも、口調は統一した方が良くないにゃ〜？』

サマー、ご尤もな意見ありがとう（笑）

そして、それぞれのレストランで事件は起こって行く。
が、それは次の話から、ということにしてあげよう。

第九話、何かもついでにちやいぢや？（後書き）

そういえば、思ったこと。

蒼「……何だ？」

前書きも後書きも20000文字まで入力可能とか言ってるけど、そんなに書く人いるのかな、って。

蒼「……20000文字って、物語1つ分はまとまりそうだけだな。

」

うん。

でも、やっぱり実際、書く人は少なそうだね……。。

蒼「……それはそうだよ。」

それでは、次回は蒼とエンジェルの話です。どうぞお楽しみに！

第十話 『レストランでの惨劇 蒼&エンジェル』（前書き）

今回、初めて設定しましたが、残酷描写（？）有りです。
といっても、かなり表現は抑えましたが（笑）

蒼「……それは、残酷な描写に入るのか？」

入れておいて損は無いでしょ？

これからどんどんこんな感じに……、ならないよう気をつけます
（汗）

エンジェル『作者さん、根が黒いからエスカレーンムググッ！？』

それ以上言つな。

エンジェル『……ひゃい（涙）』

では、どござー！

第十話　レストランでの惨劇　蒼&エンジェル

3組が別れた後、蒼はもはや腹が減って一步も動けない状況のエンジェルを腕に抱いて最寄のレストランまで来ていた。

そのレストランは、いわば和食系のものだった。店の名前は知らないが、メニューは見たこともあるので、自分の『国』にあるのと同じ系列のものかもしれない。それはさておき、現状況。

1・蒼は呆れ果てている。

2・エンジェルは満足そうな顔をしている。

3・エンジェルの眼前には山積みになった皿が……。

「……………」

『ふ〜、おいしかった』

「…………お前、本当に良く食べるな、ってかここまで食べたのは初めてじゃないか？いつももの2倍はいつてるぞ、量。」

『う、うるさいっ…！』

エンジェルはそのことを指摘されて、顔を赤らめてそっぽを向いた。

「…………しかし、これだけ食ってもほぼタダって凄いやな……………」

『うん、同感。』

「…………そして、俺は他の国での出費が限りなく心配なんだが。」

そんな平凡な会話をすること10分。

別れてから既に1時間くらいになった。

「……じゃ、そろそろ出ますか……。」

と、その時。

突然、重装備の人間たちが店に入ってきた。

「……？」

『ねえ、あの人たち誰？』

「……俺に聞くな。」

と、その時、その内の1人が店員に、

「この中で、『神の子』はおらぬのか!!」

大声で、胸倉を掴んで大体こんなことを言った。

「か、『神の子』、ですか……？」

さすがに店員は戸惑った様子だった。

そもそも、(『神の子』って何だ?)と知っていることだろう。

「チッ、『神の子』も知らないのか!?!ぶっ殺すぞ!?!」

「ひ、ひいっ!」

店員の顔が引きつったとき、隣にいた人間が、

「そこまでしておきなさい。じゃないと、情報も引き出せないわよ?」

これ、口調からすると女性なのだが、声は滅茶苦茶低い。

『……………うわゝ、オカマ?』

エンジェルが思わずそういうと、

「だ、誰!?今、この美しい私の暴言を言ったのはっ!」

「お前が落ち着け、『10』。人の事言えてないぞ。」

店員の胸倉を掴んでいた男が、店員を床に下ろしつつこう言った。

「うるさいわよ、『75』!雑魚の分際でそんな事言っんじやないわよ!」

「っーか、今はこんなことしてる場合じゃないと思うが。」

その言葉に、ようやく『10』と呼ばれたオカ……、失礼、男は平静を取り戻した。

そして、

「さあ、『神の子』はいないの!?名前が、ええと……………」

と、その『オカマ』は後ろにいた人間から資料を受け取ってこう言った。

「灰原蒼！」

「……………！！？」

蒼は、傍から見ても表情の変化が見て取れるほど、驚いていた。それはそつだ。いきなり怪しい重装備の人たちが来て、しかも、そいつらが探す『神の子』が自分だなんて。何かの間違いだろ、そう思ったが、

「……………お前、超動揺してる？」

「……………？」

蒼が横を向くと、ひよろりとした体系の人間……………声からして女性……………が話しかけてきた。

「やっぱりお前か、超ビンゴなんですけど。」

資料に載った写真には、いつ撮ったのか、自分の顔写真が張られていた。

当然、蒼の顔は困惑の色一色だ。

「……こんなことができるなんて、私たちが何者か、って顔してるわね。良いわ、教えてア・ゲ・ル」

オカマは、非常に不快になるような声を出して言った。

しかし、相手が何者なのかを知るいいチャンスでもあるので、聞き逃すわけにはいかない。

「私たちは、まあ、あれよ……、何だっけ？」

「オイ。」

『75』が突っ込む。

もはや、シリアスなんだかそうでないんだか良く分からなくなってきた。

そして、案の定『10』が話すと一生進みそうに無いので、『75』が代わりに説明する。

「俺達は、言うなれば悪の組織、ランド団の下っ端だ。」

当然、エンジェルは首を傾げる。

が、蒼は身体を震わせていた。

そこに宿る感情は、怒りと恐怖。

「……そうか、お前らが……。」

「あん？何言ってるのアンタ……。」

『10』は、その蒼の言葉にピンときたようだ。

「ああ、そうかそうか。そういうことね…… だったら尚更、こっちについて来るべきよっ。」

「……？」

蒼はその言葉の真意を理解できなかったが、

「でも、その前に叩き潰してアナタを攫うわよ〜ん」

『10』は特製のボールを宙に投げ、一筋の光がそこから現れる。光が具現化し、出てきたポケモンは……。

「……おいおい、冗談だろ？」

『うつひゃ〜……。』

そこにいたのは、あろうことか伝説のポケモンである、ファイヤーだった。

その姿に、客はパニックを起こすも、重装備の者達の1人が銃で人を撃つと、一気に静まり返った。

「ふん、そいつは『10』だからな。その程度のポケモンを持っていて当然だ。」

『75』と呼ばれた男が、無駄口を叩く。

「さあ、ここで二択問題よ。」

ファイヤーを隣に置いてその上で質問をする。

「ついて来るか、殺されるか。どちらか選びなさい。」

対する、蒼の答えは、

「……確かに、お前らについて行けば無傷で済む。」

「へえ、超良く分かってんじゃない。」
「黙れ、『29』。」

へえへえ、と適当な声を出して黙った女性、『29』は客の監視を始めた。

『でもソウ！それじゃボク達……！』

エンジェルが先程の蒼の言葉を否定しようとするも、蒼が言葉を繋げる。

「……だが、お前らのような人を平気で撃ち殺す屑とは一緒にはならない。」

蒼はホルスターから銃を抜き、自分も戦闘に参加する。

「そう、残念ね。」

『10』はクスッと笑う（様な仕草をして）、ファイヤーにこう命令した。

「火炎放射。」

瞬間、客や机なども一緒に、紅蓮の炎が全て飲み込んでいく。当然、手加減も無いので人間が生きていられる温度でもない。

だが、

「…………お前、またいつの間に…………。」

「し、仕方ないでしょ！？何か分からないうちに変わっちゃうんだからっ！」

「…………ま、助かったがな。」

紅蓮の炎を吸い込んで、難を逃れたのは、蒼と、炎を吸い込んだエンジンジェルだった。

ただし、エンジンジェルは今、ブースターに変化している。

ブースターの特性は『貰い火』。炎タイプの技を受けてもそれを力へと変換するものだ。

「ちっ、面倒な真似を…………！」

『10』は少し憤ったが、すぐに笑った。

「なら、数を増やせばいいのよね？」

『10』はボールを2つ、『29』は3つ取り出し、合計6体のポケモンが出現した。

出ているポケモンは、ファイヤー、オニゴーリ、ロトム、クサイハナ、ランターン、ガバイトだった。

完全に蒼の方が不利である。

「…………まずいな…………。」

『に、逃げよっ！』

蒼とエンジェルは逃走を図ったものの、それを許さないのは敵であるポケモン6体。

その6体は、それぞれ攻撃を放ち、直撃する。

「ふん、終わったかしらね……。」

「死んでなきや超良いけどね。」

「もつともだ、『10』。位が高いからといってあまり派手にやるものではない。」

「うるっさいわね！」

やはり、シリアスっぽい雰囲気なのに、わいわいぎゃーぎゃー騒いでいる3人。

しかし、これで蒼は倒れた、というのは会話から見ても共通した考えだろう。

「さて、あとは連れて帰るだけね……。」

重装備を外し、仲間へ渡して『10』は仲間へ命令する。

「回収よ。『神の子』輸送班はは回路G、他は……。」

客を見て、にやりと笑ってから指示した。

「ここにいる奴らの心臓を抉り取りなさい。以上、命令終了。」

そして、重装備の連中が泣き喚いたり叫んだりしている客達を武器で皆殺しにし始めた。

『10』と『29』はポケモンを仕舞い、蒼の元へと歩く。

「さてさて、連れて帰りますか……。」

「そうだね、超だるいし早く帰りたいんだけど。」

2人が蒼を回収しようとした。

その時、

そこから非致死性のゴム弾が3発、立て続けに連射された。その弾の軌道に沿うようにして、『10』は吹っ飛ぶ。

「ゴアッ……!？」

驚きと疑念を浮かべながら壁に背中を激突させる。

そして、

その銃弾を撃った主は、蒼だった。それも、あの状況があったにも関わらず無傷であった。エンジェルも、当然無事である。しかし、

「……何故？超理由が気になる！！」

『29』が銃を取り出そうとするも、一瞬でその手を撃って、銃を手から放させる。

射撃技術10段の男は、こう言った。

「……さあな。俺にも理由は分からない。」

そう言いながら、皆殺しをしている連中の銃を次々と無駄なく撃ち、攻撃手段をなくす。

「……だが、今は退いた方が懸命だと思っぞ？」

一通り撃ち終わると、生き残った客は逃げ出し、重装備の連中は銃を捨つも、あのゴム弾に少々細工してあったのか、銃身が少し曲がり、使い物にならなくなっていた。

そして、起き上がろうとする『10』の額に狙いを定め、こう言った。

「……尤も、退かないなら撃つがな。」

その言葉には、何故か怒りの感情が入り混じっている。傍から見ているエンジェルには、その理由は分からない。

「……うふふ。いいわあ……。」

『10』は、正直に言わせてもらつと非常に不快になる言葉を吐いた。

「その怒り狂つた時でさえ冷静になり、的確に、相手を排除する…

…。」

「……何が言いたい？」

蒼は銃口を『10』の額へ押し付ける。

そして、そんな状況でこんな言葉を声にした。

「……あなたの父親そっくりね……。」

「……何？」

思わず聞き返してしまった。

そこで、隙が生まれてしまい、『10』は銃を蒼の手から引き離し、腹を蹴つて吹っ飛ばした。

「……ガッ……！？」

そして、飛ばされた先には、

『ちよっ、危なーーーーーい!!!!!!!!!!』

体重に数倍違いがあるため、蒼にぶつかってはひとたまりも無い。かといって、パートナーを床に叩き伏せてしまふのも心苦しい。

『……………うっ~~~~~~~~っ!』

エンジェルは何をすれば言いか分からず苦悩し始めた。

「……………お前、それじゃ意味無いだろッ……………」

蒼が辛うじて言葉を発するが、エンジェルには届いていない。

見ると、いつの間にかエーフィに変化し、蒼を念力で受け止めたエンジェルに。

「……………助かった。」

『……………へ?今、ボク、何かした?』

「……………自分の姿を見てみる。」

『え?……………うわっ、エーフィになってる!?!』

そこまで会話を続け、蒼は周りを見渡した。

そこには、今まで目を向けもしなかった骸と、鉄のような臭いと、怯える客、奴らの残していった、使い物にならぬ銃しかなかった。

「……………！」

蒼は、目の前の惨状に対して、辛うじて吐き気を抑えた。

『……………ねえ、これどういうこと？』

「……………人が殺されてるんだよ……………！」

その言葉を聞いた瞬間、エンジェルは『ちょっと気持ち悪くなってきた……………。』と言って出て行ってしまった。

蒼とエンジェルの、レストランでの惨劇。
時間にして5分程度。

しかし、その5分が過ぎた後、『日常』が少なからず戻ってしまっていた。

第十話 『レストランでの惨劇 蒼&エンジェル』（後書き）

そして、後書きで書くべきではないのですが、更新遅れてすみませ
んでした（汗）

蒼「……………前書きで言えばいいんじゃない？……………」

……………今後はこうならないよう注意します。

蒼「……………人の話を聞け。」

第十一話、苦悩する男と怯えるポケモンと迷惑そうにする客と……

時雨&マ

一ヶ月ぶりの更新です(汗)

大変申し訳ありませんでした……。

レストランでの惨劇が行われているのと同時に、時雨とアロマは別のレストランにいた。

アロマも時雨も和食好きなので、それを取り扱っているところに来たのだが……。

「…………ぐぐつ…………。」

時雨は頭を抱えて座っていた。

その様子をアロマは心配そうに見ている。が、時雨は当然そんな様子に気付くはずが無い。

そして、

「…………ぐあああああああああああああつ！！！！一体どうすればいいんだぜよオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「…………『…………つるさい！！』…………『…………』…………『…………』…………」

客全員にツッコミ兼注意を受けたただいま絶叫中の時雨。

その原因は、あの理沙のチリーン、サマーの台詞にある。

『その時は、顔の形が変わっても文句は言わないでね、だにゃ〜』

『

口調を決めると言われ、ついとして黒い笑みを浮かべられ、こんな台詞を言われたら追い詰められざるを得ない。

蒼の話を聞く限りでは、相当の実力者らしいし、そのパートナーであるサマーも当然強いだろうと推測できる。

そして、それらを総合して考えると、返答次第では……………

……。

「……なあ、アロマ、一体何にすればいいと思うんだワン？」

『半泣きでこっちに顔向けしないで下さいよ……。』

困ったように返答するアロマ。

時雨はとりあえず、ノートに『語尾候補』を書いていた。

その一例は下の通り。

『くいやー』『くぜよ』『くZE』『くイモ』『くマケドニア!』

……半泣き状態から察するに、恐らく思考回路がマトモでないのだろう。最後の二つはかなりぶつ飛んだ語尾になっていた。面白いのかどうかも不明だ。いや、面白くは無いのだが。

『と、とりあえず何か食べて落ち着きませんか？まだ私しか食べてませんよ？』

「……そ、そっだにゃんころりん。」

『ちよつと、壊れないで下さいよ……。』

と返答するも、とりあえずメニューを手渡すアロマ。

時雨は適当にメニューから料理を選んで近くにいた店員に伝える（さつきから時雨が騒いでいるので、店員は苦笑いだが）。

そして、また机に突っ伏して考え始める時雨。

「……こんなんなら、旅に出なきゃ良かったきゅ。」

『だから、壊れないで下さい。もう逆に恐ろしくなってきましたよ？』

アロマにもとうとう引かれ始めるほど追い詰められている時雨。ついいには、頭を机にぶつけ始めた。ガン、ガン、とモンスターボールを作るガンテツさんの家の如く、何度も何度も。

「ちよ、ちよっと！死にますって！止めてくださいよお！」

アロマも止めに入るが、突然尿意をもよおしてしまった。そこで、アロマは席を離れることに。

『ちよ、ちよっとトイレ行ってきますね……。』

しかし、時雨は頭打ち付けショー（頭からの赤い噴水付）を止めて叫ぶ。

「あ！この俺を一人にしないでくれっ！」

『うわ、ちよっと！子供じゃないんですから！！』

とりあえず、抱きつく時雨に仕方なく葉っぱカッターを浴びせてトイレへ向かうアロマ。

その後、トイレにいる時誰かさんの絶叫とその他諸々の怒声と何かが壊れる音や焼ける音等等が聞こえたそうなの。

『ぶっ、とりあえず戻るとしましょう……。』

アロマは用を足し、席に戻ろうとしたのだが、

何か、ドアに何かが貼ってある。
正確には、黒い箱がドアにある。
もっと正確に言うなら、タイマーがついている。
さらには、あからさまに円柱のようなものもついている。それも片方の底面から紐が伸びた。

『まさか……。』

アロマは戦慄した。

それもそのはず、『これ』についての話はこの『国』に来てから既に耳にしているからだ。

勿論、その正体は、

『爆弾！？』

この小説で、もはやパターン化しつつある爆弾である。

が、今回はバク処理もいなければ、トイレのドアも開かず、ついでに1匹しかおらず、トイレの壁も防音なので声も外に漏れない、つまりいつの間にか密室になっているのだ。

さらに、そのような助けの呼べぬ状況で、爆弾の指し示す制限時間は5分。それまでに処理をしなければ体は、瓦礫と共に肉片と化するだろう。

『……………うああああ……。』

アロマは、先に述べたような自分のなれの果てを想像したのか、顔面蒼白で泣き、身体もガクガクと震えていた。
あと5分で自分の命は終わる。

その事実を突きつけられ、アロマはただ震えるしかなかった。

そんな状況に陥る中、時雨はまだ考えていた。

料理は海鮮丼だが、それが来ても手をつけていない。

「……………もう死のうかにゃー……………」

時雨が涙目で、しかも半ば本気でそう言った瞬間、気付いた。

アロマがまだ帰って来ていない事に。もう10分は経つ。

「……………おかしいぜよ。」

時雨は、ようやく事の異常さに気付いたのか、ポケモン専用女子トイレに急いだ。

アロマは、2分ほど経って、『処理すれば死なない』という思考回路ができたのか、爆弾を震えながら処理し始めた。まずは外枠を外す。

その中には、赤と青の2本のコードが。典型的な爆弾のスタイルだった。

『……ええ〜……。』

アロマは、命の危機に瀕している状況で少し落胆してしまった。もつとこう、コードがたくさんあると思っていたので当然だろうが、今はこれに感謝するしかない。が、そればかりも出来ない。確率は2分の1。死ぬか生きるかは自分の選択次第。その重圧感に苛まれ、まだ身体は震えている。

『赤か、青……。』

どちらかを葉っぱカッターで切り裂いてしまえば、自分は助かるかもしれないし、グロテスクシーンが待ち受けているかもしれない。しかし、

『……選べない、選べないですよ……。』

アロマは恐怖に足がすくみ、ぺたんと座り込んでしまった。出来ない。自分の選択で死ぬかもしれない状況で、どちらを切るなと選択できるわけが無い。

『時雨さん……助けてください……。』

アロマは自分のパートナーに泣きながら助けを乞う。しかし、助けに来てくれるはずなど無く、そのまま時間は過ぎていく。残り、2分。

しかしその時、ドンドンとドアを叩く音を聞いた。

『……だ、誰ですか？』

アロマは問うてみる。
が、当然防音壁によって声は外に通じない。
それでも、アロマは珍しく声を荒げて外に聞く。

『……誰ですかっ！もう誰でも良いです、助けてください！死にたくないんです、もっと私のパートナーと旅がしたいんです！ここで旅も人生も終わらせたくないんです！』

しかし、やはり外には声は通じない。
もう駄目か、とアロマは思った。そして、諦めて爆発するのを待った。

が、突然それに答えるように、ドアに穴が開いた。

「アロマ！大丈夫か！？」

そこにいたのは、自分のパートナーである時雨がいた。

「た、助けに来てくれたんですか……？」

「ああ。爆弾があるのはリーダーで確認済みだよん。」

時雨はレンズがオレンジ色の奇妙な眼鏡を取り出す。

どうやらこれで爆弾を感知できるようだ。なんと便利な道具だろうか。

しかし、さすがはスパイの息子。こういうグッズも常備持っているようだ。

「つーわけで、ここから出るぞよ。」

時雨はさっき穴を開けるのに使ったハンマーでドアを叩き壊して、

アロマを救出。

客は、時雨が全員逃がしたのか、店の中はがらんとしていた。勿論、時雨の奇行を知る者はそれすら信用できず、いつまでも客が出て行かない苛々については時雨は銃で脅して（オイ待て時雨）、渋々承諾して出て行ったが。

そして、時雨とアロマも店から出て、離れる。

その1分後、店は轟音と共に木っ端微塵に弾け飛んだ。

「ふう、危ないところだった。」

時雨は額に浮かぶ脂汗を拭きつつ安堵した様子でそう言った。

「アロマ、大丈夫じゃったか？」

時雨はアロマに安否を尋ねた。

その問いに答える。

『……大丈夫な訳ありませんよ……』

震えた声で。

しかし、時雨を見て確かにこうは言った。

『でも、ありがとございます。』

はっきりとした声で。

そして、先程の店での恐怖体験を思い出したのか、体を震わせ始めた。

さらには、とうとう耐え切れなくなって、声を押さえつつも泣いてしまった。

そんなアロマに、時雨が言う。

「泣くなら、思い切り泣いた方が楽だZE?」

そう言われ、今度こそアロマは遠慮無く時雨に抱き着いて思い切り泣いた。

そして、自分の胸で泣くアロマを見ながら、時雨は思っ。

（……ああ、口調決めてないから絶対殺されるNA ……はあ……。）

その思いは、ずっと時雨の頭の中で渦巻いていた。

はい、という訳で、今回ではらばらになるのは最後です。

and soon 軍団『ちよつと待て！……！……！……！』

……何？

and（以下略）『なんだよ、『その他諸々』って！……！……！……！』

いいじゃないか、書くの面倒だし……。

大体タイトルが長くなるし。

（略）『正論だけど、ぶつ潰す！……！……！……！』

そ、それでは、本編へどうぞっ！

第十二話 人にぶつかり、出会いを生む 理沙&ボルト and soon

一箇所は銃器戦、一箇所は爆弾とかなり刺激的なことが起きている中、理沙達のいる所は……、

「美味しいね、この『国』の料理！」

『ああ、そうだな。』

『美味しいにやー』

理沙と彼女の手持ちの6体のポケモンは顔をほころばせて言つ。という訳で、現在進行形でレストランにいる。和洋折衷な店だ。その為、それぞれ好きなジャンルの料理を食べている。

ここで、理沙の手持ちポケモンを紹介しよう。

まあ、全員出ているし、一応です、はい。

今まで出てきたのは、ピカチュウのボルト、フワライドのヘリウム、チリーンのサマーである。
残り3匹を挙げると。

1匹目は、プクリン（ ）

名前はチャーム。

2匹目は、キュウコン（ ）。

名前はフレイルム。

3匹目は、セレビィ（ ）。

名前はネイチャー。

と、まあ、簡単に紹介するとこんな感じだ。

『ムグムグ……、そう言えばさ、この『国』で既に爆発事故が起きてるって聞いたけど』

新たな話題を持ち出したのは、セレビィことネイチャー。

「ん〜、確かにね。」

『ここに仕掛けられてるかもしれないぜ?』

『そんな怖いこと言わないでよー。』

『全く怖そうにしていけないにゃー、チャーム。』

ブクリンことチャームの間の伸びた返答に答えるサマー。

『しかし〜、一体どうして仕掛けるんだろっな〜?』

チャームに似た話し方をするのは、フワライドことヘリウム。

『確かにそうですね。まあでも、どこかの一派の復讐目的、あるいは単なる快樂を得るため、でしょうね。』

少し事務的な話し方をするのは、キュウコンことフレイム。

『何で〜』

「そうよ、大体復讐なんてする奴いるの?こんな充実した『国』に。」

ネイチャーと理沙が聞く。

『……ここには、『無開発エリア』があるのはご存知ですよね？』

フレームが問う。

理沙は知っているが、他の5匹は知らなかったなので、フレームが簡単に知識を与えた後、話を続ける。

『そこにはこのエリア等のように開発はされていませんが、住んでいる人達はいます。実際、『無開発エリア』に行った他エリアの住人や旅人が殺されている事件がありますしね。』

『……つてことは、その人達の復讐つてことなのかにゃー？』

『確証は持てませんが、これが第一の説です。』

ここで、疑問を持つ。

『しかし、どうしてその人達は他エリアに行けないんだろー？』

そう、その人達はさっさと『無開発エリア』から抜け出してしまえば済む話なのだ。

しかし、フレームは首を振る。

『この『国』において、他エリアへの移住が出来ない理由はいくつもあります。例えば、就職の出来ない人達、何らかの理由、例えば借金取りで追いやられた人達でしょうね。他エリアでの生活はお金がかほとんどなくてもやってはいけますが、仕事が無いとやはり辛いでしょう。さらに、そういった借金などの法律にも囚われていませんし、借金を巻き上げられることもない。逃げ場としては格好の場なのでしょうね。』

さらに、とフレームは付け足す。

『だから『無開発エリア』はそういう人達の最後の安住の地なのですよ。』

『あんなボロい所のどこに利点があるんだ？』

『その意見は尤もですが、ボルト、少し口を慎みましょう。』

はいはい分かりましたよ、と言ってそっぽを向くボルト。

そして、その質問にフレームが答える。

『理由としては、近くに食料が流れ込むからです。』

フレームはさらりと答える。

『『無開発エリア』は商品の販売に関わる『右方エリア』に近い場所なのです。』

『あ？商品なんてどうやって流れ込むんだよ、あそこ？』

『それは、どうしても過剰生産、つまり余り物が出てしまうから、それらが『無開発エリア』に捨てられるのです。賞味期限も切れぬうちに、しかも綺麗にパックに包まれた状態で捨てられるので、そこに住む人達にとっては好都合なのでしょう。』

『だったら、尚更他エリアに恨みを持つ意味が分からなくなってくるぞ？そんな生活でも充分やっていけるのじゃないか？』

ヘリウムが質問する。

『いいですかヘリウム、良く考えてみてください。『無開発エリア』とは、ほとんどゴミ捨て場に近い所です。そこには住めるような建物も一つもありません、つまり、文字通りゴミの上で生活するので。さらには、何らかの理由で他エリアに戻れない。その原因を作った人達が整備の整った場所で悠々自適に暮らしているのに対し、自分達だけ何故こんな生活をさせられているのか、と憤る人もいる

「と思いませんか？」

「ま、自業自得な人もいますし、この考えはかなり自分勝手ですけど、とフレームは付け足す。

しかし、この説明で何とか理解したのか、次に進む。

「次は……。」

「単なる快樂主義者の仕業、って説だよね。ま、これは説明要らないんじゃないの？」

「まあ、そうですね。」

結局、ここまで話しても、当然犯人は誰だか分からぬままだった。と、ここでチャームが話題を変える。

「ところで、もう食べ終わっちゃったけどどうすればいいのー？」

チャームの言うとおり、全員が全員、話している間に食べ終わってしまったっていた。

因みにずっと説明をしていたフレームは、先に食べ終わってしまったので問題は無い。

「そうね、そろそろ出ましようか。」

理沙は刀を持ち、ホルスターに銃があるのを確認して、店の外に出ようとした。

因みに、理沙は斬撃技術10段に加え、射撃技術7段を持ち合わせている。理沙自身でも十分強いのだ。そして、金を払って店から出た途端、

どん、と。

誰かとぶつかった。

「うわっ!?!」

「んなっ!?!」

当然、どちらにしても不意打ちだったため、そのまま尻餅をついてしまう。

「いった〜……。何すんのよ!?!」

「い、いや、すみません、急いでいるものでして……。」「

と、その男は、何かを見せた。

それを覗き込む理沙とボルト達。

そこに書かれていたのは、

『警察 爆発物処理班 フローガIIカタストロ』

……。

1人と6匹は黙り込む。

そして。

「あわわわ！すみません！」

即立場逆転。

今度は理沙が謝るはめになってしまった。

「い、いえいえ！では、急いでいるので！」

と、そう言ってフローガは駆けて行ってしまった。

『行っちゃった〜』

『何だったんだろうかにゃ〜？』

「にしても、あんなに急ぐなんて、何かあったのかしら？」

と、理沙はここで数秒間覗き込んだ警察手帳の文字を思い出す。
爆発物処理班。

その言葉が何を指し示すかなど、誰だって分かるだろう。

「ということは、何か近くに爆弾があるってこと？」

『そういうことになりますね。』

しかし、自分には関係がない、と言って、早速集合場所へと急いだ。

しかし、この『国』、どいつも爆弾に関する事件が多いらしい。

先程から電化製品を取り扱う店のテレビから聞こえるニュースキャスターの声はこうだ。

『え〜、速報です。え〜、先程、レストラン『JCR』において、爆発があつた模様です。』

と、現場の風景に画面が変わる。

『え〜、警察によりますと、1人の少年の誘導によって全員の命が助かり、怪我人もゼロという、連続爆破事件にしては珍しい事例となりました。』

「へ〜、勇敢なものね。」

理沙は、そのまま通り過ぎようとして、画面から目を逸らそうとする。

『え〜、その少年は何故かどこかへ逃走している模様で……』

その画面に、少年の顔らしきものが映っている映像が流れた。それにいち早く感づいたのはサマーだった。

『あ、あの口調考えてる奴だにや〜』

その言葉にさすがに動きを止め、テレビを見る。その顔は、見知った者の顔だった。

「……………あ。」

理沙も驚いた。

それもそのはず。

その少年が、あの中川時雨なのだから。

「あいつ、結構やるのね……。」「
『ちよっと、見直したぞ。』」

しかし、当然どこにいるか分かるはずもない時雨を探す気も起きず、そのまま歩を進める。

「さて、そろそろ集合場所に……。！！？」

理沙が言ったその瞬間。

そこで、また誰かとぶつかった。

「ふぎゃ！」

「のわっ!？」

当然、またまた両者とも尻餅をつく。

「いったー！もう何なのよ今日はー！ー！ー！」

「もう少し気をつけて歩けよにゃー……。……。ん？」

そこで、相手の言葉が止まった。

そして、理沙もその相手を見て言葉をとめた。

「あ、時雨。」

「よ、よお……。」「

相手が理沙だと分かった瞬間、何故か引きつった表情を見せる時雨。当然である、このポケモンがいる限りは。

『あ、シグレだにゃ〜』
「……………」

時雨は、サマーに名を呼ばれたと同時に、何故か死んだような顔をしていた。

まるで、「ああ、終わった」とかでも言つようじ。

『んで、決まったのかにゃ〜?』

「……………い、いや……………」

『……………ま・さ・か。決まってるのかにゃ〜?』

「いやいや!そんな事はNAI」

そして、時雨は決めた口調で言つた。

『……………そうか〜、それが新しい口調かにゃ〜』

「そ、そうだZE」

その後、サマーが、あはは〜と乾いた笑いをして、黒い笑みを浮かべて言つた。

『……………ま、どっちにしても、ブ・チ・コ・ロ・シ、だにゃ〜』

「何故なんDA!?!」

そして、店から客を全員逃げさせたという偉業を成し遂げた時雨は、数十秒という短いときを経て、断末魔と共にボロ布のようになり、横たわってしまった。

「あ、あいつの合格の基準が、わからNAI……………ガクツ。」

時雨は異常なテンションで倒れた後、病院で治療を受けたとか。

そして、病院。

とある病室には、ベッドに横たわった包帯ぐるぐる巻きの誰かと、蒼と理沙がいた。

ポケモンは、病院内では出すのは禁じているので、今は珍しく人間だけの空間である。

「お、お前のチリーン、性格直したほうがいいぜよ……。」

「ご、ごめんなさい……。」

「……まあ、いいじゃねえか。助かったんだし。」

時雨は、何だかんだで、あの口調も残酷な虐殺の思い出と共に封印した。

そのためか、口調も定めないことにしたらしい。

「……しかし、お前も災難だよな。」

「そつだにゃ……。こんな怪我を負うし……。」

「……いや、そついう問題じゃなくてな……。」

蒼が言葉を続けようとする。

「貴様が、あの時の恩人であるな？」

後ろから、全く聞き覚えのない声が。

声からして、男性である。年齢は、30くらいであろうか。

「……だ、誰だぜよ？」

「今時、そんな口調をする奴を見たことはないのであるが。」

そのベージュ色のコートを着た体格の大きい男は、構わず話を続ける。

「我輩は新田明^{（あきひろ）}。まあ、アキラ、とでも呼んでくれ。」

「よ、呼び捨てでいいのにかい？」

「現にあんた今、タメ口じゃない……。」

しかし、アキラは話を進める。

「貴様のお陰で、来客が全員助かった。まず、お礼を言わせてもらおう。」

「あ、い、いや……。。」

「して、貴様はどのようにして爆弾があると分かったのであるか？」

アキラが時雨に指を指して答えを求める。

「な、なんとなく、かにや……。。」

「貴様、口調を統一したらどうだ？分かりづらい。」

時雨が言葉を濁すが、アキラは特別口調以外に気にすることはなく、別の話題を持ち出す。

「ところで、唐突ではあるが、この男が救った事件のように、爆破テロが起きているのは知っているのであるな？」

「……ああ、俺は2回、現場に居合わせたことがある。」
「そうか、なら話は早い。」

アキラは話を続ける。

「そのようにして爆破テロが起きたのは、貴様らの言ったような三件だけではない。前にも数件、同じような事件があった。」

アキラは、その場所を全て挙げた。

- ・ 1件目 某ハンバーガーショップにて、一階の柱全てに爆弾を設置、建物は倒壊。死者は20名、負傷者16名。
- ・ 2件目 某コンピュータ会社にて、スパコン1台の破壊。死傷者はゼロだが、被害総額は4億円。
- ・ 3件目 某電化製品店にて、一部の電化製品に爆弾が仕掛けられており、死者はゼロだが、負傷者は54名、被害総額は130万円。
- ・ 4件目 某ホテルにて、屋上に原子爆弾に相当する時限爆弾を発見。通報により未然に防ぐ。
- ・ 5件目 某研究所にて、スパコンを2台破壊。被害総額6億円。
- ・ 6件目 某電化製品製造会社にて、管理用コンピュータ一台、製造用機械数台、製造中のスパコン6台を破壊。被害総額は13億円。

「まあ、代表例を挙げればこんな感じだ。」
『なるほど……。』

そして、ボールの中からフレームが話しかけてくる。

「ん？どうしたのフレーム？」

『いや、気にかかることがあってです……。』

因みに、ボールを介して話すことは出来るらしい。

『その事件の2、5、6件目のものはスパコンが破壊されています。それは何か関係があると見てとっていいのでしょうか？』

「鋭いな。」

アキラは笑ってみせた。

「そう、スパコンが破壊されている。それも、『国』の機能を低下させる目的の物がな。」

『それで、『国』を再起不能な状態にまで追い詰めるつもりなのでしょうか？』

「さあ、分かん。」

ああ、とアキラが思い出したように言う。

「そういえば、野郎が出た辺りから爆弾テロが急増している。先程の爆破事件は2ヶ月内でのものだ。」

「……野郎、とは？」

蒼が尋ねる。

「ああ、この野郎だ。」

アキラが写真を見せる。

「……なっ!!」

「ええっ!?!」

蒼と理沙は、その写真を見て驚くが、時雨だけは無反応だ。

「?どうしたんだぜよ?」

「……どうしたもこうしたも、こいつ……。」

「私、会った事あるのよ、この人……。」

そこには。

あの爆発物処理班の外国人、フローガ「カタストロ」が写っていた。

……何とか生きて帰ってこれた……。

いや、しかし、説明の文章書くの難しい……（汗）

フレーム「私のですか？」

そうそう。

何か間違いがあったら後で直そうと思うし。

フレーム「でも、この説明、本編と関わりあるんですか？」

さあ、それはどうだか……。

フレーム「え？」

ではでは、また次回！

第十三話、素顔を現す男、罪深き者なり（前書き）

前回から大分経ってしまいました……。

さらにテストも近いので、更新ペースが遅くなるかもしれません（汗）

第十三話、素顔を現す男、罪深き者なり、

「……こいつ……。」

蒼は驚いていた。

理沙も同様に。

「これ、本当にあの爆弾処理の……。」

「そうだ、貴様の思っている人物だ。」

アキラが答える。

が、ここで話についていけない人が1人。

「……おい、こいつ、誰なんだぜよ？」

時雨がアキラに写真を覗きながら問うた。

「ああ、この野郎は警察の爆発物処理班に属する、フローガカタストロダが？」

「!？」

その言葉を聞いた瞬間、時雨は声も出せないほど驚いていた。その様子がさすがにおかしいと思ったのか、蒼が尋ねる。

「……時雨、どうかしたのか？」

「いや、どうかしたのかも何も……。」

時雨は、その理由を言い放つ。

「こいつ、凶悪テロリスト、ランド団の一員なんだにや〜……。」「え!?!?!」

2人して驚く。

アキラも声には出さなかったものの、驚いた様子で聞いた。

「……貴様、何か知っているのか?」

「知っているも何も、こいつ、有名だぜよ?」

時雨が、この男、フローガ「カタストロ」の経歴を淡々と語った。

フローガは元は単独のテロリストだった。

かなり頭脳明晰で、証拠を残すことなく、ただただ自分の破壊願望の赴くままに爆破を続けた。

しかし、1回、偽名でホテルに泊まっていたところを捕まえられ、懲役10年の刑を受けた。

だが、フローガはどうやったのやらその刑務所を爆破し逃走。その後には行方知れずとなったのだという。

「……もう何年も前の話だから覚えてるわけないでごわす。」「お、新しい口調だな。」

アキラは微笑してから、確信に満ちた表情を浮かべた。

「では、我輩はそのフローガを逮捕しに……。」「

アキラが席を立とうとすると、

「なっ、待つのでありんす!!」「

「何で花魁おいらん!?!」「

理沙の突っ込みと同時に、立とうとしたアキラは時雨に思い切り下に引つ張られ、そのまま前のめりに、正確には時雨のベッドに勢い良く倒れこんだ。

そして、時雨は怪我人である。

その点を考慮すると、絶叫が上がるのは間違いなかった。

「……で、何故、我輩を止めた?」「

少々怒り口調のアキラに時雨が答える。

「言っただろ、破壊願望の赴くままに破壊活動をした、と。」「
「確かに言ったが、それがどうかしたのか?」「

時雨は、答える。

「そいつ、破壊活動の実行の為に、一体何十、何百の警察官を殺したと思うのでありますか？」

アキラは、その言葉に少し黙った。
代わりに、蒼が聞く。

「……というと、時雨、かなりの実力者なわけだな、そいつ。」
「まあ、そうなるにょー。」

しかし、その返答にアキラは笑う。

「ふん、どうせ我輩なら勝てるだろう。」

「……何ですか、その自意識過剰な台詞は。」

「フローガめ、完膚なきまでに叩き潰して廃人にしてくれる！」

「そこまでするんですか!？」

『ボク、正直、この人の性格異常だと思うよ……』

エンジェルがボールから呟いたのも、時雨の制止をも無視して、病室から走って出て行った。

その間、3人とボール内のポケモン達は、様々な話題について話したそうだ。

その頃、アキラは『病院で走るな!』と院長らしき人物に注意されたが、それを殴って通過。勿論、その後冷静になって土下座して心から謝ったが。

それほど、事件の解決には熱心なのだ。

そして、アキラの場合、それが度を過ぎることが多い。

「……フローガめ、どこにいる?」

アキラは、病院を出て、現在大きな通りまで来ていた。そして、キヨロキヨロと辺りを見回す。

「くそ、やはり走り回って探すしか……。」

と、アキラは走り始めた。

……その直後、横から足を引っ掛けられて盛大に転んだが。

「じがつ!?!」

思い切りコンクリートに顔面を打ちつけ、壮絶な音を立てて伏してしまっただが、数秒後に立ち上がって、その元凶を見る。

「……警察の方でございますね。」

「!?!」

なんと、そこにいたのはフローガだった。

案の定、アキラは動揺を隠せなかった。

「貴様、のこのこと警察の前に行って来るとは良い度胸だ。」

「鼻血を垂らした警察官にこんなにも平然と言われたのは初めてで

すよ。」

フローガは、明らかに挑発をしていた。しかし、アキラはそれに乗るような男ではない。

「まあ、そうだろうな。……しかし、何故疑われていると分かった？」

「その辺をつろちよると、目障りなんですよ。」

フローガは、そう言って、口の縛られたビニール袋を放る。そこからは、仲間だった警察官の、

目玉。

そう、顔から剝り貫かれた目玉が、数十個入っていた。透明なのでよく見えてしまった。

あまりの光景に、アキラは吐き気すら覚えた。

「だから、2度と監視できないように、全員の視力を根こそぎ奪いましたよ?」

「……な、あつ……!??」

そして、目の前のグロテスクな光景に倒れそうになった。が、そこは警官、そういうのは多少なりとも慣れているのか何とか

立っている。

「ところで、何しに来たんですか？」

アキラは、その質問に憎悪の念を込めて答える。

「勿論、貴様を逮捕する為だ。」

「へへ、あの無能集団が。ご苦労様ですね。」
「……！！」

今度の挑発にはアキラは乗ってしまった。

自分に対してなら別にどうとでも受け流せるが、仲間や所属する警察への冒^{ぼうとく}？に対しては、かなりの怒りを覚えるらしい。

さらに、先程の目玉。そのせいもあるだろう。

「問答無用だ。フローガカタストロ、貴様を器物損壊罪、及びその他諸々により、逮捕する！！」

「無駄だと思えますけど。というか罪状端折^{はしひ}りましたね。」

「貴様の犯した罪が多すぎて、説明したら日が暮れる。」

フローガがボールを取り出す。

アキラもそれに答えるようにボールを取り出す。

両者、両手に一つずつ。

「行け、ウインディ、ユキメノコ！！」

「行きなさい、ギャラドス、マニニューラ！！」

そして、街中での戦闘が始まった。

ズガン、ドゴン、ドゴオオオオオオ……！！

病室にいた3人はその轟音を確かに聞いた。

「……おいおい、まさかあいつ、闘ってるのか？」

「そう考えた方が自然だっちゃ。」

「だからあんた誰よ……。」

そして、バトルの手助けをしようという、ボルトの提案に理沙が乗り、それを追いかけるようにして蒼も病室を去り、結局、時雨は置いてけぼりをくらった。

一方、バトルは。

「ウィンディ、神速！」

「甘過ぎるんですよ！ギャラドス、ウィンディを捕らえなさい！」
『承知した。』

と、ギャラドスが、尾を何もいないはずの空中へと伸ばす。
そして、そこに丁度ウィンディが。

『何！？』

「ギャラドス、そのまま締め上げるのです！」

「させない、ユキメノコ、冷凍ビーム！」

尾に巻き付かれたウィンディを助けるべく、ユキメノコに命令を出すアキラ。

「…………ふふ、甘いですね。」

フローガは、笑ってこう命令した。

「ギャラドス、冷凍ビームをウィンディに当てなさい。」
『分かった。』

そして、命令どおりに動き、ウィンディは凍った。
凍ったウィンディを、止めとばかりに地へと叩き落す。

すると、氷は割れたが、その氷の破片のいくつかで体を傷つけられ、さらに地に思い切り叩きつけられたため、壮絶な痛みと化した。

「ウィンディ！」

「止めます、マニョーラ、毒々！」

そして、マニョーラの毒々により、ウィンディは猛毒状態になる。

『ぐっ、おおおおおおおっ！！…！』

「く、くそっ、戻れ、ウィンディ！」

アキラはウィンディを戻そうとする。
が、

「そうはさせません。マニョーラ、電光石火。」

『OK・my partner.』

マニユーラはウィンディに電光石火を繰り出す。
威力が強い為か、少し右にずれる。

その為、ボールから出た光は、ウィンディを捉えられず、ボールに
戻すことに失敗する。

さらに、

「マニユーラ、切り裂くでボールを壊しなさい。」

『All right.』

そして、電光石火のスピードを生かしてアキラへと迫り、

モンスターボールは壊れた。

「……！貴様、それは極刑に値する罪だぞ！！」

「知ったことありませんね。」

（『相手のモンスターボールは、如何なる理由においても、壊して
はならない。これを破ったものは、意図的にポケモンの居場所を奪
ったとして、極刑に処す。』より。）

フローガはぐにやりと顔を歪めて、こう言い放った。

「それが怖くて悪事なんかやってられませんよ？」

そして、

銃声。

フローガがアキラを撃った音だった。

「……………ぐ、あ……………？」

『!!よくも、アキラ様をつ!!!』

ユキメノコは、パートナーがやられた怒りに我を忘れて突進してきた。

「冷静になりなさい。ギャラドス、アイアンテール。」

ギャラドスが必殺のアイアンテールを繰り出す。

ところが、ユキメノコはそれを上空に逃げることでやり過ごす。

「なるほど、上手い避け方……。」

フローガはそこまで言って、間をおいた。

そして、

「……なわけありませんよ!マニョーラ、ギガインパクト!!!」

『!?!』

『Die!』

マニョーラはギャラドスを使って、自らの跳躍力を使って上空へ、そして、ユキメノコの背後をとっていた。

しかし、ギガインパクトはノーマルタイプ。ユキメノコはゴーストタイプを持つ。

相性は最悪、ギガインパクトはユキメノコに大したダメージを与えぬまま、自滅した。

『な、何をしたかったのよ?』

「さあ?でも、」

フローガがそこまで言って、ギャラドスにキャッチしてもらって無

傷のマニユーラを無視して、ユキメノコを見上げる。

「殺すには、上空とはうってつけの場所なんですよ！」

『……………！？』

そして、

意味の無い奇襲に冷静な判断力が失われたことによる一瞬の隙で、フローガの凶弾により、脳天をぶち抜かれたユキメノコは、だらりと力を抜き、そのまま落ちていった。

生まれし赤い鮮血が、黒いコンクリートをさらに黒く染める。

その黒の中心に、少し赤に染まった白が、奇妙な音と共に全身で着地した。

「ユ、キメノコ……………」

「さて、あなたにも幸福を差し上げましょう。」

につこり笑った表情のまま、フローガは屈んで、銃口をアキラの頭に合わせる。

「な、何が、幸福だ……………」

「もう、痛みを感じなくなるんですよ？幸福じゃないですか。それをわざわざ与えることには感謝してくださいね？」

そして、

引き金を引いた。

……蒼が。

「がっ!？」

フローガはゴム弾を手の甲に当てられ、銃を落としてしまった。
その状況の中、

「……?」

アキラは、朦朧とした意識の中、誰かに運ばれる、いや、浮かされている感じがした。

そして、傷が治っていく感じも。

『ま、こんなもんでいいかにや〜?』

『まったく、結構、人の傷治すって大変なんだよ』

それを生み出したのは、サマーとネイチャーだった。

ユキメノコは手遅れだが、ウィンディはネイチャーが処置を施した。
1人と1匹は、辛うじて一命を取り留めた。

「じゃ、アキラさんと、パートナーを病院へお願いね?」

『『はい!』』

そうして、1人と2匹は病院へと去ってしまった。

警察官として、この場を去るわけにはいかないのだが、サイコキネシスに人が逆らえるはずも無く、アキラはそのまま病院へ。

「……さて、フローガ、今すぐここで気絶するか?」

蒼が、そのやり取りを終えた後に、フローガに尋ねる。

「ふっ、名前は聞いたと言うわけですか。バレるかもしれないので隠しておいたのですが。」

「……全て時雨に聞いた。」

「……誰に聞いたのか分かりませんが、とにかく、」

フローガが、落ちた銃とは別のハンドガンを取り出し、ギャラドスとマニユーラを召集して、こう言う。

「あなた達も、秘密を知ったので殺さなければなりませんね。」

そのフローガに対し、

「……こんな所で旅を終えてたまるかっての。」

『その通りだよ!!』

「そうよ。むしろ死ぬのはあなたの方じゃない?ここまでしておいて。」

『いいね、リサ!俺もそれに同意だ!!』

『殺すのは趣味じゃないけど、倒す、という面では同意!。』

『僕も……、以下同文。』

『何で略したんですか!?』

少しコント的な会話も挟み、蒼達の全員の意思が一致する。

「いいですね、かかってくるなさい!」

『こちらも、全力でいかせてもらおう!』

『I want you to die, so let me kill you!』

フローガ達も戦闘準備が出来たようだ。

こうして、2人の旅人と1人の罪人との闘いの火蓋が、切って落とされた。

「…………だから、行くなって行ったのににや…………。」

「黙れ。逮捕するぞ。」

「ふ、不当逮捕は厳禁でござる!!」

「…………ござる?」

時雨とアキラの、病室の窓からの、少しやかましい観戦付きで。

第十三話、素顔を現す男、罪深き者なり、（後書き）

フローガ「目玉割り貫きは楽しかったですね。」

何平然と語ってる!?

フローガ「泣き叫ぶ姿を見るって、楽しいですよね!」

……話についていけないので、今回はここで終了です。

次回は、この小説には少なかったポケモンバトルです!!

第十四話 謎の深まるその身体 エンジェル&ボルト&フレイムVSギヤラド

タイトルが最近長いような……。

エンジェル『第〓章とか付いてるからじゃないの?』

かもしれない(汗)つけてからあまり経ってないし。

でも、章ごとに分かれてるとわかりやすいから、このままにするけど。

エンジェル『そ、そうなんだ……。』

追記：章設定により、少しは分かりやすくなりました。助かった…

…(汗)

第十四話、謎の深まるその身体 エンジェル&ボルト&フレイムVSギャラド

現在、蒼と理沙とパートナー達は、連続爆破魔と対峙していた。

「しかし、このまま戦うのは面倒ですね。」

その時、フローガは呟く。

そして、

「爆破させますか。」

黒い笑みを浮かべた後、フローガはズボンのポケットから何かを取り出した。

どうやら、リモコンのようだ。

そこにあるボタンを1回だけ押した。
すると。

いつの間にか仕掛けたのか、地中が爆発し、それによって、3つの組に分かれてしまった。

1つは、エンジェルとボルトとフレイム。対するはギャラドス。

1つは、チャームとヘリウム。対するはマニユーラ。

1つは、蒼と理沙。対するはフローガ。

3つの組は、それぞれフローガとそのポケモンに邪魔されて合流は

難しい。つまり、完全に追い詰めるにはバトルして勝つ以外に道は無い。

そして、戦いが始まった。

〈エンジェル&ボルト&フレイムVSギャラドス〉

3対1。

卑怯に思えるかもしれないが、この際は仕方が無い。そして、ボルトが最初に行動を起こす。

『いよつしゃあ！行くぜ！』

ボルトは電撃でスピードを出し、ギャラドスに迫った。そして、

『倒れる、ハイボルト・ナックル！！』

ボルトは拳に雷を纏わせてギャラドスを殴る。

パンチの威力が強かったのか、ギャラドスは後退する。

『中々のものだな……』

『す、凄い……』

エンジェルはその光景に少し驚いていた。

無理も無い。ピカチュウが、殴ってギャラドスを後退させたのだから。

が、

『……だが、まだ甘い。』

『なにつ！？』

ボルトは、突如襲い掛かる尻尾による攻撃を避けきれず、体全体で受けてしまう。

当然、体の小さなボルトは容易く吹き飛ばされる。

『くそっ！ハイボルト・ランス！』

ボルトは雷で槍を形成、ギャラドスへと発射する。

『ほう、汎用性が高いようだな。だが！』

ギャラドスは、その雷の槍を直に受け、

電撃を分散させる。

『電撃を、跳ね返した！？』

『どつという原理なんですかね……。』

首を捻りながら、鬼火を形成し、ギャラドスに向かわせるフレイム。

『ふん、原理などない。』

ギャラドスは、その一直線に向かってくる鬼火を次々と避ける。そして言葉を続ける。

『強いて言うなら、改造とでも言おうか。』

『か、改造……？嫌な響き……。』

エンジェルが呟く。

それを逃さなかったギャラドスは、ハッ、と笑ってから、

『我が身が強くなるのだぞ？改造など、苦でもない。副作用も、自らの場合はないらしいしな。』

『なるほど、言いたいことは分かりました。改造もすばらしいものだと思います。』

『え、ええ……。』

『み、認めるのかよ……。』

エンジェルとポルトは少し引いていた。
が、

『ただ……。』

それらを見無視したフレームが、微笑んで答える。

『貴方、知能だけは劣ってしまったようですね。』

『……何だとツー！？』

ギャラドスは、大声を出す。

が、怒りによるものではない。

それは、後ろから倒れてきた鉄製ボールのせいだった。

『ぐ……。な、何を……？』

『いえいえ、ただ先程の鬼火で、後ろの鉄を溶かしてポールを倒しただけですが。』

そう言われて後ろを見ると、成る程、確かに鉄柱の根元に近い部分が溶かされ、倒れていたのだ。

先程避けた鬼火はそのために放ったのだろう。

『さ、さすがだぜ、フレイム……。』

『光栄ですが、今はそんなことをしている場合ではありませんよ？』

『うん、そうだよね、あれ、完全に怒っちゃってるよね……。』

ギャラドスは、誰がどう見ても分かるほど、憤慨していた。

さすがは凶悪ポケモン、沸点が低いらしい。

『もう生かして返さん！破壊光線！！』

『え！？街中なのにお構いなし！？』

エンジェルが叫びながら避ける。

辛うじて3匹とも当たらずに済んだ。

『今です！ギャラドスは反動で動けません！』

フレイムが『フレイム・ボール』を作りながら言う。

『同感だ！喰らえ、アイアンテール！』

『私も！凍える風！』

『準備は整いました！フレイム・ボール、発射！』

ボルトはギャラドスの顔にアイアンテールをぶちまかし、エンジェ
ルはグレイシアにいつの間にか変形しており、凍える風を、フレイ
ムは、巨大な『フレイム・ボール』を放ち、3つの技を喰らう。

『これで、どうだ!』

ボルトがアイアンテールを直撃させた後、近くに着地して尋ねる。
しかし、返事は無い。

『……やった、のかな?』

エンジェルが、その様子を見て首をかしげながら言う。
が、突然フレイムが叫ぶ。

『っ!ボルト、横です!』

『何!?!』

すると、ボルトの体は一瞬にしてその場から消え、さらに一瞬後に
は横にあった民家の壁にめり込んで気絶しているボルトがいた。

『……竜巻。』

そして、ボルトを瞬殺したギャラドスは竜巻を発生させ、フレイム
へと襲い掛かる。

『くっ!』

フレイムが避けようとする。

が、足が何かに掴まれたように動かない。

『な、何なんですか!?!』

フレイルムが足元を見ると、足が凍らされて、地面にくっついてるのが確認できた。

そして、その確認を最後に、竜巻に巻き込まれ、強引に吹き飛ばされたのか、四肢が変な方向へと曲がり、もう立てない状況にあった。

『…………殺す。』

ここまで来て、ようやくギャラドスは声を発した。

『殺す殺す殺す殺す、全員殺して全員死ね!!!』

しかし、ほぼ自我を失っているようで、言葉もやや支離滅裂だった。その状況下。

今対抗できるのはエンジェルのみ。

『……………つづつ……………』

理沙のパートナーであるボルト、フレイルムが次々とやられ、その強さにどうしても恐怖心を覚えてしまう。

もう逃げたい、その思いで一杯だった。

今度は自分があるな目に遭う、そう思うと、その思いはさらに強さ

を増す。

『…………でも、』

しかし、エンジェルはそれでも、蚊の鳴くような声で言う。

『でも、見捨てたら、ダメ…………！少しでも、抵抗しなきゃ…………！』

そして意外にも、逃げたいという意思に反して、決心をした。
その理由は単純明快だ。

自分達を騙して、ここまで好き勝手暴れて、仲間を傷つけられて。
そこまでされて、逃げるのか、自分は？

『もう、逃げない…………。』

エンジェルは、大声を上げる。

その質問に、思い切り反対するように！

『ボクは、あの日から逃げないって決めたんだからっ…………！』

エンジェルは、また姿を変えた。

今度はリーフィアである。

(アイツには電撃は効かないはず。……だったら！)

エンジェルは、右前足にある草を伸ばし、刀のような形にする。リーフブレードだ。

『これで、どうよっ！！』

エンジェルは、緑に光る刃でギャラドスの体を切った。そこからは、出血が起こった。

『ぐっ、がっ、こ、殺す！！』

そして、ギャラドスはエンジェルに向かって尻尾で攻撃する、それも高速で。

先程ボルトが吹き飛ばされたのはこの攻撃によるものだろう。しかし、

『はっ！』

エンジェルはそれを縄を飛ぶように避けた。そして着地。そして次に、エーフィに姿を変える。

『サイコキネシス！！』

さらに、ギャラドスの巨体を、サイコキネシスで全て統制する。

『はあああああっ！！』

そして、体を地面に叩きつけ、ギャラドスをひるませることに成功。その際を利用して、エンジェルはサンダースに変化する。

『……確かに、電撃は跳ね返したけど、』

エンジェルは、放電した。

ギャラドスの、切り傷に。

『これで、どうよっ！』

『ガアアアアアアッ！！！！』

エンジェルの読みは正しく、ギャラドスは苦しんだ。

しかし、すぐに起き上がり、

『もう殺すだけじゃ済まさねエ！！』

ギャラドスは怒りに任せて、ハイドロポンプを繰り出す。

『そんなもの、ボクに撃つても無駄だよ！』

すると、エンジェルはシャワーズに変身しており、ハイドロポンプを防いだ。

……はずだった。

ハイドロポンプはそのままエンジェルを吹き飛ばし、ダメージを喰らわせた。

『…………えっ…………!?!』

エンジエルは動揺した。それもそのはず、シャワーズの特性は貯水。水系の技は効かないどころか、回復する技なのだ。

しかし、現に水によって吹き飛ばされた。貯水という特性を持つポケモンには、まずそういうことはない。

かといってハイドロポンプに何か仕込まれていたということは無い。ということは、有り得ない結論が導かれる他はなかった。

『特性が、貯水、じゃない…………?』

それにしても、ハイドロポンプによるダメージも大きい。現に、エンジエルは立ち上がれない。変身が続けたからというのもあるが、それにしても奪われている体力が多い気がする。ということとは、タイプも…………。

そんなことを考えてると、第2撃が迫ってきた。今度は冷凍ビームだった。

『まずっ…………!』

しかし、為す術も無く、そのまま凍っていく。

ボルトが。

『…………え？』

エンジェルは驚いた。

当然だ。気絶させられていたボルトが最後の力を振り絞って、エンジェルをこうして助けたのだから。

『…………めえ、考えるなら、バトルが終わってからにしろ…………！！』

そうして、ボルトは完全に凍った。

『…………あ、ああ…………。』

『ククツ、アハハハツ、殺した！1匹殺したぜ！しかも凍死！これなら生きたアートになるな！』

やはり、ギャラドスはキレて頭がおかしくなっているのか、全く話が合っていない。

しかし。

それを見て。

とうとう耐え切れなくなった。

『…………。』

ぶちっ、と。

何かが、自分の中で切れて。

『……………………。』

そして、エンジェルは、この後自我を失って戦った。

背に、天使のような白く、柔らかそうな、そして巨大な羽を生やして。

天使のような微笑を浮かべて、ギャラドスにこう言う。

『……不許！！上空吹飛！！』

その時、ギャラドスの巨体が上空に吹き飛んだ。

『ぐおおおおおっ！！』

『……身体刻印一生残！！』

何か暗号みたいな言葉を言って、エンジェルはギャラドスを追いかけるように飛ぶ。

そして、羽で優しくギャラドスに触れる。
すると。

ザシュシュシュシュツ！！！！

何かを切るような音が聞こえた。

同時に、浅いとはいえない切り傷をたくさん残したギャラドスが勢い良く地に落ちた。

もはや、ギャラドスは痛みが強すぎて気が狂ってしまいそうだった。
さらに、

『……大事所以外骨全粉！！』

そういつて、地上に急降下してまた羽に触れる。

すると、何かが折れる音が全身から響く。

『じっ、おおおおおおおおおっ！！！！！！』

ギャラドスは、これによって死なない程度にできるだけ多くの骨を粉碎され、痛みで転げることも許されなくなった。

『……………一生苦痛感後死！！』

止めに死なないように、ある程度だけ回復をさせる。

その為か、切り傷は血が止まっただけで大半が残ってるし、骨も、ある程度まで形が残る程度なので、壮絶な苦痛がギャラドスに襲い掛かっていた。

また、ギャラドスは先程の回復により疲れがとれ、即ちこれすなわから数時間はこの痛みに耐え、それからでないと気絶できない、そのような状況に陥れられた。

『……………仲間傷治療……………』

それを全て1分で終えた後、エンジェルは羽を使ってボルトを氷から救いだし、フレイムの折れた四肢を元に戻し、両者共に回復させた。

『……………我疲労即寝……………』

そして、エンジェルの背から羽は消え、死んだように地面に伏し、ギャラドスの絶叫を背にそのまま眠ってしまった。

勝者、エンジェル&ボルト&フレイム。

第十四話

謎の深まるその身体

エンジェル&ボルト&フレイムVSギヤラド

エンジェル『そっぴゃ、更新スピード早かったね……、ふわ……』

うん、でも、そろそろ他のも更新しないとまずいことに……。

エンジェル『……そうだね(汗)……うん、何だかやけに疲れてるな……。作者さん、何で……?』

……知らぬが仏。伏せておこう。

エンジェル『ええ……っ!』

で、では、また次回!

第十五話、2対1の攻防戦 チャーム&ヘリウムVSマニョーラ（前書き）

さてさて、チャームとヘリウムの初描写です。

チャーム『おお、楽しみー！。』

ヘリウム『確かに、この小説でのバトルは初めてだ。』

……こんな奴らで大丈夫なのか（汗）

では、どうぞ！

第十五話、2対1の攻防戦 チャーム&ヘリウムVSマニユーラ

「チャーム&ヘリウムVSマニユーラ」

この3匹もまた、2対1という組み合わせで既に対戦を始めていた。

『Let's go! (行くぜ!)』

『来るよー?』

『わかってるさ〜。』

英語と間延びした声を合図に、まずマニユーラが走り出す。

『SHADOW PUNCH! (シャドーパンチ!)』

その走っている勢いを利用して、強烈なシャドーパンチをヘリウムに打ち込もうとする。

が、

『私が相手だー!』

チャームがそのパンチを喰らおうとする。

この技はゴーストタイプ。ノーマルタイプのチャームには全く効果は無い。それを見込んでの罠だった。

が、

『Don't interrupt me! (邪魔するな!)』

と、シャドーパンチとは逆の手で、チャームの腹に何かを打ち込む。それは、『冷凍パンチ』。なんと、一気に2つのパンチをやっ

けた。よほど集中していなければ成功は難しい。

『ぐうー！！』

チャームは凍りつつある腹を押さえてその場にうずくまる。

そしてマニョーラは、もう一方の手で、ヘリウムにシャドーパンチを喰らわせようと、飛び上がる。

が、上空にいたヘリウムは、小さく笑い声を上げた。

まるで、『それは自殺行為だ』とでも言いたげな笑い声だ。

『……爆発するがいい〜！』

『……？』

一体何を？大爆発でもする気か？と、身構えた。

しかしその瞬間、マニョーラの周りの大気だけが爆発を起こした。

『ツ！？What's happened!？（何が起きた!？）』

さすがに周りが自分諸共爆発するとは思っていなかったマニョーラは、吹き飛びながらも、冷凍ビームを発射する。

『効かないんだよね〜。鬼火〜！』

ヘリウムは、自分の目の前に鬼火を集め、壁を作る。

炎の壁は冷気を防ぎ、冷気があたった為に壁は少しばかり小さくなった。

ヘリウムはその壁を丸めて着地寸前のマニョーラに発射した。

『ICE BEAM!（冷凍ビーム!）』

しかし、マニニューラも、その炎を冷気でまたも小さくし、威力を弱める。その為、かなり小さくなった火の玉は、着地した直後でも十分避けられた。

そして、マニニューラがヘリウムを睨む。ヘリウムはその睨みを見無視しているらしく、そっぽを向いている。

が、先程マニニューラがいた場所から声が。

『ねえー？私の事忘れてないー？』

……そこには、先程の小さな火の玉で凍った腹を溶かした為に復活したチャームの姿が。

殺気を放ちながらであるが。

『…………。』

が、それには慣れていくらしく、平然とチャームを見ている。その表情には、どこか余裕さも伺える。

『くっ、このー！馬鹿にしてー！』

と、プクリンとは思えないスピードでチャームが走ってくる。

そして、集中力を高めて、気合パンチを放つ。

が、直後、ずてーん！

凍った路面を走り、そのまま前のめりに倒れてしまった。

当然、気合パンチの効力も消えた。

『ぎにゃあああああーっ！！！！』

チャームは甲高い悲鳴を上げながらごろごろごろ地面を転がり始めた。

そう、チャームに火の玉が当たって腹の氷が溶けたのは、マニユーラも分かっていた。そして、そのまま復活して攻撃してくるだろうことも。

だから、予め着地あつかじした際に地面を凍らせておいたのだ。チャームがまともに動けないように。

『周到だね〜。』

『…………。』

そんなヘリウムの褒め言葉に、無表情でシャドークローを当てようと跳び上がる。

『…………ま〜、そんな焦るなよ〜。』

『Shut up. (黙れ。)』

構わずに突っ込む。

が、またしてもマニユーラの周りが爆発を起こし、マニユーラは地面に放り出された。

『…………。』

少しの間熟考した後、

『…………I see. (なるほど。)』

そう言つて、何を考へているのか、またヘリウムの所へ跳ぶ。

『何度やつても、同じだぞ?』

『……。』

しかし、返事は返さない。

そして、ヘリウムがまた爆発させようとしたその時。

ビュッ、と。

突然、吹雪がマニュアルとヘリウムの間で起こつた。ヘリウムをも巻き添えにしようとして。

『これはまずい!』

ヘリウムはそれを避けて何とか『何かを』爆発させるも、吹雪によつて動かされた風が爆発した。

『…… As I expected . (予想通りだ。)』
『お、とうとう見破られたか。』

ヘリウムは、すたつと着地したマニュアルに感心した。

それもそのはず、この技は『ミスト・キル』と言い、『霧状にした引火性の毒ガスをあたりに撒き散らし、何かの衝撃を与えて爆発させる』という、肉眼では絶対に見破れないようになっていた技なのだ。

それを、ほぼノーヒントでマニュアルが推理。結果、先程の吹雪でガスが動き、その動かし場所がヘリウムによつて爆発されたことによつて、この技の正体が証明されたわけだ。

『What do you do next? (次はどうする?)』

技を見破ったことにより、少し余裕の出来たマニョーラが問う。
だが、

『これで終わりだと思ったら、大間違いだぞ?』

『……?』

一体何を?

そう思う前に、突如、体が宙に飛んだ。

そして、店の壁に激突、強烈な痛みを引き起こした。

『!?!?』

マニョーラは一瞬、何が起きたか分からなかった。
が、すぐに元凶を見ることがとなる。

それは、目の前に立っている、それも物凄い殺気をたてながら無表情で立っているチャームだった。

『さつきはどうもー。』

口調も、かなり棒読みに近い感じになっている。無機質、という表現が合っているよう。

それが逆に怖い。

『今から、100倍にして返してあげるよー！。』

そして、

ドンッ、とどんな力の使い方をしたのか、一瞬でチャームが消えた。その一瞬後にはマニユーラはさらに壁にめり込み、壊した。チャームが捨て身タツクルで、思い切り突っ込んできたのだ。

『……ッ！！』

もはや声に出せなかった。

肺からは空気が全て出て行き、壮絶な痛みだけが腹を中心に伝わってくる。

しかし、この状況でマニユーラは考える。

どうして、チャームが動ける？

そう、地面は凍らせたはずなのだ。だから、動くことすらままならなかったはず。

なのに、何故……？

しかし、理由は単純明快。今までもこれで邪魔されてきたではないか。

鬼火。

ヘリウムの用いる鬼火。

それ以外に何が考えられようか？

『……ぼけーっとならないでよ、本当に肉塊になっちゃうよー！。』

と、力を拳に溜めるような仕草をしている。恐らく、気合パンチ。まずい、と本能がそう語ったとき、まずはチャームを蹴り飛ばそうとする。

しかし、ベキリ。

その足が、力を溜めた拳で一瞬にして碎かれる。

『……………!!』

声にならない悲鳴をあげ、苦痛に顔を歪める。

が、その間もなく両目と喉にそれぞれ指と拳がめり込む。

これで、完全に視界を潰し、発声方法も潰した。

『……………!!』

『あゝあゝ、暴走しちゃった。』

ヘリウムの声が上空から聞こえる。

『まゝ、チャームのSSってこういうもんだから仕方ないけど。』

『……………??』

痛みの中で、さらに赤く染まった視界の中で、マニユーラは考える。SS……………、自分の記憶を探り、それに該当する言語を当てはめてみる。

『……………!!』

そして、見つけた。

が、正体の分かった次の瞬間、そのSSとやらによって変化したチャームに次々パンチで肋骨を折られ、さらに身体に激痛が走ったマニユーラはそこで意識を失った。

『……やりすぎだぞ〜?』
『いいじゃん、死なないように』計算』はしてやったんだしー。』
『ま〜、さすがSSCだな〜。』
『ヘリウムもさすがだよー。敵にCを言わなかったのはある意味
正解だねー。』

そんな会話をしながら、疲れた体を休むことによって癒し始める。

が、甘かった。

最後の抵抗として、ヘリウムと空中にいた際、いつの間にかマニユ
ーラが天に巨大な氷の塊を形成していたらしく、それが落ちた。
2匹とも、迂闊にも気付かなかった。
そして、それが隕石のように2匹の体を押し潰そうとする。

『……まったく、面倒な真似をしてくれるねー』

そして、氷の隕石を壊しにかかる。

『……ヘリウム、端っこあたりに鬼火を当てて少し溶かしてー。』
『了解〜。』

ヘリウムが指示通りに溶かし始める。
それでも迫ってくる氷の塊に、

第十五話

2対1の攻防戦

チャーム&ヘリウムVSマニョーラ

(後書き)

……マニョーラの英文、間違ってるのあったら言ってください(汗)

ポルト『しかし、訳をつけたのは正解だな。』

英語、読めない人がいたらダメだしね(汗)

その点に関しては、自分にも非は有ると思います(汗)

ポルト『んで、次回は?』

今回は、人間同士のバトル!!

ポルト『……ポケモン小説にあるまじき戦闘だな。』

確かにそうだけど、その話で色々分かるから。

ポルト『色々って何だよ……。』

では、また次回!

ポルト『あ、はぐらかしやがった!』

第十六話、人間同士の戦い 蒼&理沙VSフローガ（前書き）

蒼「……やけに更新早かったな。」

うん、自分でもビックリ（汗）

蒼「……まあ、それはそれでいいがな。しかし、他の小説も書いておけよ。」

……努力します（汗）

第十六話、人間同士の戦い 蒼&理沙VSフローガ

そして、もう一箇所では、蒼と理沙とフローガが2対1で向かい合っていた。

『国』の中では珍しい、人間同士の戦いが始まるうとしている。

蒼は、右手に6連射型ハンドガン、名を『Glorry 001』という、を持ち、左手には右手に持つハンドガンより少し大きめの銃、というより小型マシンガンとも呼ぶのが適切であるもの、名を『Stupid 129』という、を持っている。

因みに、マシンガンは、小型のものならば携帯は可とされている。

理沙は、両手に全く同じような、しかし手入れの行き届いた刀を1本ずつ持っていた。

形状から察するに、日本刀に近いものを感じる。

対するフローガは、手ぶら状態。銃もなければ刀もない。

「さてさて。」

しかし、そこでフローガが首をゴキリと鳴らすと、懐に手を突っ込む。

「早速ですが、死んでもらいましょつかっ！」

そして、ポケットから手を出し、同時に『何か』を投げる。それに危険を感じた蒼は、銃で『何か』を撃ち、軌道を大幅にずらす。

瞬間、『何か』……、手榴弾は爆発した。
軌道をずらしたとはいえ、それでも至近距離であることには変わり
は無い。蒼と理沙はその爆風に僅かながらも飲み込まれる。

「……………くっ!」

「ほらほら、背中ががら空きですよ?」

と、爆発の隙を狙ったのか、上手いこと蒼の背後に回り込んだフロ
ーガは、蒼の背を殴り、体を飛ばした。

「……………ぐはっ!」

「うっん、やっぱり人間の技は受け付けるんですね。」

「……………ど、どという、ことだ?」

蒼が問いを投げかける。
が、

「教えると思ってるんですか?」

フローガは、もう1個手榴弾を投げ、それを蒼に向かって投げよう
とする。

「させない!」

しかし、理沙が横から入り込み、刀で手榴弾を弾き飛ばす。
ピンが勢い良く抜け、数メートル先へと飛んだ手榴弾はそこでまた
爆発を起こした。

「はっ!」

そして、フローガの目の前に来た理沙はそのまま体を捻って刀の峰でフローガの側頭部を殴りつける。

「ぐあっ！」

そして、殴られる威力が強かったのか、すこしばかりそこから血を流すフローガ。

「なかなかやりますね。」

「あんたが弱いだけじゃない？」

理沙が挑発するも、フローガは簡単には乗らない。

しかし、このやり取りの間に回復した蒼は、ハンドガンでフローガの傷ついた側頭部へと向け、撃った。

「ふん。」

と、気付いていたのか、それをしゃがんで避けるフローガ。続けて、理沙の懐へと飛び上がり、その勢いで拳で鳩尾みでめちを殴る。

「ぐっ……がはっ!!！」

ミシミシ、という嫌な音を立てつつも、何とか堪える理沙。

が、立て続けに体を180度回転させられ、腕で首を絞めるようにして理沙を捕まえ、空いた手で両手首に警察官の象徴である手錠を手早くかけたあと、首元に手榴弾を持って来た。

その手榴弾は、安全ピンが抜けていた。つまり、いつ爆発してもおかしくない。

「……さて、どうします？」

フローガが2人に尋ねる。
勿論、理沙など手出しできるはずはないし、蒼だって、射撃技術10段を有していても、理沙を盾にしているフローガを当てるのは難しいだろう。
身長之差も、屈むことによって防いでいる。

「……そんなことして、何が目的だ？」

蒼が、この状況で質問する。
今手出しできない以上、対抗策を練るためにも、話を逸らす必要が有る。そう感じての言葉だろう。

「何が目的か、ですか？」

フローガは嘲笑した。
今までの行動から読み取れ無いのか、とでも言うように。
そして答える。

「ただ破壊して、破壊して、破壊しつくしたいからですよ。そして同時に、これがある目的を果たすための行為だからです。俺様にとっては一石二鳥ですがね。」

今度こそ。

今度こそ、憤慨した。

蒼はハンドガンでフローガを撃った。

「…………馬鹿なんですか？盾があるのに撃ってどうするといつんですか？」

と、弾丸の軌道に乗るように理沙を動かす。

そして、理沙を動かしたことによって出来た隙間により、フローガの片目を潰した。

「ぐ…………ギヤアアアアアアアアツ！？」

猛烈な痛みだった。

いくら非致死性のゴム弾とはいえ、少なからず火薬で加速されているのだ。

眼球に直接当たればどうなるか。

それは、フローガの流す血の涙が証明している。

「…………ククク。」

しかし、フローガは笑った。

「結局、こいつを無駄にしましたね？」

と、フローガは理沙の服の後ろ襟を掴んで言った。

そう、先程蒼は発砲し、理沙に当たってしまったのだ。しかも軌道から察するに、首を絞められたことにより呼吸が苦しくなり、何と

かして呼吸を確保しようと大きく開けた口へと向かっている。
先程も言ったが非致死性ゴム弾とは言え、威力はある。口に入った
なら、喉を刺激して、少なくとも嘔吐くらいはしているだろう。
しかし、蒼がこう言い放った。

「……いいや、無駄になんかしてねえよ。」

何？とフローガが理沙の方をふと見てみる。

理沙は何もなかったかのようにびんびんしている。

「なっ……!？」

「……無駄にしたのはこいつのスペースだ。」

蒼は銃を指差して言った。

そう、理沙に向けて撃ったのは『空砲』。びんびんしているはずだ。
そして、理沙はというと、その言葉に少し啞然とし、その隙にフロ
ーガから逃れ、さらに腹に少し弱めではあるがそれなりの威力があ
るキックで倒し伏せた。

「蒼、私の刀で手錠斬って。」

「……ああ。」

そう言うと、蒼は理沙の刀を拝借し、それで手錠を叩き斬った。
ようやく両手が自由になった理沙は、蒼から刀を受け取り、もう1

つ自分の腰にある鞘から抜き、フローガの両手首を背に回し、刀の峰で押さえつける。

蒼も、フローガに向けて銃を向ける。これで、勝負は決した。

いくら爆弾を持っていようと、両手首を刀の峰で押さえつけられ、銃を向けられては扱えないだろう。

「……終わりだ。」

蒼がそう言った。

そして、史上最悪の爆弾魔は、ここで逮捕された。が、それにも関わらず、フローガは。

「ククツ、馬鹿じゃないですか？」

「何ですって？」

理沙が峰で押さえつける力を強くしつつ問い返す。

「あなた達、これで終わりだと思っているんですか？」

「……何が言いたい？」

嫌な予感がした。

まだ最後の策が残っている、そんな感じの口調だったから読み取れたのだろう。

「調べているはずですよ？俺様がスパコンを爆破し続けているということも。」

「それが、どうしたって言うのよ!？」

理沙が声を荒げてフローガに聞く。

「まだ分からないんですか？この行動の意味が。」

フローガは、本気で2人を嘲るようにこう言った。

「課せられた目的は、この『国』の機能停止。世界最高峰の技術力で反抗できなくする為の第一歩なのですよ！アハハハッ！」

そして、第二声は。

「その為に、この『国』のメインコンピューターにして世界最高峰の頭脳を持つといわれているスパコン、『SC-205TL』……まあ、通称『ジニアス』と呼ばれているようですが、それに爆弾を仕掛けてやっただんですからねえ！」

その瞬間、蒼はフローガの前襟を掴み、額に銃口を当てた。

「……教える。」

そして、怒り狂った様子で続ける。

「……その爆弾の仕掛け場所を教える!!」

「素直に教えると思ってるんですか？」

「……なら吐かせる。」

と、明らかにいつもと違う感じの蒼が、フローガを脅す。

さすがに、高校生とはいえ、ここまで凄まじると若干恐怖を感じる。そして、

フローガは、喋ることは無かった。

なぜなら、何者かによって実弾でヘッドショットされたからだ。

勢い良く頭から血を噴出し、苦悶の表情を浮かべたまま、ドシャッ、という音と共にフローガは生涯を閉じた。

「全く、やってくれたわねん、『13』。」

そこに立つのは、レストランで蒼と激突したオカマ……、もとい『10』だった。

その手には、フローガを撃つたであろう実弾の入っていた黒い拳銃が握られていた。

「ま、雑魚の分際じゃ、やはりこの程度ね。」

「……デメエ……!!」

「やっ、そんな怒らないの!!」

クネクネと体を動かしながら言う『10』。

「気色悪い……。」「

「だ、誰！？今『気色悪い』って言ったの！」「

理沙が思わず悪口を吐いてしまうほどだったが、

「……………んまあ、そんなことはどうだっていいのよ。」「

と、その時、後頭部に何かが押し当てられる感触が。それは、紛れもなく拳銃。

『10』の仲間が、蒼と理沙の動きを封じたのだ。

「とにかく、そいつが言ったように、この『国』の機能を停止させるのが目的なのよん。」「

「……………くそっ！」「

蒼は悪態をついた。

無理も無い。止められるかもしれないものを止められないのだから。

「それに、まあ、その女には興味はないしね。」「

『10』は理沙を指差して言った。そして。

「という訳で……………、ぶち抜きなさい。」「

「はい。」「

理沙の頭に押し付けられた拳銃が、今まさに火を噴こうとしている。

「……………くっ……………」

「くそっ！指定された班は『13』の死体を回収、その後、全班撤収よ！」

そして、武器を置き去りにしたまま、フローガの死体を何人かで担いでサイバーシティから去っていく。

その時。

『うにゃ〜！リサ〜！大丈夫かにゃ〜！？』

『あ、無事みたい』

病院に運び終わったサマーとネイチャーが戻ってくる。

「大丈夫よ！それより……。」

と、理沙があの話をし、それを聞いたサマーとネイチャーは、他の蒼と理沙のポケモンに知らせに行った。

勝者、蒼&理沙。

因みにその頃。

病室にいた時雨とアキラは、院長にこっぴどく叱られていた。
理由は……、

「全く、外に向かつて発砲するとは、どういうことですか！しかもライフルで！しかもさっき私を殴った警察官が！しかも誰も知らない黒いアーマーみたいなのを着た人の手を！」

「本当に申し訳なかった……。」

「お前も！見てて何故止めなかった!？」

「……ワタシ、ニホンゴワカリマセーン。」

「エセ外国人になるな！そして逃げるな私の質問から！」

「だって、ライフルだってわからなかったんだぜよ！」

「嘘こけ！」

……そんなこんなで、論争は続く。

しかし、『ほとんど』本編に関係ないので割愛するが。

第十六話、人間同士の戦い 蒼&理沙VSフローガ（後書き）

という訳で、そろそろ第二章も終わりに近づいています！

フローガ（故）『やけに長かったですけれど。』

でも、この章で少しは伏線張れたし良かったとは思ってるよ？

フローガ（故）『それならそれでいいんですが、（故）『ってな
んですか』（故）『って。』

いや、だって死んでるでしょ？故人でしょ？

フローガ（故）『まあ、そうですね。』

では、次の更新までお待ちください！

第十七話、解除（前書き）

更新遅れて本当に申し訳ありませんでした（汗）

蒼「……………今までその台詞何回言った？」

……………（泣）

第十七話、解除、

再び2組は合流した。

次なる目的は、仕掛けられた大規模な爆弾の解除である。が、一般の高校生にしてはかなり荷が重過ぎる。その為。

「…………やるのか？」

蒼が理沙に問う。

理沙はそれに対して、意外な返答をする。

「勿論よ」

「…………。」

蒼は、今一瞬、言葉の意味が理解できなかつた。

それはそうだ。『爆弾の解除』を間髪いれずに、二つ返事です承したのだから。

「……………本気か？」

「じゃあ、蒼はどうするの？『国』や仲間を見捨てて逃げるの？」

「……………『国』中の人間やポケモンを全員外に逃がせば……………！」

「それも無理。そんなことしてたら、爆弾が爆発するわよ。」

「……………っ！」

確かに、これでは打つ手無しだ。

さらに、バク処理の仕事をする人もどこにいるかすら分からないし、この広大な『国』の中では、探している間に爆発してしまうだろう。さらに、今から騒ぎに気付いた警察官がやってきても、バク処理の人が来たって、そもそもその部署の人数が少ないから来るかどうか怪しいし、仮に来たとしても解除に間に合うはずもない。それでは爆弾処理などできるはずもない。つまり、今動けるのは蒼と理沙、それに彼らのパートナー達のみである。

「……………解除できる自信がないのだが……………」

「まあ、大丈夫よ。」

その自信は何処から来るのだろうか、と思ったが、何か策があるようない方をしていたので、蒼も信頼することにした。だが、ここに来てもう一つ問題があった。それは。

「……………それって、どこにあるのかしらね？」

「……………さあな。」

2人と一緒に7匹も首を傾げる。

そう、その爆弾の場所だ。言い換えれば、『ジニアス』の場所である。

この場所は、誰にも触れさせない為に、『中央エリア』内のごく一部の人間しか知らないのだ。

しかし、時間は刻々と過ぎていく。このままでは爆発してしまう。その時。

ブブブブ……、とバイブレーションが鳴った。

その音源は、蒼のズボンのポケット。

「……………」

蒼が取り出したのは、旅が始まる初日にもらった地図を見る機械である。

因みに、この世界では携帯電話は『あること』に関しては通用しない。『国』毎に情報漏洩を防ぐ、つまり外の人間との会話に使うのに役立つなくするため、また『国』と『国』の間の道には当然電波塔のようなものは有る訳もなく、ほとんど使えない。

唯一使用が許されているのは、この地図に備え付けられた電話機能だけだ。特殊な電波を届けて通話が出来る。ただし、『国』の中についての情報を言おうとすると、壊したり外したり出来ない機械の中に備え付けられた盗聴器のようなものによつて、『益人』^{やくにん}といういわば管理人のような人がその機能を全て停止する。『国』の中で使う携帯電話や通常の電話、公衆電話に至っても同じことだ。前述のような都合の悪い会話には、容赦なく機能停止をする。

余談だが、情報の書き換えには、通称『神の知恵』と呼ばれる解読に1000年はかかるとされる超難解な暗号を解かねばならないし、

情報漏洩を防ぐ為、起動毎にパスワードを打たねばならないという面倒な機能付だ。

それはさておき、パスワードを入力した後、その画面には『unk now n』と書かれていた。まあ、当然といえば当然だ。なぜなら、蒼はこの機能を今を持って初めて知ったのだから。

仕方なく、その電話に試しに出てみることにした。勿論不安はあったのだが、今の状況、誰でもいいから助けてくれという思いもあったので、出てみた。すると。

《おーう、元気にしてるぜよ？》

「……………時雨！」

そう、紛れもなく、相手は時雨だった。

《大変なことになってるみたいだにや〜。》

「……………ああ。これから爆弾の場所を探すんだが、皆目見当もつかない。」

《それはそうでごわすよ。何せ、あいつらここを去る前に大量の爆薬入り爆弾を仕掛けたんだから軟骨。》

「……………何？」

蒼は聞き返した。

何か、危機的な言葉が聞こえてきたのだが……………？

「……………すまない時雨、さっきの台詞、もう1回言ってくれ。」

《え？軟骨？》

「……………殴るぞ。」

《アイムソーリーヒゲソーリー。ハッハッハー。》

「……………」

ブチツ、と電話を切ってやった。

しかし、数秒としない内に電話が。

蒼がため息をつきながら渋々出ると、その相手は案の定時雨だった。

《……あつしが悪うございました……。》

「……こんなことしてる場合じゃないんだよ。さっさとさっきの言葉を繰り返してくれ。」

《だから、あいつらは去る前に、『大量の爆薬入り』爆弾を仕掛けていったんだぜよ。》

「……大量に、とは、具体的には……？」

《まあ、ダイナマイト10000個分なんだが、これだけ広い国だと、見つけるほうが大変だっちいー。さらに、推測するに、前にフーガが使ったことのある爆弾だし、『ジニアス』は『衝撃を受け流す』という特殊な構造をしたバリアがあるから、それをブチ破るためにも『大量の爆薬入り』であるというのもあながち間違いじゃないのであります！》

「……ダイナマイト10000個分だと……！」

そうなってくると、かなり面倒なことになってくる。

恐らく、その爆弾とやらもそんなに爆発まで残り時間がないだろう。それに、早く見つけなければ、探しているうちに必ず解除に間に合わず、爆発するだろう。

「何かいい手はないの？」

と、理沙が蒼の電話機能付き地図に近寄って、時雨に声を届ける。

《うーむ……。手立てはあるにはあるにゃー。でも……。》

「うーん……。」

と、いう訳で。

時雨から必要なデータを送ってもらって、爆弾探しの旅が始まった。

しかし、データさえ貰えれば、後は探して解除するだけだ。

しかも、その爆弾、典型的なあの『コードを切るタイプ』らしい。
尤も、赤と青だけではないらしいが。

「……………しかし、その場所が……………」

『そうですね。『無開発エリア』にしかけるなんて、どうかしてま
すよ。』

「いわば『国』の南端。起爆すれば、それこそ『国』の外も吹っ飛
ぶって寸法ね。」

『す、末恐ろしい……………。』

蒼はエンジェルを出して肩に乗せ、理沙は、『国』の地図が頭に入
っているフレイルムを出し、先頭を走らせることにした。

数分後、『無開発エリア』に到着した。
この少々複雑な『国』の中、数分で来れたのは、フレイムの恐るべき知識量のお陰だろう。

「……にしても、本当に何もなさそうな所だな。とても同じ『国』とは思えない。」

蒼が淡々と感想を述べる。

そう、噂通り建物は壊れているものが多く、その傍らには数人が集団で座っている。その集団も、全員がボロボロの服を着て、体も満足に洗っていない為か、髪の毛も肌も脂や垢がたっぷりについている。

とても、この科学技術の進んだ『国』の民とは思えなかった。

『これが、『無開発エリア』……。』

エンジェルも言葉を失ってしまった。

しかし、そんなことより爆弾探した。どうやら、現在蒼達がいるところよりさらに南のほうにあるらしい。

『とにかく行きましょう。こちらです。』

と、フレイムが先頭に行く。それについてくる他の面々。

爆弾まで、あと1キロメートルほど。爆発まで、あと10分。

1キロという距離は、中々遠い距離であるということをし、蒼と理沙は知った。

運動神経は2人ともそれなりにあったが、それでもやはり2分半ほどかかり、蒼に関しては息も少し切れ切れだった。

「……………ここ、か……………」
「そうみたいね。」

しかし、目的地には着いた。

着いたところにあったのは、少し大きな家のようなもの。

そこに入ると、成る程時雨の言った通り、確かに巨大なスパコンがあり、その下の辺りに爆弾があった。それも、コードを切って止めるタイプのが。

「これをどれか切れればいいのよね……………」
「……………ああ。でも……………」

しかし、その爆弾のコード、数が異常だった。

占めて、20本あるのではないかと思うほどの量だった。

さらには、この中から起爆するコードがどれだか想像もつかない。

「フレイム、分かる？」
『……………これだけ多いと、時間内に終わりませんね……………』
「そう……………」

当然、他のメンバーは出来るわけがない。
しかし。

「……チャーム、あんたは？」
『えー、私ー？』

なんと、理沙があのおっとりした感じのチャームを指名したのだ。

「そう、チャーム。確か、『サヴァン・シンドローム』を授かっているのよね？」

『……んー、確かにー。やってみよつかー？』

「……本当は、使って欲しくないんだけど……。」

『やだなー、心配し過ぎだつてー！』

と、蒼はここで首を傾げた。

その間にも、理沙はチャームを出し、チャームは急に雰囲気を変え、爆弾の解除に取り掛かり始めた。

「……なあ、その、『サヴァン・シンドローム』って何だ？」

「ん？……ああ、そのこと。」

理沙は、答えはじめる。

「『サヴァン・シンドローム』っていうのは、まあ、医学的には知的障害とか持った人が何か卓越した能力を持つって奴だけど、チャームのはまたそれと違うのよ。」

「……というと？」

「『サヴァン』っていうのは『賢人』って意味で、その『賢人』は『神』のことを指しているの。つまり、神の目的は分からないけど、『神から授かった力』ってことで、元々ある『サヴァン症候群』から名をそのまま取ったってこと。略してSSとも言っただけだね。」

その間にも、チャームは恐るべきスピードで爆弾を解体していく。

「んで、このSSにも種類があつて、『Attack』は『誰か1人を狙つて、そいつを倒すまで攻撃する』、『Buttle』は『守ると決めたものを何としても守り抜く』、んで、チャームのは『Calculate』で、『頭脳を使って相手に勝つ』っていう奴。」

「……成る程。」

説明が丁度終わり、既に残り時間が5分を切つた頃、チャームは解体を終えて、どれが本物か見極めようとした。だが。

『これは、ちよつと無理かもー！。いや、18本は切れたんだけどねー……。』

「「……?」「」

2人は首を傾げた。

見ると、まだコードが2本残っている。

それも、よくアニメやドラマにありそうな、赤と青の2本。

『この2本、どっち切れればいいか、もう解体しても分かんないんだよー。』

『ということは、もう運に任せるしかないと?』

『そういうことになるねー……。』

と、会話を続けていたはずのチャームが、突然倒れてしまった。エンジェルが何とか支え、それをフレームが手伝つて仰向けに寝せる。

『ど、どうしちゃったの!?!?』

エンジェルは慌てふためくが、理沙は、

「……だから、使わせなくなかったのよ……。」
『あははー……。でも、リサ達の為なら、このくらい……。』
「……一体、どうしたっていうんだ？」

蒼の質問に理沙が答えようとすると、チャームがそれを止める。

『そんなことより……、爆弾、を……。』
「チャーム……。」
『私の、分も、無……駄に……し……で……。』

チャームは、それだけ言うとすやすやと寝てしまった。

その言葉を聞き、チャームの努力を無駄にしまいとフレイムがチャームを背に乗せてから、全員が爆弾のところに集まる。

コードは2本。

どちらかを切れば終わる。

だが、どちらを切れば良いのか。

ゲームだったら、特に考えもせず「こっちな」と切る人もいるだろうが、今回は現実を起こっている為、そうもいかない。
そんな状況下、理沙は蒼達に問う。

「……どっちだと思う？あと3分しかないんだけど……。」
「……そんな簡単に見えるわけないだろ……。」

当然、こんな問答が出来上がったただけだった。
しかし、事実、爆発まで3分切ってしまった。

『も、もう、どちらか切るしかないよっ！時間がないんだから……！』
『じゃあ、お前が切るっていうのかよ？』
『……っ！』

エンジェルが急かすが、ボルトにボール内から反論され、何も返せなくなる。

そのまま、刻々と時間は過ぎ行く。

「……やっぱり、爆弾解除なんて無理だったのか……？」
「……。」

その言葉に、理沙も自分の言葉に後悔を覚えた。

理沙の言う作戦は、チャームの『SSC』だったのだが、それを持ってしても手出しできなかったのだ。
もう、打つ手は無いのか。

と、残り時間が一分半になった時に、蒼の電話が鳴った。
設定はしていないので画面には『unknown』と表示されていたが、出てみるとやはり時雨だった。

《おっう、元気ですか？》

「……呑気でいいな、お前は」

《いやいや、落ち着けて。》

時雨は、言葉を続ける。

《今、爆弾を解除してるのであるネ?》

「……………ああ、そうだが?」

《んで、何本残ってるでござるか?》

「……………赤と青の2本。」

時間は1分を切った。

もう時間が無い、と思ったその時。

《よし、そんなら赤を切れッ!》

「……………は?」

《いや、そこまで来ればもう大丈夫だぜよ。赤を切れれば全てが終わる。》

言われるがままに、赤いコードを切ってみる。
すると、

ピー……………。

短い電子音と共に、『completed』と、時間が表示されていた部分に代わって表示された。
つまり。

「……………止まった……………?」

しかし、時雨はどうしてこれが分かったのだろうか?
それを聞くと、

《ああ、それは俺が昔、父親に爆弾の制作方法を教わったからだなや。だから、調べ上げた爆弾を見て、前に使われたのと同じ爆弾を調べて、内部構造を調べて、あとはパズルのごとく解いてやればいだけだぜよ。動けないからこの方法しかなかったんだがにゃー…。》

ということらしい。

にしても、チャームより遅かったが、それでも時間内に『解ききつて』しまうところは、頭の回転力がもはや『SSC』を上回っていると言っていていいだろう。

何はともあれ、これで全てが終わったのだ。

第十七話、解除（後書き）

次話で、ようやく第二章完結です！

理沙「長かったわね……。」「

うん、本当に長かった（汗）

1章に11話かけてるからね……。

ポルト「次は短くしろよな？……ってか、何で俺の出番が今回少ないんだ！！」

では、また次回！

ポルト「逃げんなコラ！！！！」

第十八話、『運命』は動き出す（前書き）

これにて、第二章、悪との接触、編は完結です!!

蒼「……お疲れ様。」

そして、今回は繋ぎの様なものなので、短い上に少し文章が……？

蒼「……。」

わ、分かったから、銃を下ろしてくれ……（汗）
で、では、第二章最終話、スタートです！

第十八話 『運命』は動き出す

爆弾解除。

これだけのことを成し遂げたのだから、しかもそれを高校生がやってのけたのだから、当然の如く後々やってきた警察に色々聞かれるわけだ。

そんな訳で現在、蒼と理沙とそのパートナー達は『警察署』にいる。

「……まあ、君たちの行為には感謝せざるを得ないけど、危うく死んでいたかもしれないんだ。その辺のことは分かっているだろう？」

2人は静かに頷く。

「ふん、まあいい。それより君たちには1つ聞きたいことがある。」

そして、警察官は告げる。

「その爆弾、誰が仕掛けたの分かるか？」

その質問に、蒼が全て答える。

爆弾はランド団が仕掛けたこと。ついでに、そのランド団は蒼と時雨のいた2箇所の騒ぎの主犯であることも告げた。

それを聞いた警察官は、少しだけ驚きを顔に浮かべる。

「……ランド団、だと……？」

「どうか、しましたか？」

理沙が聞くが、警察官は「何でもない」と返し、そのまま警察署から出された。

2人が去った後、警察官は電話をかける。

それは、同僚でも上司でもなかった。それどころか、警察関係者ではなかった。

警察とは違う、言うなればもう一つの治安組織だ。

「……ランド団が、また武力行為をし出しました。」

その言葉に、

《ふーん。》

と素っ気無く返された。

さすがに警察官も黙ってはいない。

「ちょ、ちょっと!?! 『ふーん』って何ですか!?! 何でそんなに軽く見下す感じで……っ!」

《いやいや、そういう事じゃあなくてな。》

相手は答える。

《こっちも薄々感じてたんだよ、あいつ等の挙動。》

「そ、そうですか……。」

《そんでな、》

と、相手は続ける。

《前よりも強くなってる……、というか、あっち側の主導者が変わってから暴力的になったといえれば良いのか？それだけは断言できるぞ。》

「それは又、どうしてですか？」

《簡単簡単。まず、そちら側で爆発が起きていることは勿論、『レリジョンシティ』では抗争が一層激しさを増している。しかも、敵方は……。》

と、相手側が急に言葉を止めた。

それに疑問を持った警察官が尋ねると、相手はこう答える。

《いや、それを聞いたらそちらは衝撃で立てなくなる。それを考慮しての行為だ、納得してくれ。というかしたな？したよな？それでいいよな？では言わないぞ。》

「は、はあ……。」

強引に言うのをやめた。

やはり、何を考えているか分からない、と警察官は心の中で思う。

《では、まあ、報告には感謝する。こちらも直に動き始めるとしよう。連絡はこっちで入れるから心配はしなくていい。》

「は、はい、分かりました……。」

その言葉を最後に、電話からは単調な電子音が聞こえた。

「……さて、これからどうするか……。」

蒼は考える。

因みに、理沙は「もうこんな所御免よ」と言って、サイバーシティより去っていった。

蒼もエンジェルもそうしようと考えたが、まず最優先すべきは。

「でも、まずは……。」

『うん……。』

それから、そのペアは病院へと足を運ぶ。

しかし、病院へ来た蒼とエンジェルは、院長からとある話を聞くことに。

彼によれば、

「いや、あのお騒がせ者ですね、傷も完治せぬまま『国』から出て行ったんですよ。」

とのこと。

しかし、お騒がせ者と院長に言わしめたとは、時雨は一体何をしたんだ、と思った蒼なのであった。

そしてその後考えた結果、蒼はこのサイバーシティに別れを告げることにした。

理由は、理沙と似たようなものだったが。

蒼は出国手続きをして、『国』から出て行った。

こうして、蒼、時雨、理沙はまたも散り散りになり、三者三様の旅を始める。

しかし、『運命』は決して彼らを散り散りにはしない。

『運命』は『バグ』を生み出し、その『バグ』につられて三人はまた集まることになるのだが、それはまた別の話。

そして、同時刻、とある場所にて。

そこには、全部で10人ほどいた。

しかし、その内4人が椅子に座っていて、その他6人は立っているという状況だった。

座っている1人　　赤黒く乾いた液体が飛び散っている白衣を着て、狂気に満ちた笑顔を浮かべた男　　が、殺気を漂わせて言う。

「……んでよオ、『神の子』はどオした？」
「そ、それは……。」

立っている内の1人が言葉を詰まらせる。

まさか、失敗した、とは言えまい。

しかし、その様子に、別の座っている1人　年齢が12歳の
小柄で、ピンク色のツインテールをした髪を持つ少女　が答
える。

「もしかして、失敗しちゃった？」

しかし、さっきの白衣の男よりは殺気はなかった。否、実際殺気な
ど欠片もない。

が、6人は何も答えなかった。

その様子に、白衣の男がゲラゲラと笑う。

「ヒーハハハハッ！！やっぱり失敗したのかア！？そりゃ愉快だ
なアオイ！！だったら失敗した代償として、俺の実験台にでもなっ
てもらおうとするかなア！！」
モルモット

その言葉に、もはや6人の頭は恐怖一色で埋め尽くされた。

しかし、また別の座っている1人　ラベンダー色の長髪に、
紅の瞳を持つ、少し不思議な雰囲気醸し出す若い女性　は
白衣の男に言う。

「ダメですよ？決定を下すのは我らがボスなので。分かって
いますよね、トリーチのFrenitidaさん？」

「……ケツ、分かったよ、プローチのKatakktissiiさんよオ。」

「

その会話の中に、聞きなれない言葉が出てきた。恐らく、コード名なのであろう。

しかし、そんなことを気にしている余裕は、未だ解けない恐怖に怯える今の6人には些細な問題だった。

そんな6人に、若い女性、『Katakaktisi』は告げる。

「とうわけですから、あなた達の処分は追ってお伝えします。楽しみに待っててくださいね。」

クスツ、と可愛らしく笑うが、その笑みは、6人にとっては死神の嘲笑にしか見えなかった。

そして、6人は、後々やって来た見も知らぬ人によってどこかに連れて行かれる。それが、ろくでもない場所であることは、6人共理解していた。

そこに残ったのは、4人だけ。

「何だア？今日の会議はもう終わりかア？」

「ええ。今日はもうこれ以外にありません……。」

と、ここで『Katakaktisi』は思い出したように言う。

「……あ、そういうば、見てもらいたい映像があるんですよ。……

Genius、これを。」

「はいはい！」

と、『Genius』と呼ばれたピンク髪の少女が、ビデオを渡され、4人の目の前にあったビデオデッキに入れて再生した。すると、そこには。

羽を生やし、ギャラドスを圧倒している白いイーブイの姿が。

「……なんだアこれは？」

『Frenitida』は驚いた。いや、彼だけではないだろう。まさか、羽をイーブイが生やして戦うとは、思ってもみなかったのだから。

その映像が流れている間、『Katakktisi』は言う。

「……これも、まあ、種類は違うのですけれど、『神の力』の一つです。」

「…これもか？」

「そうですね、Teliosさん。」

と、最後の1人　白髪混じりの青色の髪を持ち、背の高い男

『Telios』の質問に、あっさりと答える『Katakktisi』。

「つまり、この可愛い子も捕まえるってこと？」

「そうですね。我々に邪魔なものはすべて排除するのですよ。」

そして、『Katakktisi』は3人に言う。

「さあ、仕事が増えましたから、手早く済ませましょう。ただし、今回も相手の力量をしっかりと測るために、アイツを送りますが。良いですね？」

そして、3人の首肯とともに、会議は終了した。

『運命』は更なる『バグ』を生み出して、無情にも進んでいく。

第十八話、 『運命』は動き出す、（後書き）

今回、最後に出てきた変な英語のようなものですが、あれは英語にはない（まあ、Geniusはありますが）単語です。ご注意を。因みに、意味は、

『Frenitida』……狂乱

『Genius』……天才

『Telos』……終焉

『Kataktsisi』……征服

……全てギリシア語をローマ字読みにして、それをそのまま英語として書いてだけです。しかし、どれもいい意味ではないですね（汗）

それでは、今日はこの辺りで。

次回からようやく第三章ですー！！

第十九話　　、 森林の中にて　　（前書き）

この章では、蒼とエンジェルが中心です。
他の2人は後の章でやりますのでご心配なく。

第十九話、森林の中にて、

サイバーシティから去った旅人の1人、灰原蒼とそのパートナー、白いイーブイのエンジェルは、現在、来た道に戻るように、つまり、故郷であるアスナタウンに戻るような道を歩いている。

しかし、別にアスナタウンに戻る訳ではない。その道の途中途中にある森や湖に寄り、そのまま北上しようという魂胆だ。

そして、現在蒼とエンジェルは、サイバーシティの少し北にある森、ルクサーフォレストにいる。

そこに出てくる野生ポケモンのレベルが、エンジェルにはちょうど良いのだ。というわけで、蒼とエンジェルはここでバトルをして特訓している最中である。

現在の相手は、ドゴームという、スピーカーのような耳を2つ付けた、口の大きな全身紫色のポケモンである。

『喰らえ！』

ドゴームは、エンジェルに向かって、大きな口で噛み付きに飛び掛った。

それに対してエンジェルは電光石火で素早く避け、飛び掛ってきたドゴームは標的を失い、そのまま顔面を地面に叩きつける羽目になった。

『ちくしょおっ！負けるか！！』

と、またも飛び上がり、今度は踏みつけようとした。

「……懲りない奴だ。エンジェル、穴を掘る。」

『あいあいさー』

明るい返事とともに、ドゴームの着地点の真下で穴を掘り、地中に身を隠した。

ドゴームはまたも標的を失い、片足を地面に埋め、変な体勢になっ
てしまう。

さらに、ドゴームはそのまま抜けられなくなってしまった。イーブ
イの体の大きさとドゴームの足の大きさを比べれば、まあ当然のこ
とではある。

そして、少し離れたところから出てきたエンジェルに、蒼が指示す
る。

「……エンジェル、アイアンテール。」

「はい！」

と、尻尾を光らせて、変な体勢のまま動けなくなったドゴームを楽
々と吹き飛ばし、ようやく足が穴から抜けたドゴームは地面に後頭
部をぶつけ、そのままノックアウトしてしまった。

『ツ~~~~!!!!』

「……大丈夫か？」

『んなわきゃあるか!!!!』

ドゴームは、倒れているにもかかわらず、ハイパーボイスのように
大声で蒼に返す。

そんなドゴームに蒼は溜息をつき、ある容器を取り出した。

「……少し染みるぞ。」

『な、何を……!!!!???』

その後、その容器からでた液体、もとい傷薬によってドゴームは治

った。

壮絶な痛みと、張り裂けそうなほどの絶叫と共に。

『ありがた迷惑だ、この野郎!!』

『もしかして、傷薬苦手?』

『う、うるせえっ!!』

ドゴームは、痛い所を突かれたのか、大声で否定しようとする。

「……つーか、そんな大声出して大丈夫なのか？森に、沢山ポケモンがいるんだろ？」

『知ったことか。聞かなかったことにすりゃ、気にもならねえはずだからな。』

……なんて自分勝手な。

そう思ったが、蒼は口には出さなかった。出したら面倒なことになるのは目に見えていたからだ。

『んじゃ、もう行くぜ。』

「……ああ。」

ドゴームは傷が治ったから良いと思ったのか、さっさと起き上がり、去っていかうとした。

と、突如立ち止まり、

『ああ、そうそう、言い忘れてたことがあったぜ。』
『え、何々!?!』

エンジェルが尋ねると、ドゴームはそれに素直に答える。

『ここにいる人間には気をつけな。』

「……………それは、俺のことか？」

『いや。確かにお前も危険だが……………。』

『あ。傷薬、まだ根に持って……………。』

『それはもういいっ!?!?!』

ドゴームは逆上し、しかしまたも訂正する。

『そうじゃなくなてな、ここに住んでいる人間には気をつけな。』

「……………誰だ、そいつは？」

『さあな。何かをしているのを見たことも無いから、確証は持てんが、何か嫌な予感がしたものでな。』

……………やはり色々と自分勝手だ。

今度は蒼ばかりでなく、エンジェルもそう思ったが、そんなことはいざ知らず、ただ『じゃあな。』と一言言って去っていった。

その後も、蒼とエンジェルはバトルをし続けた。

ドゴームばかりでなく、この森にはマダツボミやロゼリアといった

草タイプ、トランセルやミノムッチといった虫タイプのポケモンも
沢山いた。

『…………ふ〜、結構倒したね〜。』

「…………そろそろ休憩するか。」

『お、賛成〜』

というわけで、近くにあった倒木に座って休憩をすることにした。

そこで、サイバーシテイで暇なときに買いあさった携帯食料を食べ、
空腹を満たし、座って休んで体力を回復していた。

そんなことをすること1時間。

「…………さて、そろそろ再開するか。」

『そうだね!』

と、蒼が立ち上がり、エンジェルが倒木から下りた。

その瞬間。

パァン…………。

何処からか、銃声が鳴り響いた。

「…………何だ? 誰の銃声だ?」

蒼が訝しげにしていると、その真下辺りで、トサツ、という音が聞
こえた。

その音源を確かめるべく、下を見ると。

「…………エンジェル!?!」

『ソウ…………。何か急に力が抜けて…………。』

先程まで元気だったはずのエンジェルが、顔色を悪くして倒れていたのだ。

さらに、エンジェルの背中には、微かに血の跡と見受けられる赤い斑点、それに、かなり浅めの傷が確認された。

どうやら、さっきの銃声は、エンジェルに向かって発射されたらしい。

「……………くそっ！」

一体、何が目的で、誰が撃ったのかすら分からない。

さらに、浅い傷にもかかわらずここまでエンジェルが具合が悪いとなると、どうやらその銃弾の表面に毒でも塗ってあったのかもしれない。

そして、極めつけは狙撃者の精密射撃。

蒼やエンジェルに気付かれないようにするには、ある程度の距離が必要だ。その為、狙撃であることが一発で分かる。にもかかわらず、毒を盛らせる為に浅い傷を負わせるなど、蒼でもかなり難しい射撃技術だ。

『……………ソウ、毒消し、を……………。』

「……………ああ！」

蒼は、リュックから、これまたサイバーシティで売っていた毒消しの薬を取り出し、そこから出した薬を、エンジェルの傷に塗った。

しかし、塗ってから数分しても、一向に治る気配がない。

この毒消し、サイバーシティでの値段が破格であったので、最も良いものを買ったつもりなのだが。

「……………どういうことだ！？何で治らない！？」
『……………ソウ……………。』

エンジェルが、弱弱しい声で言う。

『……………ボク、死んじゃうの？』

「……………縁起でもないこと言うな！」

しかし、治らない以上、ここにいてもしょうがない。

そう思い、エンジェルを抱いて、蒼はただただ出口に向かって森を走った。

さらに数分後、蒼は出口に辿りつかない。

「……………出口はどこだ！？」

必死に探せども、どうしても見つからない。

そして、さらに走っていく。

「……………くそっ！」

この森には、当然地図などない。ほとんど人が来ないので、必要ないと判断されたからなのだが。

ただ、道は整備されているので出口は見つかるはずなのだ。なのに、全く辿りつかない。本当に迷ってしまったようだ。

『……ソウ、もう、駄目……。』
「……何言ってるんだ！」

蒼が、エンジエルにそう返したその時。

「……？」

遠くのほうに、何か家が見えた気がした。

『……どうした、の……？』

「……家だ。誰がいるかもしれない。」

蒼は、エンジエルを助けたい一心で、最後の希望に賭ける様に、その家に向かって走っていった。

「……ここか……。」

蒼は、エンジエルを抱きかかえたままその家の前に着いた。

ドアの方へと向かい、蒼はそれを叩いてみた。

ドアから乾いた音がした後、家の中から足音が。

足音はどんどん近づき、ついにドアの前まで来た。

「何だ？」

ドア越しから、若い男の声が出た。

蒼は、その男に頼んでみる。

「……俺のパートナーが毒にやられてしまって……。何か薬とかありませんか？」

すると、男は。

「何！？毒だと！」

「……はい。」

「症状を言えるか？」

すると、エンジェルが苦し紛れに言う。

『……か、体が、痺れて…、動けない、の……。』

「……毒消しは？」

「……使いました。薬の名が、『AP-8976』です。」

「ふむ……。」

すると、男はドアを開けた。

そこに立っていた男は、声とは裏腹に、白衣を身に纏った老人であった。

身長はそれなりに高く、白髪で、白髭であった。眼鏡もかけているので、研究者の雰囲気漂っている。実際そうなのであるうが。

「まあ、上がれ。そいつの毒を治せるかもしれん。」

「……本当ですか！？」

「まだ確証はないがな。まあ、こっちに来い。」

と、老人は親切にも蒼とエンジェルを家に入れてくれた。

「……すみません、突然……。」
「気にするな。ワシも暇だったからな。」

若い男の声なのに、主語が『ワシ』なのは少し引つ掛かりを覚えたが、この際気にしなかった。

そして現在、エンジエルはベッドの上でぐったりと横たわっていた。老人は、そんなエンジエルの身体の毛を掻き分けて見てみる。

「ふむ……、この症状は……。」

すると、それを見た老人の顔色が変わった。

「……どうしたんですか？」

「いや、こいつは市販の薬で治らない訳だ。」

そして老人は、棚からとある薬品を取り出しながら蒼に説明する。

「こいつは、エリア3でかつて流行った人工殺人ウイルス、『コードブラック』と呼ばれる奴だ。」

「……『コードブラック』、あのエリア3の『イーストエリア』の人口を4分の1まで減らした……。」

蒼はその言葉に反応した。

「そつだ。こいつの特徴は体中に赤黒い斑点が出て、身体が痺れて動けなくなるのが特徴だ。感染経路は、直接手で肌に触れてしまう

ことだ。ウイルスは斑点から出てきて、触れた人の毛穴に入って体内で増殖していくから、かなり不思議なウイルスなのだが。まさに『体触感染』と言ってもいいだろう。」

「……つてことは……。」

蒼は、エンジェルを運んできた自分の手を見る。

もしかして、感染しているのではないか？

それを見透かしたように、老人は言う。

「大丈夫だ。肌で触れた場合には、ウイルスの回りに時間がかかるから、発症まで30分を要する。だから今は症状が出ていないだけだ。とりあえず時間切れまでに、こいつを飲んでおけ。」

老人は、蒼にとある錠剤を手渡した。

白い、何の変哲もないような丸薬だ。

「……これは……？」

「『コードブラック』の唯一のワクチン、『デイサイファー』だ。」

老人が自分で瓶から『デイサイファー』を取り出して飲み、続いてエンジェルにも飲ませた。

「こいつは、『コードブラック』の増殖を抑え、なおかつ即座に殺すワクチンだ。水無しで飲めるところも魅力だったりするな。」

その説明を聞いて、そして、老人も同じものを飲んで無事だったのを見て、丸薬が毒でないことを判断し、蒼はそのままそれを飲んでみた。

そして、それらを飲み終わって、ベッドの方を見てみると。

『……ん……。』

エンジェルがゆっくりと目を開け、

『……あ、ソウ。おはよ』

何事もなかったかのように立ち上がった。

「……凄い……。」

「これで大丈夫だ。」

『……あれ？そついや、ここ何処？』

エンジェルが状況を飲み込めていないようで、蒼はかいつまんで状況を説明してやると、

『そつなんだ……。』

その説明に恐怖と驚嘆感じながら返答し、そして老人に振り向いて、

『ありがとう』

にっこり笑顔で、老人にお礼をした。

それに対して、老人も笑顔で、

「当然のことをしたまでだ。医療関係の研究をここでしている身としてはな。」

ここに来て、蒼は老人が何故ここまで病気に詳しく、なお且つ特効薬を持っているのか理解した。

しかし、何故この森の中で研究をしているのだろうか、という疑問

が当然上がる。
それを尋ねると、

「……話すとちよいと長くなるが、それでも良いなら構わんぞ。」

その言葉に、興味を持っているエンジェルは当然同意。蒼もそれにつられて同意した。

2人の同意に、老人はとある部屋へと案内した。

その部屋は意外に広々としていた。

例えるならば、人が100人いてもまだまだ余裕のありそうなほどであった。

その中央に、所々錆びた鉄の机があり、似たような椅子が5つほど置いてあった。

さらには台所（と呼ぶにはかなり汚れすぎているが）もあった。普通の家庭には全く届かないほどのボロさと不潔さだが、文句を言っても始まらないので、蒼とエンジェルは黙って椅子に座った。正確には、椅子に座ったのは蒼だけで、その肩の上にエンジェルが乗っているという状況だが。

「まあ、疲れてるだろうから、とりあえずこれでも。」

と、老人は、台所にあるポットでコップにお湯を注ぎ、そこにティーバッグを入れて紅茶を作った。

因みに、エンジェルにも飲めるように、皿に入れてあった。

「ティーカップなんてもんはないが、勘弁してくれ。」

「……大丈夫ですよ。喉も渴いてましたし。」

と、蒼はその紅茶を飲む。

小腹の空いたエンジェルも当然、皿にある茶をペロペロと舌ですくって飲んだ。

『……ん、普通かな……。』

「そりゃそうだ。市販の紅茶だからな。」

と、老人が苦笑して返す。

「さて、ワシの身の上話だったな。何でこんなところにいるか、だろ?」

蒼とエンジェルは頷く。

その返答に、老人はにやりと笑った。

「では、」

と、突然立ち上がり、白衣のポケットから、『白色の銃』を取り出し、蒼に向けた。

「ワシ達のアジトに行ってから、じっくりゆっくり話そうか!」

そして、老人は容赦なく引き金を引く。

蒼はそれにいち早く気付き、避けようと立ち上がる。

エンジェルも同様だ。

だが。

「……………!?!」

『きゃっ……………!?!』

立った瞬間にドタツと床に倒れてしまった。そのお陰で、発射された銃弾は何とか回避することが出来た。しかし、身体など微塵も動かない状況に陥れられた。

「……………お、お前……………。」

「どうした、動けないのか？」

老人はニタニタと笑って近づく。

「……………な、何を…飲ませた……………?」

「ああ、全身を麻痺させる薬だ。さっきの紅茶に混ぜてやったんだ。」

そして、老人は蒼の目の前でしゃがみ、銃を肩に近づける。

「さてさて、お前にはアジトに来てもらおうか。」

『……………何するつもりっ!?!』

エンジェルが怒った口調で聞くが、老人はこうとだけ答えた。

「……………神の子の捕獲、及び神の力を持つ者の捕獲。これで分かったか？」

「……………お前、ランド、団、か……………。」

震える声で尋ねる蒼。

それに、老人は答える。

「そつだ。それ以外に何がある？」

そして、老人は銃を肩に当てたまま、銃の引き金に指をかける。

『……ソウ!!』

「あばよ、若造。お前の使い道はあつちでFrenitidaさんが決めてくれるだろうよ!!」

とうとう、老人は銃弾を放った。

が、その狙いは大きくそれることとなった。

それもそつだ。入り口の真正面にいた老人は、入り口に突如現れた人物によって蹴りで吹っ飛ばされたのだから。

「ぐおあつ!!」

そして、後ろにある鉄の机にぶつかり、背を打つ。

その痛みに耐えながら、老人は立ち上がる。

「くそつ！誰だ!!」

「……私よ。」

そこに立っていたのは、1人の少女。

蒼はその少女に見覚えがあった。

「……お、前……。」
「大丈夫。私が倒す。」

少女は、腰につけたモンスターボールを取り出し、ポケモンを出した。

そこから出てきたのは、

「お願い、グレン。」

『承知!!』

グレン、と呼ばれるバクフーンだった。

それに対して老人もボールを出し、ジバコイルを出した。

「行け！ジバコイル!!」

『我、が、行く。』

単語で切るような喋り方をして出てきたジバコイルは、早速10万ボルトを繰り出す。

しかし、

『笑止!そのような粗末なもので俺を倒せると思うな!!』

10万ボルトがグレンの所に到達する前に、グレンが一気に間合いを詰めて、電撃を避けながらも懐に入る。

『喰らえ!』

『xc b g h t y r s g ! ? 』

壊れた機械のような悲鳴を上げて、ジバコイルは炎を纏った拳によ

るアッパーカットを喰らった。

ジバコイルは鋼タイプ。相性的にも威力的にも効果は抜群だった。

「ジバコイル！」

『遅いぞ鉄塊！！』

続けざまに、炎のパンチで一発、大きな目玉に決めてやる。

当然、目は使い物にならなくなり、見えなくなったところを大文字で焼き払われた。

「……………」

『す、凄……………い……………』

まさに一瞬。反撃を与える暇もなく、ジバコイルは倒された。

それも、ほとんど少女の指示無しでだ。

「私の指示もいらさないわね。こんな相手。」

『ああ、全くだ。』

グレンと少女は軽く会話を交わし、老人に向かう。

「くそっ！」

拳銃を向けるも、戦闘中に少女が壊したらしく、銃は撃てなくなっていた。

そして、反撃する術を失った老人は、少女の蹴りを顔面に喰らい、ノックアウトした。

かくして、蒼とエンジェルは少女の活躍により助けられ、その後無事に森を抜けたのだった。

第十九話、森林の中にて、（後書き）

最後に出てきた少女、勘の良い人は分かったかもしれませんが。
因みに言うと、もうこの本編のどこかに出てきています。

興味ある方、次回まで待てない方は、どうぞ暇な時にでも探してみ
てください（笑）

第二十話、事後処理（前書き）

今回は、あの人がかなり非道なやり口で攻撃しているので、閲覧の際にはご注意ください（汗）

……そして、よくよく気がつくともうこの小説、1年が経ちました。

エンジェル『い、1年やってまだこのスピード!?!?』

も、もっと頑張りますね（汗）

第二十話、事後処理

森から出た蒼、エンジェル、そして少女とグレンは、入り口近くで屯たむろしていた。

すると、少女は蒼の背負うリュックから『』を取り出し、それを口に含ませる。

もはや『何でも治し』に近いその道具は、たちまち蒼とエンジェルの麻痺を消していく。

「……………助かった。」

『ありがとう』

「いや。当然のことをしただけよ。」

少女はそう返す。

そして、蒼は少女の顔をまじまじと見てから、尋ねてみる。

「……………なあ、お前……………」

質問の意味をそれだけで悟ったのか、少女は答える。

「そう。私は影野春香。あなたのクラスメイトよ。」

『そして俺がそのパートナーのグレンだ。』

「……………やっぱりか。」

『何か、久しぶり、って感じだね!』

そう、少女は影野春香であった。

春香も蒼と同じく、旅人試験に受かり、旅をしていたのだ。

「……………にしても、何でここにいるんだ？」

「旅に出たのが昨日で。近いところで特訓しようとする森に来て。

そして銃声が鳴ったから色々探し回ったら。あなたたちがいたの。」

『おお〜！なんたる偶然！！』

エンジェルは驚嘆と感謝を織り交ぜて言った。

蒼も感謝をし、それから春香に尋ねた。

「……………それで、これからお前らはどうするんだ？」

その質問に、少し何か躊躇った後、答えた。

「あなた達と一緒に。旅をする。」

「……………」

『……………え？』

両者、啞然。

そこで、もう一度尋ねてみる。

「……………もう一度聞くが、」

『もうはっきり言っただろう？』

しかし、グレンに制され、もはやこの決定事項を受け入れるしかなかったようだ。

が、理由は聞いていない。

そこで、蒼が尋ねる。

「……………それで、」

『その旅の目的は？』

「……………」

またも台詞をとられた蒼は、少し落ち込んだが、続けてくれ、という悲痛な声とともに、春香の説明が始まる。

「……………力を。貸して欲しいの。」

「……………？」

『何で？何で？』

その問いに、グレンが答える。

『お前ら、『神の子』と『神の力を持つ者』だろう？』

「『…？』」

ずばり、と言われた。蒼とエンジェルは驚いて何も言えない。やはりな、とグレンは続ける。

『だったら、話は早い。お前らのその力を貸して欲しいのだ。』
「……………それは何故だ、とさつきから聞いてるんだが？」

蒼は、少し怒った口調で再度質問する。

グレンは、それに答える。躊躇いも無く。

『ランド団を倒す為だ。』

「……………何!?!」

『ええ!?!』

当然、驚いた。

春香は、「驚きすぎ。」とくすりと笑いながら、グレンの言葉を引き継ぐ。

「そう。あなた達も接触したはずよ。」

「……………何で知ってる?」

「何でって。もうニュースになってるし。」

「……………は?」

寝耳に水の新事実には戸惑い、それを見た春香はある新聞記事をポケットから取り出す。

そこにある記事を読むと。

『高校生が爆発物処理

4月24日午後1時、サイバーシティにおいてランド団によると思われる爆破テロ未遂事件が発生した。爆発物の仕組みは非常に複雑で、専門家でも解けないだろうレベルだったという。

それを解いた人物が、今回は高校生であった。

『入国リスト』、そしてサイバーシティに張り巡らされた監視カメラの映像から判断して、『灰原 蒼』と『石井 理沙』の2人、加えそのパートナーが爆発物処理をしていたと思われる。2人はまだ高校生であるにも関わらず、爆発物を解除したという。

この事実に対し、サイバーシティ市長、クロード・スタンリー氏(58)は、「信じられない。早く会って礼が言いたい」とのこと。

国際警察（IP）は、同時に起こった警察官大量虐殺、及び爆破テロ未遂事件の犯人を徹底的に調べ上げている。」

「……俺の人権は？」

『見事に名前公開されちゃったね……。』

「仕方ないと思うよ。誰も許可握る者がいないし。それに。表現の自由だって主張されたら。合憲だから認められるし。」

「……ぐっ……。」

『いいじゃねえか。有名になったんだからよ。』

『そ、そうだよ！』

「……これからは穏やかに暮らせないかもな。エンジェルだって、落ち着いて飯も食えないだろうな。」

『そ、それは困る！！』

と、発言した後に、春香とグレンに自分が大食であると知られて恥ずかしかったのか、頬を朱色に染めて俯いた。それに、春香とグレンは笑った。

「あなた。相当な大食いさんなのね。良い事だけど。」

『……うう……。』

『ま、まあ、その話はひとまず置いてだな。』

グレンが強引に軌道を戻し、話を続ける。

『そついうわけだ。』

「……いきなり言われて納得できるわけ無いだろ。あんな軍団倒せって言われてよ。」

『まあ、それは承知の上だが。このままでは收拾がつかなくなるぞ。』

『

頭に疑問符を浮かべる蒼。エンジェルも同じく。そのコンビに、グレンはある言葉を言い放つ。

『このままでは、世界は崩壊する。』
「『……………え!?!』」

声を揃えて、また驚く。

グレンの言葉を引き継ぐように、春香が答える。

「あなた達。こいつらが何をしたいか分かっているじゃないでしょ。」
「……………確かにな。」

その通りといえば、その通りだった。

いきなりサイバーシティに来て爆破を試みようとするし、『神の子』
だという理由だけで自分を捕まえようとしてくる。

その時は必死だったので全く疑問に思っていなかったが。
しかし、春香はその疑問に答える。

「こいつらは。あらゆる力を使って世界崩壊へと導こうとしている
の。動機は知らないけどね。」
「……………あらゆる力?」

春香はその蒼の問いかけに答える。

「そう。例えば……………」

と、その時。

「おいおい、勝手に話してもらっちゃ困るんだよなア。」

低めの、それも見知らぬ男の声が背後から響いた。

振り向くと、立っていたのは所々赤いシミのある白衣を着た男。先刻の老人のようないでたちだが、歳は若い。まだ20歳代だろうか。

「じゃなきや、死ぬぜ？」

白衣の男は何かスイッチのようなものを取り出す。

それを見た春香とグレンはたじろいだ。

「……お、おい、影野？」

「やめて。わかった。話さないからそれをしまつて。」

蒼の呼びかけを無視するほど恐怖心を抱いた春香はそのまま腰が抜けて地面に座り込んでしまった。グレンも、身動き1つ出来ない。

「分かりやア良いんだよ、分かりやア。」

白衣の男は、ニタリと笑ってポケットにスイッチをしまい、それから蒼の方へ向いてこう言い放つ。

「『神の子』、俺達のことにより口を挟まないほうが身の為
だぜ？」

「……………！！」

蒼も、春香と同じようにたじろいだ。

この男も、自分が『神の子』であると知っている。

「まア、今半殺しにしてもいいんだが、今回は目的が違うからなア。
重たい実験動物^{モルモット}を2体も持てないし。お前、運がいいぜ？」

「……………お前、誰だよ。」

「……………ハア、これだからクソガキは言うことを聞かねエんだよな
ア。」

すると、白衣のポケットから一丁の拳銃を出し、蒼に向けて、正確
には蒼の顔から『0・1mm離れた所』に撃つという非常に精密な
射撃をした。

頬に微かな痛みを感じ、それによって出来た隙で白衣の男は今度は
銃を持ち替え、蒼に近づき、グリップで蒼の顔を殴りつける。

「……………ガアッ！！」

『ソウ！！』

「さてつと、気晴らしになったし、そろそろ『本命』を殺しに行く
かア。」

人を殴ることによって得た爽快感を顔に出しながら、そのまま颯爽
と森の中へ去ってしまった。

「……………何なんだよ、あれ。」

『全く、人を殴って去っていくって、人としてどうかしてるよっ！』

！」

『ま、まあ、落ち着け。どうせ、奴には勝てない。』

『落ち着けるわけ無いでしょ！！あれ誰なの！？何で話せないの！』

「……………ごめんなさい。でも。話したら死ぬの。その死ぬ仕組みも。話したら殺されそうで言えない。」

「……………ッ。エンジェル、とりあえず落ち着け。事情があつて話せないんだから仕方が無いだろ。」

蒼が殴られた顔をさすりながら、エンジェルを宥め、ようやく落ち着いた。

そして、エンジェルは何も納得できないまま、あの男から離れる為に更に北へと、新たな仲間とパートナーと共に進んでいった。

一方、森の中の別荘にて。

「……………くそつ、今日は厄日だ……………」

老人は少々荒れた部屋の中で痛みでうずくまりながら言った。

これで、『神の子』を逃してしまったのは重大だった。もしかしたら殺されるかもしれない。

が、逃げようと思っても身体が動かない。歳を取るの嫌なものだと思つた時。

「ハアーイ、クソ野郎。」

入口近くに響く若い男の声。

この声は、老人には聞き覚えがあった。

「……………!?」

「アハツ！そんなに驚くなよ、有名人でもあるめエし。」

その男は笑った。見た者の気分を害するような、狂った笑みだった。そして男はこれだけを老人に伝えた。

「『78』。依頼ミスったから、今ここで半殺しにされるオ……！」

途端に男はボールを取り出して、ポケモンを繰り出す。

そこから出て来たのは、キルリアの進化系のエルレイドだった。

「行け、エベリクトオ……！」

「……………承知致しました、ご主人。」

エベリクトと呼ばれたエルレイドは男にそう答えて、身構える。

そして、予め男の命令が分かっていたかのように、老人の顔に蹴りを入れる。

老人は、あまりの威力に奇声を上げて壁にまで吹き飛ばす。

「ぐっ……オオッ……。」

「ンア？そんなモンかよ、『78』。やっぱそこまで来ると雑魚なのかねエ。」

「ぐっ、なめるなよ若造が！！！」

老人は、ポケットからモンスターボールを取り出し、この時の為に備えておいた隠しておいたポケモン、ゲンガーを繰り出した。相性的にも、ゲンガーの方が勝ってはいる。

が、男の方は、額に青筋を浮かべていた。

「あーあーあーあー。言っちゃったねエ、このクソツタレの老いぼね。」

そして、エベリクトにこうとだけ指示した。

「殺せ。その間に俺はあいつを半殺しにするからよオ。」
「承知しました。」

そして、エベリクトを無視して、男は老人へと向かっていく。

『させるか！』

『目障りですよ、毒ガス幽霊の分際で。』

エベリクトが、男の行く手を阻もうとするゲンガーに応戦する。そのお陰で、男は身がボロボロの老人に向かって、鳩尾を殴ることができた。

そこからは、ペキペキ、と何かが折れる音がした。同時に、老人は血の塊を吐き出す。

「ゴポオアアアアアアアアアッ！！」

「うるせエな、ちったア黙りやがれ。」

男は、さらに追撃として、わざと口の辺りを狙って歯を数本折り、顎の骨を折り、言語を表す能力を失わせた。今後表せるのは悲鳴くらいなものだろう。

その一連の動作を終えた後に、男は血塗れの老人の髪をグイッと掴む。

「いいかア、腐った脳味噌を持った可哀想なアナタに復習タイムだ。」

その間に、鬱憤を晴らすように股間を蹴り上げ、グチャグチャになった口からは悲鳴が発せられる。

「お前はなア、人間の屑だ。その屑共が集められて構成されてんのがこの組織だろ？ここまでではいいか？分かったら『分かりました』って言うてみる。」

当然老人は言えるはずもなく、再び股間を蹴り上げられる。

そして、男は続ける。

「フン、まアいいか。そんでな、俺達はそんな屑共をわざわざ集めて居心地のいい所に居させてやってんだ。その恩恵の代償としてキ

ツチリ働くのが道理ってモンだろ。けどなア、お前は依頼に失敗した。尚且つこの俺を『若造』と呼んだ。俺を呼ぶときにはコードネームで呼べって教育されなかつたかなア!!!?アア!!!?」

怒りが爆発し、股間のみならず、腹をも蹴り上げ始めた。

しかし、随分キレやすい性格である。こんな奴の下でやっていくのは、さぞかし大変なことだろう。

「アハハハハハッ!!!何泣き叫んでんだよオ!規律も守れない屑はもう俺は奴隷としても見なさねエぞ!?だつたらどんな感じで見なされるのか、分かつてるよなア!?!?!?!?!ああそつだ、実験動物だ!良かったなア!せめて動物としては見なされてるぞ!史上最低の呼び名としてでなア!?!」

怒り狂って、無茶苦茶に叫んでいる男は、ようやく老人を離してやる。

丁度その頃、

『ご主人、清掃完了致しました。』

「ご苦労さん。後で褒美をやるよ。」

『はっ、ありがたき幸せ……。』

そんな会話を交わしているエベリクトの片手で、瀕死のゲンガーが引きずられていた。

老人は、薄れゆく意識の中で、これからの自分の絶望に塗れた末路を悟った。

そして、目の前は真っ暗になった。

次に目を覚ます場所は、様々な機械と拷問道具が置かれた奇妙な場所であることは、この2人ともに想像は出来た。

男は、その時携帯電話を取り出し、とある所に電話をかけていた。

「もしもし。」

『……終わったのですか？』

「アア。あっけなかったぜ。」

『そうですか。では時期に私がお迎えに上がります。』

「ご丁寧にも。それとよオ、こいつの処分はどうする？」

『……あなたにお任せしますよ、Frenitidaさん。』

「アハッ、ありがとうございます！」

『では、また後ほど。』

「ああ、よろしく頼むぜ。」

そして、男は数分後にアジトに戻ることとなった。

『楽しみ』を1つ増やして。

しかし、今はそれとは関係なく、蒼達の旅は続いていく。

第二十話、事後処理（後書き）

……という訳で、老人の事後処理が終わりましたね。
そして、また謎が色々と増えましたね。

蒼「……増えすぎて逆に分からなくなる、なんてことは無いように
な。」

……多分大丈夫さ！

蒼「……多分、って……。」

では、また次回！

第二十一話 水使い (前書き)

さあ、今回で第三章が終わりになります！

蒼「……は？」

エンジェル「短くない？」

気にするなって(笑)

蒼&エンジェル「気にするよ!!」

まあまあ(汗)

それではどうぞ！

第二十一話　　水使い

1人の狂った科学者が処罰を与えている間、蒼達はそこから離れた所にいた。

現在は、そのすぐ北のベビーポンドという池にいる。

ベビーポンドは名の通り、『エリア5』の中では一番小さな池だ。とはいっても、普通に大型の水系ポケモンが住めるほどには大きい。また、池の水は澄んでいて、その周りにある木々を水面に映している。

そんな池に2人とそのパートナー達はいた。いまだ少し恐怖に震えながら。

その恐怖を、美しい池は癒してくれていた。癒してくれている間に、蒼達は話していた。

『うう、助かった……。』

「そうね。危ないところだったわ。」

エンジエルの呟きに春香が答える。

その間にも、春香は蒼の傷を治していた。グレンがその横で春香を手伝っている。

「……しかし、あれは誰なんだ？」

『……すまないな。その情報は言えないんだ。』

「……ああ、そうだったな……。すまない。」

グレンは侘びをしながら蒼に言う。

しかし、何かを思いついたように、蒼は自分のリュックを探って、メモ帳と筆記用具を取り出す。

その意図を悟った春香とグレンは、それらを取ろうとするのだが。

「……………っ！！？」
『ぐうっ……………！！』

突然、両者が苦しみだした。

蒼とエンジェルが驚き、しかし、その意味を知る。

あの科学者の持っていたリモコンを見たことがあれば、誰もが想像がつくだろう。

「くああああっ！痛い！痛い！」
『うう……………、ぐおおおっ！』

春香とグレンはそのまま数分苦しみ、そしてようやく解放された。

「……………どうやら。駄目。みたいね……………」
『一体、どんな方法で分かったのやら……………』

春香とグレンは紙に書いて伝えようとするのをどうやって読み取ったのかという疑問に少々困惑しながらも、しばらく仰向けになっていた。

「……………こうなると、いよいよどうやって知ればいいのか分からないぞ……………」

『まあ、無理して知らなくてもいいんだけどね。』

「……………同行する理由が不純だから知りたいって言ったの、お前じゃ

ないのか？」

『あ……。』

瞬間、エンジエルは顔を赤らめる。

確かに、蒼を遮ってまで聞いたのはエンジエルの方だった。

そんなエンジエルを見て、皆が笑う。

その笑いによつて、少々不安が薄れた気がした。

数分後。

少し落ち着いた蒼達は、ベビーポンドを抜けようとした。

そもそも、ここは人の心を癒すような景色以外には何も無い場所なのだ。それを考慮すると、長居せずに進んだ方がいいだろう。

悪の組織を潰すという意味合いでも、だ。

しかし、それを妨げたものが1匹。

それは、ガサツと草むらから出てきた。

『ハア、クソツ、見つからねえな。』

そして、その水色の体を持ち、頭に何か同色の紐のようなものをつけた小さいポケモンが蒼達を捉える。

すぐさま、そのポケモンは蒼達を呼び止める。

『おい、テメエら!!』

その怒声に、蒼達は振り向く。

そして、ようやくその正体を知ることとなる。

『う、嘘……。』

『フィオネ……?』

『違えよ、俺にはちゃんと、「フラッド」っていう名前があんだよ
!..!』

そう、フィオネだった。どうやら、フラッドという名前らしい。

自分で名前をつけて良くなったので、このようなポケモンはこの世界では珍しくもない。

『そつだ、駄目元だが、テメエらに聞きたいことがある。』

「……何だ?」

そして、フラッドが尋ねたいことを言う。

『この辺りで、俺の父さんか母さんを見なかったか? 勿論、両方共にマナフィなんだが。』

「……いや、残念ながら。」

『ボクも……。』

「私もよ。見ていないわ。」

『右に同じく。』

全員が、その問いに対して否定の返答をする。

フラッドは、少し落ち込んだ様子だったが、すぐに気を取り直して別の質問をした。

『だったら、もう一つ質問だ。……ランド団を見なかったか?』
「『『』……!?!?!」」

全員が驚く。

突然出てきたフィオネにそんな質問をされることは、滅多にないであろうから。
そんな状況で、春香が返す。

「……ええ。見たわ。新聞に載っているしね。」
『新聞……。そんなもの見ねえからなあ。』
「だったら。ほら。印刷したものだけねど。」

と、春香が例の新聞をフラッドに渡す。
しかし、フラッドはそれを制止する。

『いや、どうせ俺には人間の文字は読めないだろうしな。』
『えっ!? 読めないの?』
『当たり前だ! 小さい頃から両親を探してるっつーのに、一体いつ文字を習えばいいんだよ!』
『うっ……。って、いつから探してるのさ……。』

フラッドの言うとおりだった。

確かに、人間と共に生活すれば、人並みにはポケモンだって字は読める。しかし、フラッドの場合は別だ。本人曰く両親もおらず、その両親を1人で幼い頃から探し続け、さらに人間と共に暮らした経

験もほとんどないとなると、文字は読めない、という結論に至るの
だろう。

しかし、その話の流れを戻すように、今度はグレンがフラッドに聞
く。

『それにしても、何故お前はランド団を追う？俺達もその組織を追
う身なのだから。』

『……何？テメエらもそうなのか!?!』

すると、そんなグレンの問いかけに対する回答をも忘れ、フラッド
はこう言う。

『だったら、仲間にしてくれ!!』

『……はい!?!』

全員が叫ぶ。

理由は単純明快だ。目的を同じくする人やポケモンと行動を共にす
るのは良いことであるからだ。戦力は増えるし、絆も生まれやすい。
そういった面からの提案であった。

そして、それを受け入れる前に、フラッドはさらにこう付け加えた。

『そして、お前らがどれだけ強いか試させてもらおうぜ！弱かったら

あまり意味がないからな!!」

すると、フラッドはバブル光線を発射する。
いきなりだったが、皆はそれを何とか避けきる。

「……お前! そんな身勝手な……!!」

『ほらほら、問答無用だぜ!!』

そして、間髪入れずに攻撃を仕掛けようとした時。

「グレン。火炎放射。」

『ああ!』

仕返しだと言わんばかりに火炎放射を放つグレン。

しかし、それを察知し、その威力が強いことを悟ったのか、すぐさま水に潜るという回避行動に出る。

「グレン。池に向かってスピードスター。」

『了解!』

グレンは短く返すと、星型弾を池に撃つ。

スピードスターは追尾型攻撃。即ち絶対に当たる攻撃なのだ。
ところが。

『渦潮!!』

池の中心が突如円を描き始め、次第に大きくなり、渦潮と化していった。スピードスターはそれに吞まれ、しばらくして効力が尽き、切れてしまった。

そこから飛び出てフラッドが出てくる。

が、それを見事に読んだかのように、

「……エンジェル、アイアンテールだ。」

『うん！分かった！』

水中から出てきたフラッドに向かって、エンジェルが鋼鉄の尻尾を浴びせようとする。
ところが。

『ダメだぜ、そんなんじゃあー！』

フラッドはバブル光線をそれに向けて発射し、エンジェルを怯ませることに成功する。

そして、アイアンテールをその怯みで止めてしまった事によって、現在はフラッドとエンジェルが至近距離にいて、エンジェルだけが怯んでいる状況になってしまった。

『しまっ……！』

『ラッキー！超音波！！』

瞬間、エンジェルはほぼゼロ距離で、奇怪な音を聞いてしまった。
だんだん、頭がおかしくなっていく。

『ぐっ……、きっ……！！』

ようやく耳を塞ぐことが出来たが、時既に遅し。エンジェルは少し混乱状態に陥ってしまった。

『グッ、ガアッ！』

と、軽く混乱状態になったエンジェルが、猛スピードでグレンに向かつて電光石火を仕掛ける。
しかし、

「……威力45。ちょっと強いけど関係ない。グレン。エンジェルを止めて。」

「ああ！」

春香の少々機械的な言葉に従ってグレンが火の粉を繰り出し、その熱さによってようやく混乱が解けたエンジェル。

「あ、熱いよっ！」

「悪かったな。それと、ちょっと耳を貸せ。」

「？」

エンジェルはグレンの言葉に耳を貸す。

そして、数秒グレンが話した後、エンジェルは了承する。

が、その時。

エンジェルは、突然後方から来た大量の水に吞まれ、池の入り口の外まで放り出されてしまった。

「かはっ……………!!」

「……………エンジェル！」

「だ、大丈夫だよ。それより、今は……………？」

エンジェルは、今が何か聞こうとしたが、やめた。
目の前にその元凶が見えたからだ。

どういう原理で操っているかも分からないが、確かに水を自在に操るフラッドの姿が。

そして、続けざまにエンジェルに向かって少量の水を柱状にして連続で飛ばす。

しかし、一発一発が水圧が高く、当たったらダメージは喰らってしまふ。

そこで、

「……避ける！」

『言われなくても』

蒼の命令に従って、電光石火で次々とその少量だが細い水の柱を次々と避け続ける。

そして、そのままフラッドに向かって急接近し、

「……アイアンテールだ！」

『了解』

鋼鉄並みの堅さと化した尻尾をフラッドの小さな体に思い切りぶつける。
が。

『甘いぜー！おらよっ！ー！』

『っ！ー！』

何と、あのアイアンテールを水で作った盾で防ぎ、その後その盾を一気に外側に膨張させてエンジェルを吹き飛ばした。

「隙あり。グレン。スピードスター。」
『合点!』

エンジェルに気を取られている隙に、グレンが無数の星型弾を飛ばす。
ところが。

『だから、そんなの効かねえつつってんだろ!』

と、目の前にまたも盾のようなものを作り、スピードスターも防ぐ。そして、その盾は膨張し、グレンを包み込もうと襲い掛かる。炎タイプにとってはかなりの脅威だ。

避けた瞬間、バブル光線で攻撃でもしてやるか、と密かに思っていたフラッドだったが。

グレンはそれを避けるどころか、逆に突っ込んで行った。

あまりに予想外の行動にフラッドは面食らったが、そればかりに気を取られてはられない。

ようやく起き上がったエンジェルに向かって、グレンに放つ予定だったバブル光線を発射する。

『穴を掘る!』

『甘いぜ!』

とフラッドが言うと、何とバブル光線が穴の中に入っていく。バブル光線も、所詮は『水』。水を先程から自在に操っているフラ

ツドにとっては、造作もないことかもしれない。
そして、穴を掘っていることによって逃げ場はない。恐らく今頃や
られているだろう。

そんな一連の動作を終えて、目の前を見てみると、水の中で、グレ
ンが溺れていた。

やはり、フラッドには理解しがたい行動だった。

『何考えてんだ、このバクフーン……？』

そう思い、フラッドはその水をグレンごと操り、地面に叩きつける。

壮大な水飛沫みずしぶきと共に、グレンの身体も地に落ちる。

そして、グレンが地面に激突した瞬間。

パリン、と身体が『砕けた』。

『……は！？』

当然、フラッドは驚いた。

しかし、よくよくそれを観察すると、砕けた身体からは血すら出て
いない。

それどころか、破片は光の粒子となって消えている……！

『……まさか！』

『気付くのが遅かったな！』

ようやく事態が飲み込めたフラッドは、直後に背に大きな打撃を喰らった。

ジャイロボールである。

これによって、フラッドは池の上空から地面に向かって落ちていく。何とか浮かぼうとするが、水の操作による疲労の為か先程のダメージがあまりに大きい為か、もしくは両方の理由が重なった為か、中々身体が言うことを聞かない。

『……………っ！？くそっ！』

そして、グレンはそのまま追撃をせずにこう言った。

『それじゃ、後はよろしくな。』

『……………？』

今度もグレンは意味ありげにこう言い、ただ落ちるフラッドを見送る。

あまりに不可解だったが、その理由は着地前に分かった。

その着地前に、フラッドは再び衝撃を喰らった。今度は全身に。

吹っ飛ばされながらみると、そこには、バブル光線でダメージを受けたはずのエンジェルが立っていて、電光石火で自分を吹き飛ばしたのだと気付き、そしてとうとう疲労がピークに達して意識が落ちた。

戦闘終了から数分後。

フラッドは目を覚ました。

起き上がるうとしたが、もう力が残っておらず、それすら出来なかった。

『……はあ、はあ、くそつ、強いな……!』

「それはそうよ。まずレベル。つまりは経験がグレンの方が豊富だし。」

『……あゝ、それはつまり、俺が弱いつてことか?』

「いえ。十分強いわよ。水を操れるなんてそうそうできることじゃない。」

『そうだよ!あれ何なの!? 凄いカッコいい!!』

エンジェルが目を輝かせながら尋ねる。

フラッドは、それに淡々と答える。

『いなくなる前に親に聞いた話だが、これは代々伝わる『水流操作』フラッズルーラー

つてやつらしい。文字通り、水流を操れるつてやつだな。』

『だが、あれは水流だけではないのだろう?』

『ご名答。水分子を操って防御壁にしたりなんかもできるし、ウォーターカッターみたいに切り刻むことも可能だ。』

「……だったら、そのウォーターカッターを戦闘で使えば……。」

その蒼の言葉に対して、苦笑いしながら否定する。

『いやいや、俺とてそんなに血が見たい訳じゃないしな。』

「……そうか。」

『それより、あの最後の攻撃。あれどうやったんだ?』

と、グレンが説明を始める。

『…簡単に言うと、まずは分身を作って水の中に突っ込ませる。その時、分身の背を蹴って俺が上空に跳ぶ。そして、エンジェルも身代わりを使ってそいつに穴を掘らせる。本物はこの時どこかに隠れている。そして、分身の俺にお前が止めを刺し、その隙に後ろからジャイロボールで地面に叩き落す。そして、待機していたエンジェルが電光石火で止めを刺す、って寸法だな。』

『……長いな。でも、なんとなくは分かったぜ。ありがとな。』

そして、そんな雑談(?)をした後、エンジェルが切り出す。

『で、どうするの、ソウ?』

『……どうするもこうするも、仲間にするよ。戦力にはなるしな。』

『私も同感よ。』

『無論、俺も。』

『……そう言うエンジェルはどうだ?』

『勿論オーケー』

全会一致。

これによって、フラッドは新たな仲間に加えられた。しかし。

『……で、どっちが俺のパートナーになるんだ?』

そう、パートナーが決まっていない。

蒼にするか、春香にするか。

二者択一だった。

と、ここで春香が言い出す。

『あなたが決めていいわよ。』

『……はい？』

「あなたがパートナーを決めなさい。私が蒼か。」
『成る程……。』

と、考え込み、しかし数秒後に即決した。

『コイツ。』

指差したのは、蒼の方だった。

一応理由を聞いてみると。

『……理由はないぜ？』

「……はい？」

『だから、勘に任せて選んだだけだ。』

『うわ、凄い適当な選び方……。』

かくして、一行はまた少し賑やかになった。

そして、旅はさらに北へと展開され、舞台は次の『国』へ……。。

第二十一話　　、水使い、（後書き）

という訳で、新しい仲間のフラッドです！

フラッド『よろしくな！』

因みに、名前の意味は、英語の『洪水（flood）』です。

フラッド『……おつかねえなオイ（汗）』

……だから、更新を避けたのもある（汗）

フラッド『……あゝ……（汗）』

で、では！

第二十二話、変わった『国』、（前書き）

今回はタイトル通りですね（汗）

そして、今回は結構、ギャグ要素が強めです。戦闘なんてありやしない（汗）

では、新章スタートです！

……何話続くかは、分かりませんが。

第二十二話、変わった『国』

蒼達は新たにフィオネのフラッドを仲間に加えた。その少し前。時雨達に視点を当ててみると。

「……南の方に来るとこんな町があるんだにや〜。」
『そうですね……。』

そこは、『エリア5』内で最南端に位置する、ロータムビレッジと呼ばれる『国』だ。
村なのに『国』と呼ぶのは抵抗があるかもしれないが、これは昔の名称がそのまま残ってしまった為である。

『国』という制度は、少し前に出来た呼び方だ。まあ、大方、村だの市だのと量が多いし、分けたって意味がないと思ったのだろう。それはさておき、時雨とアロマはロータムビレッジに来ていた。

「そんじゃ、早速どんな町か見てみることにするぜよ！」
『そうですね、行きましようか。』

という訳で、早速その『国』に入ってしまったのだが。

「何奴!？」

入った瞬間の仕打ちは、これだった。

現在、10人程に囲まれ、武器を向けられている。勿論、時雨は状況を理解できていない。この状況についていけない。アロマも同様だ。

「ななな、何でごわすか!？」

「妙な喋り方しやがって、どこの『国』の賊だコラ!！」

と、体格の良い兄ちゃんにドスをきかされる。

正直、時雨と言えど怯んでしまったが、それ以上に、アロマはもっと怯えていた。

目には涙を浮かべ、時雨のズボンの裾を掴んでいる。

しかし、怯んだとはいえ、状況はようやく飲み込めた。

どうやら、『賊』と思われるらしい。一体どういうわけか知らないが。

「ふ、ふざけるにやよ!……俺はなあ、旅人でやっ!？」

2回も噛みながらも、しっかりと自分が何者が伝えた。

しかし、当然、住人は警戒を解かない。

それどころか、そろそろ殺されかねない状況だ。

そして、逃げて、一晚野宿生活になるのか、と思った瞬間。

「……何ですか、その者は？」

と、10人の住人の後方から誰かの声がした。

それは、老齢の女性だった。

そして、それを見て、住人は声を挙げる。

「く、国長!? 何故ここまで……!？」

「いえ、面白い来訪者がいらっしやっただとお聞きしまして。」

と、柔らかな表情を浮かべて住人に返す。
そして、国長、と呼ばれた老齢の女性はそのままの表情で時雨に近づき、尋ねる。

「あなたは、何者なのですか？」

「た、旅人だぜよ。」

と、時雨が返答すると、国長は時雨の手を取って握手をした。

時雨はその突然の行動に驚いた。

住人が警戒しているにも関わらず、その対象者に握手をしたのだ。とても正気の沙汰とは思えない。

しかし、国長はそんな時雨の驚きを無視してこう呟く。

「……なるほどお、こいつは本物のようですねえ……。」

突如、口調が変わる。

しかし、時雨がそれに驚く間もなく、さらに驚くべきことが。目の前の女性が、ぐにゃぐにゃと、軟体動物のように動き始め、人間としての形が崩れていく。

時雨はさすがに驚きではなく恐怖心を抱き、手を離す。その瞬間、何かに引っかかって後ろに倒れてしまった。

「うぐっ!?!」

時雨がその元凶を見ると、あまりにショッキングな光景に失神したアロマの姿が。

「あ、アロマ!?!」

『おやおやあ、失神させてしまったかねえ。』

そして、時雨はアロマの元に駆け寄り、声を聞く。その方向を向くと、そこには、人間はいなかった。いたのは、1体の『ポケモン』。その姿は、ピンク色の軟体な身体を持つポケモン、と表現するのが正しいものだった。

「な、なるほど……、メタモンか。」

『正解だねえ。そして、本物の国長は家にいるさあ。』

目の前のポケモン、メタモンは気さくに答える。そして、続けてこう言う。

『んじゃ、旅人さんよお。この僕についてきなあ。』

と、メタモンは自分の体を変化させて、ストライクに変化する。そのストライクに、時雨はアロマを抱えて着いていく。……その後ろに、さらに10人の住人を携えて。

「あらあら、ようこそこんな辺鄙な村にいらっしやいましたね。」

そう言うのは、この『国』の国長だった。

メタモンが変身したのと全く変わらない雰囲気だった。つまり、それほどメタモンの変化は完璧に近いということだ。

因みに、この間にアロマは何とか意識を取り戻していた。

「それにしても、こんな村に何の用ですか？」

「いえ、ただ観光に来ただけですけどにゃー。」

すると、国長はふっ、と笑った。

「……？どうかしたのでござるか？」

「い、いえいえ、あまりに面白い話し方をするものですから……。」

そして、少しの間笑った後、国長はこう言う。

「いいでしょう。この村にはあまり観光するような場所はありませんが、泊まっていくなら了承しますよ。」

「本当でござるか！？」

と、ここでようやく妙なことに気がついた。

何泊するだの何だのを決める、あの場所が無いのだ。

「……そういえば、この『国』、入国審査がないのですかにゃ？」

「あ、ああ、そのことですか？」

国長は、その時雨の質問に答える。

「いえ、ほとんど来訪者がいないものですから、作る必要がないのですよ。」

それに、と国長は続ける。

「あなた、『単攻民族』は知っていますか？」

「んまあ、聞いたことはありませんがな。」

「そうですね。その民族がここ最近、頻繁に攻めてくるようになってたのですよ。恐らく、拠点にするには格好の場所なのでしょう。」

国長が言うには、ここ最近「単攻民族」が攻めてくるのだという。だから、1人の入国審査官を置くより、それを無くして10人程護衛用の住人を置いた方が良いのだ。

そして、攻めて来る理由は、国長も言ったように、来訪者の少ないこの村を拠点にする為であるからであろう、ということだ。

だから、時雨が最初に来たときに、10人程の住人に武器を向けられたのだ。

「……そういや、そのメタモンはどうして来たのでやんすか？」

「この僕の存在理由のことお？」

と、メタモンは答える。

そして、言う。

「僕はねえ、旅人が単攻民族かを見分ける最終兵器さあ。」

「……??？」

時雨は、当然メタモンの言うことが理解できなかった。

それを察したのか、メタモンはさらに詳細な説明を与える。

「ええと、分かりやすく言うただねえ。僕は人やポケモンに触れるだけで『気持ち』がある程度分かるのさあ。」

「……気持ち、かにやー？」

「そう。気持ち。まあ、ある程度っていうのは、『こいつが嘘をついているかどうか』を見分けたり、『どんな感情を持っているか』とかが限界って事。詳しく何を考えているか知るのは無理ってことだよ。」

「成る程、だぜい……。」

時雨は、ようやくこの『国』のシステムが少しずつ分かってきた。簡単に図示するならば、

誰かがやってくる

まずは村人達が脅す

メタモンが村長に変身してやって来て、村人達が倒されていれば処分、倒されていなければ心を読んで何者かを探る

……おおよそんな感じだろう、と時雨は頭の中で思う。
そして、

「まあ、こんなところで話をしてもあまり意味はありませんし、とりあえず宿泊場所に行ってみてはどうですか？」

と、村長が薦めるので、時雨はそれを受け入れ、早速、メタモンにその宿泊場所を案内してもらおう。

歩を進めること2分程。田舎なら何処にでもありそうな感じの少し古ぼけた宿舎である。

中に入ると、外観とは反比例であり、綺麗だった。

「おおつ、かなり立派な所だぜい!!」

「でしょー?ここを見ると、大抵の旅人は驚くんだよ。」

「確かに、これは驚きですね……。」

「……ああ。でも、欠点はあるよお。」

「『?』?」

重傷を負い、また医者にお世話になったが、それはまた別の話。

こんなはちやめちゃんな村人達の暮らす『国』での滞在は、まだ始まったばかりだ。

第二十二話、変わった『国』、（後書き）

ラーク『まったく、酷いことをするぜ、メタモン様……。』

メタモン『反省しないからだよお〜。』

……確かに、ラークが色々悪い（笑）

因みに、ラークは『店員（clerk）』が由来です。

ラーク『あ、安直だなオイ!!』

メタモン『君の性格にぴったりじゃないのお?』

ラーク『ひ、酷いこと言うぜ……』（泣）『

……で、ではでは〜（汗）

第二十三話、まだまだ続く不幸

旅館での騒動後、時雨とアロマは、まあラークによる怪我もあり、そのままその日は部屋で休むことにした。

因みに、部屋は机、座布団、布団、テレビなど、通常の旅館にあるものばかりで、至ってシンプルだった。

しかし、時雨はそんなものには興味を殆ど示さず、持っていた地図を開いた。まあ、サイバーシティから出た後なので、一種のカルチャーショックなのかもしれないが。

「……んで、今いる所がこのロータムビレッジ、と。」
『そのようですね。』

時雨とアロマは現在、位置を確認し、これからの動向を確認した。まず、ロータムビレッジで数日くらいは滞在。というか、しないと体が持たない。全てはラークのせいなのだが。

次に、近い町というと、『レリジオンシティ』である。簡単に言うなれば、現在宗教戦争を起こしている『国』である。避けて通りたいのだが、これから行く道は、そのレリジオンシティにしか繋がっておらず、避けられないのだ。

サイバーシティに戻るのも、まあ、そこで色々とやってのけてしまったので今更戻りづらい。

という訳で、行くしかないのだ。宗教戦争盛んな『国』に。

「は、なんか萎えるじえい。」

『語尾のお陰でまったくそうついう気がしないのですが……。』

アロマは苦笑しながらもそう返す。

と、その時、廊下を歩く音が聞こえてきた。

そして、戸を開けて中に入ってきた。無論、それはラークであった。

『へい、お待ち！飯だぜ！！』

『どこの居酒屋でござるか。』

『というか、もう回復したんですね……。』

『あたぼうよ！メタモン様に『鍛えられて』ちゃあ、こんだけ回復力があっても当然のことっ！！』

『……あ〜……。』

何となく、目には浮かんできた。

日課の如く、ラークが何かしらのくだらない理由で吹き飛ばされている情景が。

しかし、それは口に出さないでおく。

「ま、でも、ありがとウギ。」

『……初めて聞いた語尾ですね。』

「さっきテレビでやってたぜよ。」

『……そ、そうですか……。』

この後は、ラークに出された食事を食べた。

あんな性格をしておきながら、さすが旅館の主というべきか、美味しかった。

そんな食事の時間は、あっという間に過ぎていく。

一方、『国』のすぐ外では。

「……どうする？」

「まだ早いぜ。しかも夜だしな。」

「でも、夜の方が襲撃しやすいんじゃない……。」

「馬鹿野郎。俺達は夜戦に慣れてないんだ。翌日の……、朝にでも襲撃するぞ。」

「え、早く殺ろうよ。」

「なら1人でやってる。返り討ちにされるのがオチだ。特に、あのメタモンがいる限りはな。」

「む。ま、ポケモンに適うはずはないし、そっとしておくよ。」

「それなら結構。」

「それにしてもよ、うまくいくのか？」

「さあな。最善を尽くすだけだ。特に俺達は『ウエスタン』で壊滅の危機に遭ったんだ。」

「そうそう。その憎き主導者を殺すために、俺達『単攻民族』がいるんだから。」

「だからまずは、ここを占拠して、その主導者を殺す準備をする。いいな？」

その場で話していた全員が、静かに頷いた。

夜明けまでは、まだまだ遠い。

その頃、時雨はアロマを部屋に置いて、風呂に入っていた。旅の疲れがとれる瞬間だ、と時雨はつくづく思う。

「……いい湯加減でござるな。」

そう1人呟く。

因みに、純粋な旅人は現在時雨しかおらず、風呂も勿論1人だった。静かなことこの上ない。

そんな状況を活用して、色々と今までの経緯を思い返してみるか、とふと思い、実行する。

今から2、3日前。

『国』外逃亡を図り、成功したのはまさにその日なのだ。具体的には、偽造パスポートを作成し、それで入国審査官の目を欺いて『国』を出たのだ。明らかに犯罪であるが。

しかし、俺は、言ってしまったえばスパイの息子。しっかりとその血を受け継いだのか、このくらいは造作も無いことだった。

そして、行く当ても当然無かったが、近くに最先端技術の始点とも言うべき『国』、サイバーシティへ行く。

そこで偶然にも、蒼とエンジェル、更には理沙という少女にもあった。……そのパートナーにはしばらく会いたくは無いが。

だが、そこで休まることは無かった。爆破事件が相次いでいたからだ。犯人はフローガカカストロ。元ランド団の、組織員だった。それを、蒼と理沙が、倒し、ばく、だんを……。

『おい、シグレ、だっけか？湯加減はどうだい？』

「……………」
「……………」
『……もしもーし！？返事をしてくれると助かるのですが！ー！』
「……………」
『……………？』

ラックは、時雨に湯加減の具合を聞きにやってきたのだが、一向に返事がなかった。

さすがに怪しいと思って、戸を開けると……………。

浴槽に頭まで埋まっている時雨の姿が。
お湯に浸かりすぎて上せてしまっていたのだ。

『んなあああああつ！！！？？！しっかりして下せえ、お客様ああああー！！！！』

ラックはすぐさま時雨を浴槽から上げ、何とか事なきを得た。

ラックによる突撃の次は、風呂に上せて意識混濁。

「もはや、運が悪いとかっていうレベルじゃなくね？」「と時雨は薄れ行く意識の中で思っていたそうなの。

そして、日付が変わる頃。
時雨はようやく目を覚ました。

「……………うん……………。俺は、一体、何をしてたのかー？」

『……………上せるまで風呂に浸かりますか、普通？』

「あ、そうなのかー。」

『か、軽い……………。反省してませんね……………？』

『つたく、気をつけて下せえよ？』

「あ、ああ……………。」

すると、

『……………ふあ……………、眠くなってきました……………。』

『仕方が無いぜ、もう12時だからな。』

「……………そっいや、声が小さいでござすな、お前。」

『夜中に馬鹿でかい声で喚いたら、メタモン様にやられますからねえ。』

「ま、そりゃそうか。」

『とりあえず、今日はもう寝て下せえ。これ以上不運な目には遭いたくないだろ？』

「ああ、今日はもううんざりだぜい。」

『ではでは、ごゆっくり。』

と、ラックは旅館の主らしからず立ったまま会釈をすると、ドアを普通に閉めて出て行った。

『……………では、もう寝ますね……………。』

「ああ、お休みなサ、アロマ。」

『……………くう……………。』

「……だ、誰か、ツッコんでくれ……。」

……珍しく、口調でボケを狙ったらしいが、誰もツッコんでくれないので落胆した時雨だった。

やはり、最後の最後まで不運だった。色々な意味で。

そして、6時間後に夜が明け、太陽の光が差し始めた頃。

「……よし、仮眠は終わりだ。全員起きろ。」

「ふわあーあー……、もう行くんですか？」

「当たり前だ。狙うなら今がチャンスだ。ポケモンは手を出せないからな。楽に制圧できるだろう。」

「そうだな。じゃ……。」

と、『国』の外にいた男女が、一斉に立ち上がり、

『制圧だ。』

全員、声をそろえて言って、『国』に侵攻した。

それから10分後。

時雨は、辺りの騒がしさでようやく目を覚ました。アロマはまだ寝ているが、そのままそっとしておいて、時雨は窓の外を見る。

そこに繰り広げられていたのは、戦争だった。

「……は？」

時雨は驚いた。当然ではあるが。

しかし、これだけの戦闘ではここも危ない。アロマだってここにいるのだ。パートナーは守らなければならない。

しかも、中々に相手も強そうだ。立っている人をざっと見ると、そのようなことは容易に分かった。

そう思い、ここを守ることに決めた時雨は、外出を決断する。

「……一応、コイツを持ってくか。」

時雨は、一応無いよりはマシだよな、と思いながらリュックから黒い棒のようなものと銃を取り出して、外へ出て行く。

外に行くと、人同士が戦っていた。

剣と剣、拳と拳、蹴りと蹴り。様々な攻撃が交わっては、人が倒れ、

吹き飛ばされ、殺され、様々な目にあっていた。

「な、何なんだぜよ、これ……。」

時雨はその光景に少々慄きながらも、冷静にそのまま観察を続ける。すると、妙なことに気付く。

1匹として、『ポケモンが戦いに参加していない』。

これが表すのは、相手が『単攻民族』であるということ。それが分かった瞬間、突如。

「おらあつー！」

「！……！」

後ろから、『単攻民族』の1人が襲い掛かってきた。剣で首を切り落としにかかっていたのだ。

しかし、それを時雨はしゃがんで避け、すぐさま体を捻りながら銃のグリップで敵の顎を突き上げる。

スパイの血を受け継いでいるだけあって、戦闘は多少は出来るようだ。勿論、蒼や理沙と戦ったら瞬殺されるくらいしか実力は持ち合わせてはいないが、『単攻民族』相手ならば、この程度で十分であった。

そして、そのままその男の顔にめがけて銃を撃った。

が、何も出ない。

「……あ、あれ？」

時雨は、何度も何度も引き金を引くが、弾丸は一向に出てこない。この隙を、『単攻民族』は利用しないわけが無かった。

「くそっ！なめんなよ！」

と、グリップで殴られた『単攻民族』は体勢を少々整えてから、右ストレートを時雨に決める。

当然避けられるはずもなく、それを顔面に喰らう。

「くっ……。」

「おらあっ！！！！」

そのタイミングを見計らって、後ろにいたもう1人の仲間が、時雨の背中を鉄パイプのようなもので殴りつける。背中からは、ビキッ、と嫌な音がした。

「ぐはっ！」

そのまま、時雨は倒れ伏してしまった。

背中には激痛が走り、立つどころか、座ることすらままならない。やはり、実力は足りなかったのだ。というか、ドジを踏んで自滅してしまった。なんと愚かしいことか。

そして、時雨は剣を突きつけられた。人生最大のピンチに差し掛かった。

「お前、いつペンここで……、」

そして、『単攻民族』は剣を振り上げ、下ろそうとするが、

「死ね、つてか……？」

と、時雨は死にそんな状況にもかかわらず、剣を突きつけている男にそう返す。

続けて、はっ、と短く笑って。

「やっぱ、持って来ておいて正解だったぜ……。」

時雨は、持ってきた黒い棒を取り出して、ピンのようなものを外し、こっぴど叫ぶ。

「ま、自滅技に近いんだけどな!!」

瞬間、黒い棒はそこからは想像も出来ないほどの光と音を放出した。閃光手榴弾。別名、スタングレネードだ。無論、法律上、剣と銃以外に戦闘には使えないので、時雨のお手製ではあるが、威力は十分すぎるほどだった。

時雨も勿論ではあったが、その近くにいた『単攻民族』の目と耳を潰すことには成功した、と時雨は思った。無論その通りではあった。

(……あとは、効果範囲外の奴らが、倒してくれるのを願うのみだな……。しっかし、辛い……。)

時雨は、一旦旅館の前まで戻って、目と耳の回復を待つことにする。恐らく、数分とかかるだろう。

時雨が休んでいる時、その間にもう1人の来訪者がやって来た。

その来訪者は、全身黒に染めた服を着こなした男で、大口径の銃を持っていた。

そして、辺りを見回し、時雨の強力すぎる規格外の閃光手榴弾によって『誰彼構わず全滅している』状況を見る。

「……………」

彼は何も喋らぬまま、しかしこくりと頷き、倒れている『単攻民族』に近寄る。

そして、銃で素早く、両腕両足4つの間接を打ち砕いた。

「ぎっ、あああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

男は冷酷にそれを見下ろし、仲間の悲鳴に恐怖で慄いた『単攻民族』へと近づく。

そして、同様の目に遭わせてやった。弾倉を入れ替えながらも、およそ数分で、『単攻民族』の間接を全て打ち砕き終わった。

「……………」

男は、辺りを見渡し、何かを確認するようにまたこくりと頷き、颯爽とその『国』を去っていった。

結果、謎の男によって、『国』は救われた。

無論、閃光手榴弾で何も見えず、何も聞こえなかった住人達には何

1
つ
分
か
ら
な
か
っ
た
の
だ
が
。

第二十三話、まだまだ続く不幸（後書き）

時雨「お前、多分かの広告会社に怒られるぞ……？」

いや、君が言ったんじゃないか。

時雨「いやいや、現実的に見れば書いたのはお前……。」

……。

時雨「え？いや、何で手榴弾みたいなものを持って……、って安全ピン放したぜよ！？」

……（ポイ）

どかーん。

時雨「SEが酷いってギャアアアアアアッ……！」

……色々と失礼しました（汗）

第二十四話、絆（前書き）

……更新遅れて申し訳ありませんでした（汗）
それでは、1ヶ月振りの再開ですが、どうぞお楽しみください！

第二十四話、絆

時雨は数分後、誰よりも早く目を覚ました。

やはり、スタングレネードといった類に強いのだろうか。

そう思いながら、辺りを見回す。

「……………??」

やけに鉄臭い。

この臭いが当てはまる物質は現状ではただ1つ。

「……………」

時雨は、倒れている人物の1人を注視する。

そこにいたのは、何やら肘と膝から血を流して苦しんでいる『単攻民族』の姿だった。

いきなりシヨッキングな映像が飛び込んだが、それでまた失神してもられない。

「アロマ……………」

時雨は、アロマの無事を確認すべく、旅館へと急いだ。

旅館。

そこには、主であるラークがアロマの傍で座っていた。

『大丈夫かね、あの男は……？』

『大丈夫ですよ、きつと。またへらへら笑いながら帰ってきますよ……。』

アロマはそう言うも、やはり時雨が心配なようで、声が震えている。死んでしまつてたらどうしよう？そんな考えだけが頭の中をよぎる。

(……シグレさん……！)

と、その時、バン！と勢い良く旅館の戸が開いた。

その音に反応し、ラークが戦闘体勢に入る。ところが。

「おゝい、またなぎ倒すのだけはやめておくれやす。」

『！シグレさん！』

『お、あの男か！やはり無事だったな！』

と、ラークは多少警戒しながらもその声の主を見に行き、その姿を見た途端、その警戒を完全に解いた。

顔に多少傷や痣が見られるが、何とか大丈夫そうだ。

そんな時雨に、アロマは抱きつく。

『シグレさんっ！』

「お、無事だったきに。よかよか。」

『何処の方言だよ、それは。』

「どこでもええでござんす。」

『ま、そうだけだよ……。んで、外の状況は？』

「『単攻民族』は恐らく全滅じゃきに。全員両肘両膝を銃で射抜かれていたでござす。もう立てないでござすな。」

「お前がやったんじゃあるまいな？」

「まさか、俺もスタングレネードで気絶してたでありんす。」

「な、成る程な。」

ラークは、戦闘時に突如聞こえた奇怪な音と発光の正体が分かり、うんうんと頷いた。

しかし、とラークは言う。

「じゃ、じゃあ、一体誰があんなひでえことを……。」

「それはさすがに分らんきに。ま、気にしたら負けってことです
たい。」

「とにかく、無事でよかったですよ……。」

「まあ、そりゃそうじゃい。」

……結局、この襲撃は謎を1つ残したまま終わった。

いや、実際には終わってはいなかった。

まずは、『単攻民族』の処分。これについては、国際警察（ＩＰ）、もしくは世界警察（ＷＰ）に送られるであろう。そこで尋問なりなんなりを受ける羽目にはなるが。

次に、町の修復。男性達はその復興に向けて、戦闘によって崩れた家屋などを撤去したり、もう一度建てる為に木材を運んだりした。

無論、その中に時雨は含まれていた。

女性達は、農地の回復に加え、食事を作る役割を得て、黙々と作業をする。

『おお、頑張ってるねえ。』

メタモンがやって来た。

村人達は、そのメタモンに挨拶をしていく。

やはり、村を守る役割も果たしているが為、更には性格も悪くはないので信頼されているのだろう。

「……お前は本当に傍観してていいにや……。」

『んお？その声はシグレじゃないかあ。元気にしてたかあ？』

「元気も何も、こちとら無理に働いているのに等しいんだぜい……。」

「

『ん？それはどういう意味だい……、ってあれかあ？ラークの馬鹿野郎に与えられた傷かあ？』

「……大方正解でござすが。まあ、滞在させてもらってる身だし、これくらいはやらないといけないっぺ。」

『……本人がそう言うならいいけどさあ。でもあ……。』

すると、メタモンはグニユグニユと体をくねらせ、人の形を作っていく。

そして、体を発光させて瞬時に姿を似せ、完璧に人になる。

その姿は、まさしく時雨であった。

「……っっておい！俺の姿になるのかにやー!？」

『にやーにやーうるさいよお。とりあえずう、怪我人は休んでなあ。』

『

と、メタモン（時雨？）が時雨を片手でヒョイと掴み、旅館へ向か

つてボールのように軽々と投げる。
そして、旅館の前で作業をしていたラークの頭に、時雨の頭が激突し、両者共に軽く脳震盪を起こす。

「っ！！！！！」

『グオオオオオオオオオオオオツ！！！！！！！！！！』

時雨は声にならない悲鳴を、ラークはあからさまな悲鳴を上げてのた打ち回った。

『ありやりやあ、失敗したかねえ。』

「……わざとやったでしょう、メタモン様？」

『いやあ、まさかあ。』

メタモンに聞いてきた1人の住人に対して、不敵な笑みを浮かべながら答えたメタモンであった。

結局、時雨はお言葉に甘えることにして、旅館で休んでいた。

因みに、ラークは復活して、現在は夕食を作っていた。これがポケモンと人間の違いなのだろう。

などと時雨が思っていると、アロマが声をかけてきた。

『……………あの。』

「ん〜？」

時雨のいつも通りののくだけた言葉に対し、アロマはただ一言呟いた。

『……「ごめんなさい。」』
「ん?」

時雨は、頭を押さえながらも、起き上がった。

そこには、何故だか俯いて悲しげな表情を浮かべているアロマの姿があった。

そして、アロマに言う。

「それは、どういう意味でありんすか?」

『……………て。』
「???」

アロマは、そこで辛うじて声を張り上げて言う。

『……だって、私、何も……、守れないじゃないですかあ……………!』

「……………」
『私……、助けてもらって、ばっかりで、役に立ってないじゃないですか……………」』

その泣きながらの言葉に、時雨はただ溜息をついた。

アロマは、その意味が理解できなかったようで、いや、それを『悪い意味』として受け取ったために、さらに落ち込んだ様子になってしまった。

『……………やっぱり、私……………。』
「なあ、アロマ。」
『……………?』

時雨は、そんなアロマに声を投げかける。

で建てるのも正直凄い。

その中に男は躊躇無く入っていく。
そこにいたのは。

「おう、お疲れやなかったな。どうにもならんやろ。」

「……………」

関西弁を話す、黒い髪を持つ青年の姿があった。

その他の特徴は、漆黒の瞳、服も色が黒で統一されている。実に奇妙だ。

しかも、この青年、外見だけでなく雰囲気も変わっていた。というのも、あえて説明するならば、『いないはずなのにいる』ような非常に奇妙な違和感があるからだ。

そしてその横には、ムシャーナというポケモンがふよふよ浮いていた。

それはさて置き、男はその青年の奇妙な質問に対し無言で紙を差し出す。

そこに書かれていたのは、『処分完了』の4文字のみ。

それを見た瞬間、青年の顔は強張ったが、すぐにそれを止めて男に向けて言う。

「……………あのな、色々と気苦労がないのはわかるはずもないんやが、もう少し興奮したらどうなんや?」

「……………」

男はふるふると首を横に振る。

青年は、1つ溜息をついて、

「あー、分からん。分からんから、もう今日は働くといええわ。」

「……………」

男は1度礼をして、それからくるっと半回転して宮殿から出て行った。

男が去った後、ムシャーナが呟く。

『……………あなたのその天邪鬼、何とかならないのですか……………？』

「なんとかなるやる、アンフェア。」

『……………そうですか……………。』

ムシャーナ、アンフェアという名らしいが、が溜息をつく。

無理もない。今青年が言ったことは全て『嘘』。というか、それしか言わない男なのだ。

だから、先程の男との会話も、無茶苦茶である。

そして、この男の天邪鬼も何ともならないらしい。もはや癖になっているのだろうか。

『……………それにしても、『単攻民族』も活動が活発になってきましたね……………。』

「平和の為や、そら駄目やる。」

『……………まあ、そうですね……………。』

「それに、ここに恨みが無いしな。」

『……………だからこそですよね、それがこの『国』に影響を及ぼさないように、弥太郎さんが次々『単攻民族』を潰していくのは……………。』

今の会話、わかりづらいつと思うのでまとめると、「『単攻民族』はここに何かしらの恨みがあって、その力がここに及ばないように弥太郎という男が攻撃をし続けている」ということらしい。

『……………それで、これからどうするんですか……………？……………ランド団も動き始めてますし……………。』

「知ってる。」
「……それに、初^{はじめて}さん、あなたの同胞も動き始めていますよ……?」
「……それは知ってた。」
「……知らなかったんですね……。……もう今頃『レリジオンシテイ』の近くなんじゃないですか……?」
「でも、やる気あるし、俺は行く。」

そう言っつて、青年、終始^{しゅうじ}初は椅子にもたれ掛かったまま寝てしまっ
た。
行く気は毛頭ないらしい。

「……仕方ありませんね……。……まあ、面倒くさがりやですから
仕方ないのですが……。……ここは同胞に任せましょう……。」
そして、アンフェアは呟く。

「……今回こそ、決着は着くのでしょうか……。?」
それから、自分も眠くなり、初の太ももの上にふわりと着地し、そ
のまま寝入ってしまった。

第二十四話、絆（後書き）

最後に出てきたあいつら、ここで少し言いますと、正体はとんでもない奴です。

エンジェル「え？誰！？」

言えるわけ無いじゃん。

そして、時雨編はそろそろ終わりそうですが、まだ続きます（笑）

時雨「もう勘弁してくりゃね……。」「

いや、まだまだ苦しんでもらおうw

時雨「こ、こいつ鬼でござすよ……。」「

個人的恨みは無いんだけどね。

では、今回はこの辺で。

第二十五話、殺し屋と謎のポケモンと（前書き）

更新がまたもや遅れました（汗）

待っていて下さった皆様、申し訳ありませんでした。

第二十五話、殺し屋と謎のポケモンと、

襲撃から数時間後。

これ以上は負担を増やさぬよう、ということ、時雨は『国』から出ていくことにした。

その旨をメタモンに伝えると、『本人がいいならいいんじゃないの？』ということだったので、時雨は出国することにした。

『……怪我、大丈夫ですか？』

「……あのラークにかけられた奴はまだ引かないがな、まあ、あとは大丈夫でこわす。」

『…そうですか。』

アロマは笑みを浮かべて、時雨はその笑みに同じく笑顔で返し、それから前を向いて、出国していった。

……はずだったが。

『うおー！ー！ー！い！！餓別だこの野郎！ー！ー！ー！ー！ー！！！！』
「……って、またお前は何をギャアアアアアアアアアアアアアアア
！……！」

……餓別として投げられた食料入り袋（缶詰が大半を占めた）に、
また意識を数分もっていかれることとなった。

後に、ラークがメタモンに今まで以上のキツイオシオキを受けたの
は言つまでもない。

そんなこんなで、時雨とアロマは出国した。

「ちくしょー、あの野郎、絶対覚えてるがいいでやんす。」

『……最後まで元気のいい人でしたね。何か最後は、魂が抜けたよ
うな感じになってましたが……。』

「いや、あんくらいしてもらわないと、もう彼奴絶対反省しないぜ
い。」

『まあ、それは言えてますが。』

と、こんな会話をしながら、現在は東の方向へと進んでいった。

この先にあるのは『マグマの溜め池』と呼んでも差し支えないよう
な場所、その名も『ゲヘナゲート』である。

別名から察せられるように、ポツカリ穴が空いた場所にマグマが煮
えたぎっているような不思議な場所だ。

そこには、地の神として祀られるグラードンがいるとかそうでない

とか。
その為、

「……しっかし、なんか暑くなってきたぜよ……。」
『本当ですね……。何か頭がクラクラしてきました……。』

そこに近づくにつれ、尋常じゃなく暑くなってきたている。
因みに、現在の気温は31度。『ゲヘナゲート』付近では、おおよそ45度、或いはそれ以上に達する。もはやサウナだ。一番高いところではもはや70度は優に超えるらしい。
そんな上がっていく温度にとうとう耐え切れなくなったのか、

「……少し休むかあ。」
『そうですね……。』

という訳で、近くにあった名も無き林の中に逃げ込み、何とか暑さからは多少は開放され（今はまだそう感じているだけなのだ）、ひと休みすることにした。

「ふ〜、少しは楽になったっちゃ。」
『……林に入るだけでこんなに違うんですね。』

1人と1匹は、しばしその与えられた涼しさに感激しつつも木陰に座って休んでいた。
しばらく、こんな時が続けばいいな。
彼らはそう思った。
その時だった。

『うああアアああアああ！！！どいテくれー！！！』
『！！？』

猛スピードで、今まで見たことのないポケモンが走ってきたのを見たのは。

そのポケモンは勢いを殺しきれなかったのか、ドカツ、と思い切り時雨の鳩尾に命中する。

「オブスツ！？」

『アアアアアア、スマない！！今急いでるんだ！！』

「ったく、何なん……！！！！」

『きゃあああああつ！？』

と、いうわけで。

そのポケモンは、時雨達にもう一度詫びを言って逃げ、時雨とアロマも、そのポケモンを追いかけている『日本刀のような刀をそれぞれ2本ずつ持った男5人』の姿を見て一目散に逃げ出した。

「おい、あれ何なんだよ！？」

『俺を抹殺し二来た奴らだよ！』

『そんなことは分かってるので、何者か教えて下さい！』

『んなコと言ッてる場合じゃねえぞ！もっとスピーど出して逃ゲろオオオおお！！』

と、その瞬間、逃げる時雨の衣服を、男が刀で切り裂く。

「んなああああああっ！！！」

『な、何でこんなことに！？』

『非礼は詫げる！だから今八逃げるーーーー！！！！』

「『うわああああああっ！！！！』」

……そんなこんなで、悲鳴を上げながら10分程逃げ回らねばならなくなつた時雨とアロマだった。

あちこちに逃げ回って振り切つたのは、大体その位経つた頃だった。

「はあっ、はあっ……、な、何なんだぜよ彼奴ら……？」

『す、すまねえナ。変な目二、あわせチまつてヨ……。』

『……いえ、仕方がないですよ……。偶然ですからね……。』

時雨、アロマ、そしてとあるポケモンは息を切らしながらそんな会話をした。

そして、ようやく落ち着いた頃に、気になることがあつた。

今、目の前で話しているこのポケモン。今まで見たこともないポケモンだった。

姿は、はっきり言ってしまうと、色が特殊なこと以外は豚そのものであつた。

しかし、どこのエリアにいるという話を聞いたこともないし、先ほど図鑑を開いたが一切詳細はおろか、入ってすらいなかった。

つまり、完全に『正体不明』。

という訳で、尋ねてみることにした。

「な、なあ、お前、種族は何でっしゃる？」

『んん？アあ、俺の種族は、人間が名付けたみたいだが、『ポカブ』

、っっていうらしいゾ。』

『……ぽか……?』

『アあ。』ポカブ』ダ。名前は付けてもらってないが、自分デは『ブロード』って呼んでル。よロシくな。』

「あ、ああ。よろしく。」

『じ、こちらこそ……。』

どうやら、種族名は『ポカブ』、名前は『ブロード』というらしい。……やはり、聞いたことがない。

無理はない。そもそも、そんな種族自体存在しなかったのだ。

学会に発表すれば一気に有名人になれるようなものだが、相手の状況が状況だ。そんなものに出したら、捕まるかもしれない。……?

などと思っていると、ふと疑問に思ったことが。

追いかけてきたあの5人組、一体何者なのだろうか？
それを尋ねると、ブロードはこう答えた。

『ああ、アいつラは『PK団』とかイウ奴らだ。』

「PK……?」

何だかサッカーみたいな名前だ。

しかし、ブロードがそれが何の略称かを言ったら、そんなことは言
つてられなくなった。

『つつても、サッカーではなく、“Private Killer”
r”の略らしいけどな。』

「『……!?!?』」

そう、“Private Killer”、即ち『個人的目的を持
った殺し屋』集団、という意味合いになる。

これは本格的にまずい状況に追い込まれている。その危機感を改めて感じたところで、疑問に思っていたことに話を戻す。

どうして、プロードは狙われているのか？そもそも、このプロードは一体何者なのか？

その謎を聞く前に、

ズバツ！と、時雨の後ろにあった木が見事に切り倒された。

そこにいたのは、例の5人組の内の1人である。勿論、帯刀していて、邪魔な障害物とばかりに時雨に横薙ぎで斬りかかろうとする。

しかし、それに気づいた時雨は何かしゃがんで避け、拳銃をポケットから取り出し、その人の手首をゼロ距離で撃ってやった。

ゴム弾とは言え、かなりの威力だったようで刀を手から離してしまった。

続けざまにアロマが時雨の命令で、葉っぱカッターを繰り出し、もう一方の手に持つ刀も弾き飛ばす。

止めにプロードが火炎放射で足首を狙って、その人は立てなくなっ

た。初めて会ったにも関わらず見事な連携プレイを見せて、時雨達はまた逃走を開始した。

『くソ！火炎放射！！』

『こちらも！葉っぱカッター！』

しかし、もう逃げてばかりではいられない為、結局追いかけてくる団員を1人1人倒していく他なくなってしまった。

現在、ようやく2人目を倒し、さらに、そのまま3人目の団員がやって来ていた。

その団員は、刀を時雨に振るってくる。

ところが、時雨はこれを拳銃で防ぎ、蹴りで対応する。

「おおおおおおっ！」

「……ふん！」

しかし、その蹴りも、刀によって防がれてしまった。

さらに、その刀で時雨を吹き飛ばし、すぐさまそれを追いかけて時雨を蹴って後方の木にぶつけた。

「かつ……！！！」

『シグレさん！葉っぱカッター！！』

「甘い！」

アロマが援護とばかりに葉っぱカッターを放つも、それは2本の刀によって全て斬り伏せられたところだ。

『掛かりましたね……！！』

「何がだ……グツ！ゲホツ！？」

団員は、その場で咳き込み始めた。

実は、葉っぱカッターによって生まれる微風に乗せて、毒の粉を混ぜていたのだ。

しかし、この技には欠点があった。

「ば、馬鹿やろ……。俺にもやっつてどごすんねん……。」「あ……。あ……。」

そう。気づかない限り、『敵味方問わず』浴びせられてしまうということだ。

毒の粉の存在に気づくはずもなかった時雨は、モロに毒を受けていた。

結局、アロマが森を搜索して、モモンの実を見つけて、毒状態を治したのだった。

残る団員は、2人である。

偶然に巻き起こった戦いは、まだまだ続きそうだ。

第二十五話、殺し屋と謎のポケモンと（後書き）

と、言うわけで、新しくプロードが出てきました。

それにしても、何故『ポカブ』が図鑑に載っていないのか。その謎は、次回辺りにでも少し解明しようと思います。

第二十六話、残り2人+、（前書き）

今回は短めです。

そして、もう書いてしまったので言えることですが、次回も同じ感じかと（汗）

それでは、1ヶ月ぶりの更新です！
どうぞ！

第二十六話、残り2人、

現在、時雨とアロマとプロードが当たりを見回しながら歩いていた。走ってもいいのだが、そんなことで体力を浪費しても敵わないし、第一、この森の出口が分からない。

「……畜生、疲れたのだ……。」「
『でも、後2人いるンダよなあ。』
『一体、どこにいるんでしょうね……。？』」

時雨達はそんな会話を交わしていた。

いや、逆に今は、こんな会話しかしていない。話題が無いのもあるし、そもそもこんな状況で話題が浮かぶはずもなかった。

「……見つかんねーぴょん。もういいんじゃないんでござらんか？」
『後をつケラして不意打ちヲ喰らったらお仕舞イだつーの。』
『不意打ちは、嫌ですね……。』」

そして、とうとう会話が尽き、無言の空間が広がった。
しかし、数秒後、それを破るものが現れた。

「ヒヤッハーーーーッ！！」

突如、木の上から二刀流の男が下りてきた。
その刀は、プロードに向けられていた。

『うオッ！？』

プロードは、危機一髪でその斬撃を避けた。

次の瞬間、プロードは自らの体を多少の炎で包む。
そして、

『喰ラえ、ニトロチャージ!!』

男にそのまま突進した。

男は、1本の刀で直撃を防ぐも、勢いに負けてそのまま吹き飛ばされる。

しかし、身軽であるがために、スタッと地面に着地する。
そして、

「この裏切り者!死ね!!」

『勝手に裏切り者に仕立てアゲンな!!』

男は刀でもってプロードに突っ込み、

プロードは再び『ニトロチャージ』を繰り出して突進をする。

両者は再び激突し、今度はどちらも吹き飛んだ。

「くっ!?!」

『グアッ……!!』

男は流石に着地が出来ずそのまま尻餅をつき、プロードは刀で斬られてしまったのか、頭から血を流していた。

しかし、火の粉で傷口を焼き、強制的に止血を行う。

『グッ!コの野郎……!!』

「ふーん、すっごい無茶をするもんだ。」

ニヤニヤと、男は立ち上がりながら笑う。

その笑みは、嘲り笑うものだった。

「まったく、そんな無茶苦茶な戦い方してたら、もう1人が来た時には殺されちゃうよ?」

『うるせエな。コチトラ既に命は捨ててんだよ。お前らのようナ悪魔の連中カラ逃げた時カラな……。』

その言葉に、男の顔は、急激に変わる。

嘲笑から、憤怒へ。

「悪魔?はっ、『創ってもらった』くせに、よくもまあそんなことが言えるもんだ、なあ!!」

何か、非常に突っかかることを言った途端。

男は、刀で、今度こそプロードを殺すために迫った。

プロードは、ニトロチャージを使う。

さて、ニトロチャージとは、大体技から想像できるが、素早さが攻撃後上がる技なのだ。

既にプロードは、2回使っている。少ないように思えるが、これでも人相手に戦うのならば十分だ。

故に、プロードは人間には少々ついていけなくなるようなスピードで、男へと真っ先に突っ込む。それに、男は対応できなかった。

「ぐっ!まだまだ!!」

しかし、男は倒れない。
執念がそうしているのか、足を踏ん張って耐え、刀を頭上から振り下ろす。
そこに、

ガンツ、と。

男の腹にゴム製弾丸が撃ち込まれた。
その衝撃で、苦痛に顔を歪めた男は刀は手から落とす。
しかし、もう片方残っている。

それでプロードを叩き斬り、続けざまにこの男を斬ろうと思ったのだが。

それは、叶わなかった。

「…………グツ、ゲホツ!？」

男が突然喘息の発作でも起こったかのように苦しみ出した。

その正体は、男の周りに漂う、妖しい紫色をした粉。

毒の粉。

それが分かった瞬間、プロードは息を止め、ニトロチャージで一目散に男から離れる。

毒の粉で全滅するという二の舞を踏むことはなく、団員をまた1人、抑え込んだのだった。

これで残りは、1人。

しかし、その1人は、ポケモンを持っていた。
どうやら、リーダー格らしい。刀を持つ上に、ポケモンをもっているのは、この団員　性別は女だ　であった。
そのポケモンは。

「さて、1仕事頼むわよ、DCG 437。」
『…………む。』

何か変な記号のような名前と呼ばれる、ドータクンだった。
そのドータクンは、フヨフヨと女の周りを飛んでいる。
しかも、何やら改造が施されているのか何なのかは知らないが、周りにはフヨフヨと同じように飛んでいる、4つのドータクンと同じ素材でできている手が飛んでいた。
明らかに、普通のドータクンにはないものだった。
そんなドータクンに、女は命令を下した。

「さあ、今すぐアイツ達を潰すのよ。」
『…………む。』

ドータクンは、それだけ返すと、手を操り始めた。
そして、

その目の前20メートル程にいた時雨達に命中する。

当然、そんな不意打ち、勘が強いわけでもないので、避けることは出来なかった。

「なっ!?!」

『うっ!?!』

『ごおッ!?!』

時雨達はそれによって吹き飛ばされ、地面を転がった。そして、

「はあい、今日は。」

女が、姿を現した。

黒い笑みを浮かべて、女は挨拶の後、たった一言を述べた。

「早速だけど、潰されてくれない?」
「っ!?!」

時雨は、女が抜刀をしているのが見えた。故に、斬撃を間一髪で避ける。

「ふーん、面白。」

女はニタニタと笑いながらそれを言い、次にドータクンに命令をする。

「さ、完膚なきまでに叩き潰しなさい。」
『…………む。』

そして、ドータクンは、手を使ってアロマとプロードを攻撃し始めた。

攻撃方法は至ってシンプル。

ただ、殴るのみ。

4つの手で、容赦なく。

『うわわわわっ！』

『くそっ！舐めやがっテ！！』

しかし、それらを辛うじて避け続けるアロマとプロード。

時雨は助けに行こうとしたが、当然何か出来るわけでもない。しかも、そんなことより。

「ほらほら、よそ見してていいのかな。」

「っ！？」

女が、横薙ぎに刀を振るう。

時雨はそれを体を後ろに反らして避けた。

しかし、そのまま体勢の取りようが無く、そのまま地面に倒れてしまふ。

そして女は刀を、時雨の腕に刺す。

腕からは、鮮血が漏れて出た。

「がああああっ！！！！」

「…………ねえ。」

と、女は苦悶する時雨に、こう言い放った。

「何であんなモノ、守ってるの。」

「な、何で、かって……!?!」

時雨は、言った。

「そりゃあ、巻き込まれたから、な。今更後戻りなんて、できねえぜよっ……!?!」

「ふーん。」

女は、つまらなさそうに刀を引き抜く。

同時に、血が溢れ出た。

「ぐっ……!?!」

「巻き込まれた、って、お前、あれが何だか分かってるの。」

その時、女は言った。

衝撃的な、事実を。

「あれ、『創られた』んだよ。人工的にね。検体N O・D I H・4
98。『ただ殺すためだけに作られた、恐怖の殺戮兵器を作るプロ
ジェクトの一環』だよ。」
「さつりく、へいき……!?!」

何を言っているのか、理解が出来なかった。
いや、理解を、したくなかった。
そんな事実が、あつてたまるか、と。
だが、目の前の女は言った。

言……つ……て……し……ま……つ……た……。

それが理解できた瞬間、時雨は。

「……るな。」

「?」

顔を、憤怒で歪ませた。

そこには、悪を絶対に許さぬ表情が、完全に現れていた。

「ふざけるなあああああつ!!!!!!!!!!」

時雨は激昂し、女の腹を、容赦なく蹴る。

その蹴りの威力は半端なものではなく、女は吹き飛んでしまった。

「くっ!?!」

そして、その女に対し、時雨は。

「お前、俺を怒らせたな？」

「……ええ、それがどうかしたのかしら。」

女は平然と言うが、その内心では、とても恐れていた。

時雨から発せられた、憤怒、悲しみ、憎悪、後悔、無念。

全ての圧倒的な負の感情に、気圧されていた。

そんな女のことなど知るはずも無く、時雨は平然としたその女の態度にさらに怒り、こう言った。

「お前、ここで無傷で帰れると思うなよ！！」

そして、ポケモン達の激突も既に開始されていたが、時雨と女は、激突を始めた。

第二十六話、残り2人+、（後書き）

次回は、ポケモンが一切出てきません（それでいいのか？）。
時雨と、女の戦いに移ります。

第二十七話 『負の』人間VS『負の』人間 (前書き)

前回の後書き通りです。

それではどうぞ！

因みに、今回は約2500字となっていますので、スラスラと読めてしまうかと思えます(汗)

まあ、人間同士の戦いに、あまり字数は割きたくないのです。あくまで、これはポケモン小説ですから(笑)

第二十七話 『負の』人間VS『負の』人間

時雨は、女へと突っ込む。

当然、怒りで腕の痛みなど、忘れてしまっていた。

血が吹き出ているのにも関わらず、である。

その根気というか執念というか、女は気圧されそうになりながらも、刀を構える。

そして、

「うおおおおああああっ！」

時雨は、ゴム弾を撃つ。

しかし、所詮はゴム。刀で簡単に弾かれ、女はそのまま時雨の元へと走ってくる。

「さあて、そろそろ斬られてくれないかしらね。」

「そういうわけにはいかないぜよっ！！！」

時雨は女の刀を辛うじてながらも避ける。

その間にもゴム弾を撃つが、体を捻ったり、刀で防いだりと、全てが跳ね返される。

そんな拮抗が、しばらく続く。

「ほらほら、いい加減バテてきたんじゃない。」

女は息を多少切らしながらも、刀を振るい続ける。

一方で、女よりは守勢に回っている時雨は、腕の傷も相まって、相手を切らしている。

（くそつ、明らかに実力差がありすぎるでやんすよ！）

時雨はそう思う。

そこで、一旦女から距離を取り、拮抗を止めることにした。だが、それによって優勢に立っている女は、当然それを止めようとはしない。刀で時雨のことを斬ろうとしている。

時雨はそれを後ろに飛び退いて避けようとしたが、少々失敗し、何とか体は助かったが、服が切り裂かれた。一步遅かったら、確実に死んでいた。

（このままじゃ、冗談抜きで死ぬぜい！）

しかし、そんなことを思いながらも、時雨は諦めない。

実力差があっても、コイツだけは絶対に倒したい、そんな信念があったからだ。

その信念が、今、時雨を唯一動かす原動力なのだ。

だから、ゴム弾で女の腹に向かって撃つ。

女は、当然、刀でそれを弾く。

続けざまに、時雨は撃って、撃って、撃ちまくる。

それこそ、銃に装填された弾が尽きるまで、撃ち続けた。

「それで、何とかなるとでも思ってたんの。」

当然、女はそれを全て刀で受け止め、弾く。

息の乱れも当然あるはずがなく、まだまだ余裕といった感じだったが、時雨の狙いはそこではない。

狙いは、時雨の倒れた場所まで誘い込むこと。

銃で気を逸らしながら、そこに辿り着かせることに成功した。
そして、時雨は口を歪めた。

「……………終わりだがや。」

歪めた口からその言葉が発せられた瞬間。

女の足元で、1つの爆発音が響いた。

そう、爆弾。

サイバーシティでの爆弾の件で、病院で（勿論無断で）こっそりと爆弾の試作品を作っていた。

爆発するかどうかは分からなかったが、蒼達の解除する爆弾の解析を頼まれたときに出したデータを見て、似たものを作ったから自信はあった。

そして、爆発はした。

そう、『爆発は』。

だからといって、女が倒れることとイコールになるわけではない。

「やってくれるじゃない。」

「何……………!?!」

女は、倒れていなかった。

いや、『爆弾の置いた位置に、既にいなかった』と言った方が正しい。
女は言う。

「確かに上手かったわよ、あなたの爆弾の置き方。私でさえ気付かなかったわ。でも、土の掘った跡までは隠せなかったよね。そこだけ新しかったわ。そして、そこはあなたの倒れていた場所。そうすれば、わざわざ好き好んで行くような奴は、単なる馬鹿か、Mな奴だけよ。」

そして、その言葉は的確に的を射ていた。
しかし、それで揺るぐほど、時雨の精神は弱くはない。

「くっ、まだ諦めないぜよ!!」

時雨は、負けじと銃を再装填し、ゴム弾を女の顔に撃つ。
しかし、女はそれを体を横に動かして避ける。

それから再び、女は刀を持って時雨の方にやって来た。
完全に止めを刺す気だ。

が、時雨はそれを体を回転させて避け、見事に女に隙ができる。
その隙を利用して、時雨は再び女の腹を蹴り、同時にほぼゼロ距離で顔に弾丸を撃ち込む。

「ぐあっ……!!」

女は簡単に吹き飛び、時雨との距離が離れた。
と思ったのだが。

「……あああああああ!!」

初めて女は時雨の前で怒り狂って叫び、刀を構えて時雨を襲う。今度も、再び銃で撃とうと思ったのだが、何故か、撃てなかった。

「なっ！」

見ると、銃は見事に傷つけられていた。

特に、マガジン。吹き飛ばされる瞬間に、刀で辛うじてそこに打撃を与えることに成功し、銃自体も古かったため、壊れてしまったのだ。

そのチャンスを女が無碍にするわけもなく、刀で、時雨を斬りかかる。

時雨は、それを銃身で防ぐ。が、それは刀で弾かれた。

再び、女は刀を時雨の肩に目掛けて振り下ろす。

防ぐことに、2度目はなかった。故に。

「あああああっ！！！」

時雨は。

肩の付け根から、

腕を、切り落とされた。

「……………くくっ、あははははっ！」

女は、当然笑う。

相手の片腕を斬ったのだから。

相手がどこぞの殺し屋だったらまだ警戒すべきだが、所詮は男子高校生の年齢。

身体欠損による痛みは、耐え難いものには違いなかった。が、

「……………」

違和感を、覚えた。

何かが、おかしい。

女は、時雨を見て、気づく。

まず、時雨は苦痛に顔を歪めていない。

顔を歪めてはいるが、それは怒りによるものだ。

次に、時雨は平然と走っている。

普通ならば、痛くて立つことすらままならないというのに。

最後に。

斬られた腕から、血など出ていない。

「……………」まさか！

女は、それらから、1つの結論に達した。
達したはいいのだが、達するのが遅かった。

その結論とは、時雨が、義手であったこと。

これしか、考えられない。

そして、そんなことを考えて行動が遅れた相手に対し、既に殴りかかるのみの態勢までもってきている時雨が、負けるはずがなかった。

時雨は、全てをぶつけて発散するように、女の顔を殴りつける。

女は、それによって強制的に地面に叩きつけられ、脳震盪を起こしてそのまま壮絶な痛みも伴ったため、気絶した。

人間同士の勝負は、これにて決した。

第二十七話 『負の』人間VS『負の』人間 (後書き)

今回は、逆にポケモンしか出てきません(戦闘シーンのみは)そして、とうとう次回で、この章は完結すると思います。

第二十八話 , 人造VS人造 + , (前書き)

今回で、何とかこの章は終わりです。

更新は、だいぶ遅れてしまいましたが…… (汗)

それでは、どうぞ!!

第二十八話 人造VS人造+

その頃、アロマとブロードは、ドータクンと対峙していた。数としては、2対1。アロマとブロードの方が有利なように思われる。

『実力』と『4つの手』が、相手になければ。

『……む。』

ドータクンは手を2つずつそれぞれに飛ばし、攻撃をする。

アロマは1つを辛うじて避けても、背後からもう1つが迫り、アロマは殴り飛ばされる。

『うつ……!!』

『おい!?!……クソっ!!』

ブロードはアロマの方へ向かおうとするも、それを『手』が阻む。手は張り手をするかの如く、ブロードに迫り来る。

『邪魔ナンだよ!!ニトロチャージ!!』

ブロードは先の戦いで既にスピードが上がっているため、『手』に高速でニトロチャージを叩き込んだ。当然、速さが速い分、威力も強い。『手』はいとも簡単に吹き飛んだ。

『うつシヤあ!次!!』

ブロードは背後から、アロマと同じように迫る『手』を避け、そ

れに火の粉を繰り出す。
効いているのか、『手』は火の粉を振り払うように懸命に動いている。

このままニトロチャージで一気に攻め込む、と思い、用意をしていたブロードだったが。

それは、不発に終わった。

吹き飛んだはずの先程の『手』が、ブロードを攻撃しに来たのだ。
ブロードはニトロチャージの矛先を何とかその『手』に変え、辛うじて防ぐが、火の粉を振り切ったもう一方の『手』がブロードを襲う。

『くっ、ソオオおおオオっ!!』

ブロードは、この状況を打破する手立てがないことを悟り、叫んだ。
しかし、その『手』は、

『うわわわわわっ!?!?』

アロマが別の『手』から逃げている最中、プロードの横を通り過ぎ、その方向へと迫っていた『手』と、アロマを追っていた『手』が思い切りぶつかり、2つ仲良く、『手』は地面に叩き伏せられた。

『うッシヤ！ナイスだ！！』

プロードは、そのままその『手』をニトロチャージで吹き飛ばし、先程重ねられた2つの『手』の上に重なる。残るもう1つは、未だに宙を浮いていた。

これも早々に落としてしまおう、そう思っていたのだが。

1つ、見落としている点がある。

本当の敵は、『手』ではないという、最重要点が。

ドータクンも、ようやく『手』がやられ始めてきたからか、自らも動いた。

『……………む。』

ドータクンは、プロードとアロマに向かってシャドーボールを乱射する。

プロードはニトロチャージで素早さが上がっている為に避けきることとに成功し、アロマは大木に隠れて何とかそれをやり過ごした。ところが、そのまま終わってしまうほど、ドータクンは甘くはない。

『……ぬ。』

すると、ドータクンはサイコネシスを使った。しかし、その対象は2匹ではない。

後方を飛んでいった、シャドーボールの群れだ。

シャドーボールは、サイコネシスの誘導に従って、正しく2匹の元へと向かっていく。

『なっ！！？』

『う、嘘……！！！』

ブロードは避けようとするも、幾つかあたってしまい、アロマに至っては恐怖で動けず、結局そのまま倒れてしまった。

『おい、大丈夫か！？』

ブロードが声をかけても、アロマは返事をしなかった。

『クソっ、1匹でやれっで力！！』

ブロードは、自らの十八番であるニトロチャージを繰り返す。

相当にスピードが上がっていたため、防御の暇も、反撃の暇も与えぬまま、ドータクンに一撃を食らわせることに成功した。

このまま立て続けに攻めてやろう、そう思っていたブロードは、再び自らを加速する準備をする。

次の攻撃で、最高速度。

これで勢いがつくので、いくら防御にそこそこ強いドータクンとは言え、倒れてしまう。

が、そんなドータクンは。

『…………ぬ。』

そう言つて、何かを展開させた。
そう、バリアみたいなものだ。

そのバリアは見る見る内に広がっていき、遂には、森の全域にまで渡った。

『…………んだア、この技…………。』

ブロードは、自分の知らない技に対して、疑問を抱く。
しかし、このまま何も起きないと知ったのか、ブロードはそのままドータクンへと攻めていった。

但し、その攻撃は、残る1つの『手』によって防がれてしまったが。

『…………は…………？』

状況が飲み込めず、きよとんとするブロード。
そんなブロードを、『手』は、容赦なく投げ飛ばす。

『シまつ……!!!!』

プロードは、アロマの隠れていた大木にぶつかり、背中を強く打ち付ける。

さらに追い打ちをかけるようにして、シャドーボールをプロードの腹に決めた。

肺から息が出る。

まるで全身に痛みがあるように感じ、最早、声を上げることすら叶わない。

さらには、『手』がプロードに真っ直ぐに迫ってきて、大木と挟んで押しつぶそうとプロードを、『手』の手のひらが捉えた。

今度こそ、全身に痛みが生じた。

『……う……ッがア……!!!!』

メキメキ、と、骨の軋む音がする。

このままでは、プレス機にかけられたかのように、見るも無残な姿になっていることだろう。

そして、『手』は更に力を込めて、止めを刺そうとした。

『……ガアアああアアアアああアッ!!!!!!!!』

プロードは、断末魔を上げ、そして、押しつぶされた。

その、まさに寸前。

『……………む！？』

ドータクンの元に、『手』が吹き飛んで返ってきた。どうやら、吹き飛ばされてきたらしい。しかも、もう動かないところを見ると、機能も失ったようだ。

更には、よく見ると、『手』は半分程溶けていた。中々溶けないように作られた特殊な合金製だというのに。

ドータクンは、その正体を探るべく、前方に視線を向けた。

そこに居たのは、ポケモン 否、『ポケモンの形をした、何か』だった。

『……………Program Type DIH-498、始動準備完了。これより、敵であるProgram Type DCG-437の殲滅に取り掛かります。』

そして、プロードは、非常に事務的な言葉を述べ、次にこんなことを言い放った。

『Code選択……………、結果、敵を殲滅するのに最適なCode Cを選択致します。これより、Code Cに則り、殲滅を開始致します。』

そして、自らを炎で包む。

ニトロチャーシだ。

しかし、現在はドータクンの展開した、『トリックルーム』によって、素早さはガタ落ちしている。
ところが。

『Code C-1：炎の純度を上げ、蒼炎に致します。』

その炎が、蒼く染まり始める。

物凄く綺麗で、見とれてしまうのだが、ドータクンには、目の前にいる何かが実行しようとするのが、怖くて仕方がない。

ドータクンは、そういうわけで、『手』とシャドーボールを同時に飛ばしたのだが。

『A Code-1：前方より敵勢力襲来。蒼炎にて打ち払います。』

それらは、蒼い炎によって吹き飛ばされ、跡形もなく消えた。

炎の温度は、現在どうなっているかは知らない。それどころか、『炎の純度を上げる』のここでの意味が分からない。

それが、逆にドータクンの恐怖となっていた。

しかし、そんな恐怖を余所よそに、次なるコードを始動する。

『Code C-2：蒼炎への完全移行、完了。続いて、『浄化炎じょうかえん針しん』への準備、即ちCode C-8への移行準備を致します。』

そして、次に、プロードは莫大な力を溜め始める。

プロードの真上には、蒼い炎で形作られた、巨大な槍が形成されつつあった。

『……ぬ！』

ドータクンは、ここぞとばかりに破壊光線を放つ。

実は、ドータクンの覚えている技は、サイコキネシス、シャドーボ
ール、そして、破壊光線の3つのみだ。

『手』を操作するのに必要な能力に大部分を割いてしまったため、
起こってしまった現象だった。

そして、この技があることを悟られぬよう、『手』と破壊光線を除
く2つの技で、ここまで押し切ってきたのだ。

だから、殲滅の大チャンスであるこの機会に、破壊光線を放つた。
が。

『A Code - 1：前方より敵勢力襲来。現在形成されている内、
40%の『浄化炎針』を発射、撃退致します。』

破壊光線は、4割にしか満たない、蒼く、少々細めの槍によって相
殺された。

これで、ドータクンには為す術がなくなった。

現在は、破壊光線の反動で、しばらくは動けない。

そして、何よりも、先程の槍、いや、大きな針のことだ。

さっきのは、プロードが言うには、40%の力だという。

逆に言えば、それだけで、凶悪な破壊光線を打ち消してしまうとい
うことだ。

ということは、もし、100%の力で自分の体を射抜かれたら……。

どうなるかくらい、嫌でも想像がつくだろう。

そして、恐怖に怯えながら動かないドータクンに向かって、冷徹な一言を浴びせた。

『Code C-8：準備完了。充填率、100%。故、『浄化炎針』、発射。』

そして、ドータクンはそのまま蒼い針に射抜かれ、莫大なエネルギーがあつたのか、そのまま巨大な蒼炎を上げ、二度とその姿を見なかった。

その数分後。

時雨は、プロードの状況を案じ、これ以上放っておくと人間として間違っている気がしたので、仲間にすることに決めた。

そして、現在。

「いや、無事に生きてこれてよかったでござるな。」

『まったくだ。』

『そうですよね、やっぱり、こついつ平和な時が一番ですし……。』

時雨達一行は、その後直ぐに森を抜けることができ、次なる『国』へと進んでいた。

「しっかし、お前、あんな奴らから今までよく逃げ切れたにやー。」
『そうですよね。しかも、何か私が気絶していた間に全て終わっていましたし……。あなた、一体……。』
『ん？そうだなア……。』

ブロードは、どうして自分がドータクンに勝てたのかが記憶にないのか、考え込むが、やがて、こう言った。

『わかンネえけど、わかルノは、俺が人造だつテことだな。』
「そりゃそうだぜよ。」
『まあ、それくらいしか言えることありませんよね……。』

こうして、時雨達は旅を続けていくのであろう。と、ここで、ブロードが尋ねた。

『そういや、次ノ『国』って、何処ナんだ？』
「ん、ちよっと待つがよいわー!!」
『何でそんな口調なんですか!?!』

アロマのツッコミを無視し、時雨は早速地図を取り出して確認する。すると、そこに書かれていた『国』の名前は。

「…………レリジオン、シテイ…………?」
『…………外に出ていませんから、あまり聞かない名前ですね。』
『ま、楽しそうだから良いんジャねえか?』
「そうでい。それが、旅の心意気、ってやつでさあ。」
『何で江戸ッ子口調なんですかあ!?!?』

そんな会話を交わしながら、時雨達にとってはあまり馴染みのない『国』へと、好奇心を持って進んでいく。だが、気づくはずもなかった。これを機に、『運命』がまた、狂うことに

第二十八話、人造VS人造+、（後書き）

……人造ポケモンって、最早何でもありだなー、とか思いながら書いていました（笑）倫理には外れていますけどね。

さて、次はいよいよ理沙の章です！

実はこれが、一番バトルが凄かったりします。

どんな奴と戦う羽目になるのか、お楽しみに！

第二十九話、お墓参りと説明録、（前書き）

1か月ぶりの更新です。

こんな状態がこれから続くかもしれません、頑張つて更新しますので、気長にお待ちいただけると幸いです。

では、どうぞ！

ちなみに、今回から新しい章のスタートです！！

第二十九話 お墓参りと説明録

蒼と時雨がそれぞれに苦勞している時、理沙はというと。

「……。」

1人、ヘルズゲートの近くにいた。

正確にはそこにある、木で作り、地面に刺しただけの簡素な墓に。それに向かつて、理沙は目を閉じて手を合わせていた。

しかし、墓はヘルズゲートの近くにあるのでかなり暑い。下手したら脱水症状で死にかねないほどに。現に、それを表すかのように、汗が理沙の皮膚を伝っている。

それでも離れようとしないうその墓には、こう書かれている。

『石井 弥太郎 享年21

何処かに眠る君に捧ぐ』

そして、石井理沙は目をゆっくりと開け、それからスクリと立ち上がって、パートナーの待つ所へと戻る。その表情は、どこか悲しげだった。

しかし、その表情を誰にも悟られないように拭い去り、いつも通り

の表情を浮かべ、小走りで戻った。

「ただいま。」

『おっ、やっと戻って来たか!』

『やっと、ってそんなに時間経ってないでしょう?』

『ま、ざっと2分強、ってとこだね』

『うっせーな!俺にとっては結構待ったみたいに感じたんだよ!』

『人はそれを短気と言っただぞ?』

『そっだにや。そんなんじや長生きしないのにや』

『長生きを』させない』 ような奴に言われたかねえっ!!!』

……と、理沙が帰って来て早々、コントのような会話がなされる。

それは逆に、『仲がいい』ことの裏返しとなるだろう。それには色々な物語があるのだが、まあ、それはさておいてだ。

『それで、これから何処へ行くんですか?』

フレイムが、もっともなことを聞く。

理沙が、そうねえ、と地図を取り出して開く。

ここから最も近い場所は、当然ヘルズゲート。

その先には2つの分かれ道があって、1つはナチュラフォレストという名の森、1つはレリジオンシティという『国』があった。

そして、その道の脇には、名も知れぬ森。とにかく無秩序に木が生え、野生のポケモンも沢山生息している。しかし、アスナタウン、サイバーシティ、レリジオンシティとその間の道とで囲まれ、とに

かく広大だ。ポケモンに遭わない可能性もある。しかし、森が広い上に道も何とかあるくらいなので、迷ったら戻れない可能性もあるが。そんな地図をしばらく眺めてから、理沙はこう言った。

「なら、レジオンシティに行きましょう」

来た道に戻ってもつまらない。そう考えての判断だ。そして、そんな危険な判断に異を唱えたのは、フレイルムだ。

『止めた方がいいのでは……。』

しかし、自らも楽しんで着いていつている理沙の冒険心を真つ向から否定する気にはなれず、控えめな口調となった。

それに対し、チャームが『どーしてー？』と尋ねる。チーム1の博識、フレイルムがその問いに答える。

『レジオンシティとは、正式に言えば、"Religious City"ですね。』

『りりーじょん？』

『そうです。意味は『宗教』、文字通り宗教の最も盛んな『国』とされています。』

『そのどこが危険なのさ？』

フレイルムは、そのヘリウムのセリフに、はあ、と溜め息をつく。

『……皆さん、学校の授業って聞いてました？』

『いや、寝てた。』

ポルトが悪びれもせず、即答した。

その他、理沙とヘリウム以外の全員もそれに従い、首肯した。フレイムは、咳払いをしてから、話を続ける。

『……まあ、いいですよ。それで、その『国』では現在、2つの宗派が住んでいます。』

「それって、もしかして『真・平和教』と『G・F・教』のこと？」
『そうです。現在はその2つが住んでいます。この2つは対立関係にあるので、いつ戦闘が起きてもおかしくはない状況なんです。ですから……。』

『ちよ、ちよつとストップ。』

『はい？』

ボルトが、頭を抱えながら、フレイムの言葉を遮る。

そして、その様子だけでフレイムは、それが何を意味しているかを瞬時に悟り、こう尋ねる。

『……『真・平和教』と『G・F・教』の歴史から話した方がいいですか？』

『……あ、ああ。長くなるとは思うが、すまない、頼む……。』
『分かりました。』

と、フレイムは、説明を再開した。

『元々は、宗教が初めて生まれたとき、『G・F・教』、正式名称は『神父教』ですが、これしかなかったとされています。科学技術も、医療技術も、その他の知識も何もない時代ですから、神にすることがも多くなって、逆にそういった宗教が生まれやすい時期だったのかもありません。』

『そうかもね。まあ実際、神様はいるから強^{あなが}ち頭はおかしくはないんだけどね。』

と、『時渡り』の能力を持つ森の神、セレビイが言う。
凄く説得力があったので、皆はその言葉には納得した。
そして、フレイムはセレビイに促されて説明を続ける。

『その宗教は元々、『この世界を創造してください』というのは、神様だ。
ならば、それらを信仰しよう』と、有り体に言えばこういう内容だ
ったわけです。』

「でも、そこで考え方が変わった者がいた、ってこと？」

フレイムが頷く。

『ええ。確かにその信仰内容は理に適っていますが、その中にはそ
れに少々反抗する者が出てきました……。』

『それは何なのによ？』

『神は、この世界を創った後、何もしていない。事実、発展など
しないじゃないか。だったら、神様を信仰しているより、自分たち
が立ち上がって新たな世界を創っていいこう』、とこんな感じの思想
を持つ者が増えてしまったのです。』

『随分と思いが上がった奴らが出てきたな。』

『まあ、それが生き物なんだと思いますよ。そして、段々とこの思
想を持つ者は多くなり、最終的には『G・F・教』に対抗する勢力
とも言える宗派、『後生教』が誕生します。』

『生』を受けた『後』の改革をする宗教、という意味らしいですが、
とフレイムは付け加えてから、さらに続ける。

『そして、その思想は段々とエスカレートしていき、当然戦争も幾
度か起こります。すると次には『この世を平和におさめてしまおう』
という思想が生まれます。これが『平和教』です。』

「え？つてことは、『後生教』が『平和教』に変わったってこと？」
「その通りです。そして当然、それは1度、全て弾圧されました。」
「その詳しい被害状況は分かるかにゃー？」
「……いえ、残念ながら。」

腹黒ちゃんのサマーは、その返答に心底ガツカリした。

実はフレイム、それも少しは知っているのだが、敢えて言わないことにした。

そして、話を元の軌道に戻して進める。

「ですが、それで諦めるはずもなく、弾圧された中で生き残った人々が再結集し、『やはり、神に仕える敬虔けいけんな教徒は単なる暴徒ではない。神はそれらを押さえつけられもしない。つまりは、神はそこまで墮ちているということだ。であれば、我々が神に反逆の烽火のろしを上げ、まずは敵教徒を、それから神をねじ伏せてしまおう』という、強烈な思想が生まれます。今は少し緩和している節があります。これが現在の『真・平和教』なのです。」

まあ、これで以上ですね、とフレイムはふう、と息をついて言った。ようやくこれで、基礎知識は皆得たということになった。
しかし、ここまで来て、ようやくボルトは問い質す。ただ

「で、でもよ、そんな危険な『国』に行くのか？」

「んー、ま、いいじゃない、楽しそうだし。」

「……その冒険心はいつまで経っても変わりませぬね。」

と、フレイムが苦笑し、他の皆が同意する。

「なんていうかー、無謀っていうかー。」

「確かに、冒険心、っていうよりはそっちの方が強いかも。」

「む、無謀って……。」

『実際そうだと思うぞ〜？じゃなきゃ、まずそんな『国』に行こうなんて考えもしないぞ〜？』

『っていうか、リサは考えを変えないのかにや？』

「ま、まあ、行ってみたいなー、っていうのは……。」

その言葉に対し、フレームは少々溜息混じりでこつ告げる。

『……それで、『あの時』みたいに自分の身を滅ぼさないで下さいよっ。』

「……わ、わかってるわよ……。」

理沙はその言葉を聞いて、さっきよりは弱弱しく言いながら、背中をさすった。

しかし、すぐに気を取り直して、理沙は言う。

「でもまあ、戻ったってまた『サイバーシティ』に行くだけだし、このまま前へ進みましょうよ。」

『……ま、それもそうですね。』

と、そこで皆が同意し、先へ進むことへと決めた。

これから向かうは、まずはヘルズゲート。

そして、予期せぬ者との戦いが、その先には待ち受けていた。

第二十九話、お墓参りと説明録、（後書き）

ボルト『そうだそうだ、言い忘れてたぞ作者。』

？

ボルト『テメエ、『〜等』って括りやがったな！！しかも章題のところを！！』

いや、だって長いじゃん。前も言ったけどさ。

ボルト『……それでもやってほしいものはやってほしいんだよ！！』

え、じゃあ、『愉快的仲間たち』、ってことにしとく？

ボルト『何でだ！しかも『愉快的』って何だ！！』

愉快じゃん。

ボルト『……駄目だ、話しても無駄だコイツ……。』

……やっと納得してくれた？

ボルト『だったら、武力あるのみ！ハイボルト・サラマンダー！！』
『！』

え、ちよっ……。

（断末魔、割愛）

ポルト『まったく……。じゃ、また次回な！』

で、ではー……。

第三十話、目覚めし神、対するは気球と狐、（前書き）

新年、あけましておめでとございます。

…… 11日遅い挨拶となり、申し訳ありません（汗）

さてさて、新年最初の更新です。

ただ今テスト期間中なので急ピッチで仕上げてしまいましたが、そこはご容赦下さい（泣）

では、本編どうぞ！

第三十話、目覚めし神、対するは気球と狐、

『そついやよ……。』

ヘルズゲートに数分でやって来られた理沙達。

その時、ボルトがそこに立つただ1つの墓石を見て、ボソツと言った。

『リサの兄さんの墓がどうしてこんな所にあるんだ？』

「……。」

理沙は、そのボルトの言葉に戸惑い、そのまま口を噤んでしまった。しかし、ボルトがそう尋ねるのも無理はない。

親族の墓を立てるなら、ここからは少々遠いが、理沙の出身地に立ててしまえばいい話。

何故、こんな辺鄙な、しかもかなり暑い所に立てたのかは、謎と呼んでも差し支えないレベルのものだったからだ。

だが、さすがに思わず言ってしまったとはいえ、理沙が言葉に詰まるのは中々珍しい。

それを悟り、ボルトは謝る。

『……すまねえ、リサ。』

「い、いいよ、別に……。気にして、ないからさ……。」

明らかに嘘だった。

顔には動揺の表情が全面に出ていた。

しかし、それ以上の追求をすることはなかった。

と、この目で。

『……うにゃ~~~~~』

いつもは元気なはずのネイチャーが、今回は珍しく伸びていた。それはそうだ。こんな灼熱の場所に、セレビィという種族が住んでいた訳ではない。体が暑さに慣れていないのだ。

それを見て、理沙達はさすがに早く抜けてしまおう、と思い、まず、ネイチャーをボールに戻す。

『にしても、確かに暑いにゃ~~~~~。』

サマーも、フラフラしながら浮遊して言う。

こんな所にいたら、『脱水症状で全員ダウンしました』などという事態になりかねない。

ボルトの切り出した内容が内容だったので歩を進めがたかったのだが、今はそんなことを言っている場合ではない。

そう思って、さっさと出口の方へと向かっていった。

そして、このまま出て行けるはずだったのだ。

地震さえ、起こらなければ。

「……っ！何よ、この巨大地震！？」

理沙の言うとおり、かなり巨大な地震が発生したのだ。震度で表すなら、6強あたりだろうか。しかし、妙だ。

『……この地域……、いや、この世界は、大地を司るポケモンが全てを支配しているはず……。』

『だからー、そうそう巨大地震なんて起こらない、ってことー？』

『そうなの、ですが……。』

炎タイプであるにもかかわらず、この暑さにかなり堪えているフレームが答える。

そう、ポケモンには、様々なものを司るものがある。

そういったポケモンは、基本、『伝説のポケモン』、『神様』、『幻のポケモン』などと呼ばれるわけのだが、その中には、時間、空間、海、そして陸を司るポケモンも、当然いる。

つまり、神様が司っている限り、自然の摂理がどうこうは関係なく、巨大地震などそうそう起こらないのだ。

では、何故今のような巨大地震が起きているのか？

大分地震がおさまった頃になって、フレームが、いや、理沙達全員がある結論に辿り着く。

「……まさか……。」

『大地の神の、グラードンが起こしてる、ってことかよ……！？』

その理沙とボルトの言葉に返答したのは、

『……如何にも。』

マグマ、正確には、その中に潜むポケモンである。

そして、マグマから、あるポケモンが這い上がってきた。

まず特徴的なのが、巨体である。おおよそ3メートル半くらいはあるのだろう。しかし今は上半身しか出ておらず、それでも1メートル半はあるはずだ。また。左目は何かで傷つけられたのだろうか、古傷の跡があり、左目は閉じられていた。

次に、色。マグマにそっくりな、灼熱の赤色。その体には、黒い、不思議な文様が描かれている。

そして、全てを圧倒する、声、更には雰囲気。

それらを兼ね備えた神が、今、目の前に現れた。

『吾輩が、先の地震を発生させたのだ。』

グラードン。

大陸ポケモンと呼ばれる、巨大な、大地の神。

その昔、海底ポケモンのカイオーガと戦闘したという神話も持つポケモンだ。

『ほぐ、本当に出てくるとはなぐ。』

ヘリウムが、緊張感のない声で言う。

実際、彼は圧倒されているのだが、口調がおっとりしているので仕方がない。

と、ここで。

『……………汝、暑さには……………?』

『悪いけど、こんな暑さを感じていたら空高くなんて飛んでいられないぞ?』

そう、グラードンの言った通り、ヘリウムはこの暑さにはびくともしなかった。

元々自由に飛んでいる種族だ。空高くに舞い上げられて、その気温で寒いと感じてはどうしようもないのだろう、極度の気温でも耐えることができるらしい。

いや、これはヘリウムだけの特性なのかもしれないが、今はそんなことはどうだっていい。

「……そうになると、今回は気にせず動けるのはヘリウムとグラードンだけ、ってことね……。」

『そういうことである。加え、見よ。吾輩の特性を。』

グラードンは、顔を上に向けた。

皆も、それにつられて上空を見る。

すると、太陽の日差しが、段々と強くなっていくのを感じた。

グラードンの特性、『日照り』である。

『あ、頭が狂いそう、だ……!!』

ポルトが、とうとう暑さに耐えきれずに、倒れてしまった。

元々限界を迎えそうな気温がさらに上がったように感じたのだ。さらにはチーム内で最弱の体力を持つピカチュウのポルトだ。無理もない。

しかし、ほかの面々も、ヘリウムを除いて限界だった。

『へ、ヘリウム……!!』

チャームが、ヘリウムに呼びかける。

戦ってはいけない、と。

しかし。

『……じゃあ、見捨てろっていつのか？』

『そ、そうではなくて、さ……！』

『大丈夫さ。』

と、表情を変えずに（というか元から変えられないが）、ヘリウムはそう返した。

その返答に、理沙は。

「分かった、わ……。」

『リ、リサ……！』

「その代り、絶対に、生きて帰ってきなさいよ……！！」

『分かってるさ。』

ヘリウムが返す。

そこに。

『……わ、私は、まだやれます……！！』

『フレーム？』

『これで倒れては、炎タイプの名が廃りますから……！！』

フレームが、少し震えながらも、立ち上がる。

ヘリウムは、相変わらず変わらぬ表情で、

『それじゃ、お願いするぞ。あまり無理はしないようにな？』

『分かって、ます……！！』

『よし、それでは……。』

と、ヘリウムは後ろを振り向き、

『風〜!』

と、強力な風を生み出し、残りの面々を強制的にヘルズゲートから遠ざけた。

巻き込んではいけない、という判断からくるのだろう。

そして2人だけになった状況に、グラードンはクツクツと笑う。

『……面白き者共だ。名くらいは聞いてやろう。』
『それじゃ〜、お言葉に甘えまして〜。』

と、ヘリウムとフレイムは、こうとだけ言った。

『こちらはヘリウム〜。以後お見知りおきを〜。』

『わ、私は……、フレイム、です……!!』

『ふむ、ヘリウムにフレイム、か。面白い……。』

グラードンは、口元を歪ませ、しかし、次の瞬間。

『吾輩の目を潰した罪を、代わりに汝らで償わせて戴く!……!』

グラードンは、咆哮をあげる。

そうして、圧倒的に不利な戦いが始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7222j/>

蒼い空、白い天使

2012年1月11日00時59分発行